

過酷な世界で生き抜く  
ために

フドル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何故か死んでしまった主人公。キャラクタークリエイト中に沸いた好奇心で竜になってしまう。転生先はモンスターハンター、リアルとゲームの違いに適応しつつこの世界で生きていく…

初投稿です。

# 目次

11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	プロローグ
119	108	91	82	72	59	50	41	29	19	10	1

22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話
293	266	253	239	226	207	198	174	154	142	128



# プロローグ

どうしてこうなったんだろうか？煌びやかに光る鉱石がピツシリとはえている空間のため息を漏らす、右手：今は右脚を見ると鋭そうな爪と鱗が生えた暗緑色の右脚が目に入る。後ろを見るとがっしりとした身体、そして先端が鋭く尖った尻尾：

そこまで見て再度ため息を漏らす、ほんとどうしてこうなったんだろうなあ：

俺は転生者だ、でも神様にあつたとかそういうものはなく、なぜ死んだかも分からない、外を歩いていたら時に背後から何かがぶつかつた感触がしたから恐らくそれが死因だろう。

それで気づいたら白い部屋にいた、最初は意味が分からなくて混乱したが少しすると気持ちが悪く着き、部屋の奥にパソコンがあることに気づいた。

「なんでパソコン？そこは誰かが説明しにくるもんじゃないのか？」

疑問を口にしつつ取り敢えずパソコンの前に座り、パソコンの画面を覗き込むとパソコンの文字を読んでみる

「えーと、『この度何らかの原因で死んだであろう貴方に朗報です。只天国でやらかした神のお陰で魂が溢れており、天国・地獄両方ともに行けない状況になってやがります。

つきまして貴方はこのパソコンに従い、とつとと転生してくださいやがれ』丁寧なのか口悪いのか分からん文章だなこれ、取り敢えずこのパソコンの続きを見ていけばいいんだな？」

カタカタとパソコンを弄っていると次の文字が出てきた

「なになに、『ここでキャラクタークリエイトをしてください。それが貴方の来世になります。なお、曖昧な作り込みで生命として確立できない場合こちら側から手を加えるのでご安心ください。」

例 心臓などの必要な器官がない 頭がない など』か作り方が下手くそでも手を加えてくれるのは助かるな、こっちはこういうのは初めてだし安心だ」

文字を読み終わるとパソコンの画面が切り替わり白い画面が出てくる。画面の右側に様々なツールがあることからこれらを使って自分を作っていくことだろう。

それからなんとか色々試しながら自分を作っていく、ツールの数は多く試しにスクロールしてみても全然下につかない、どんなにあるんだろうか？など考えつつとにかくキャラクターを作っていく。

数時間後：

「やつと出来た、なんとか人の形にできたぞ…このツール多すぎてどれがいいのか全然わからん」

画面に浮かぶのは人間の男、数時間もかけて満足のいく出来の自分だ。後はこれで決定ボタンを押せば完了だ！と考えたところでふとこのパソコンはどこまでいけるのだろうか？と魔がさす。こんなに自由に作れるなら他にもいけるんじゃないか？考え始めたらしまらない

「自分は作ったし、どのツールを使ったかは覚えてるから大丈夫大丈夫、ちよつとだけ……そうほんのちよつとだけこの神様？製のパソコンがどこまでいけるか試すだけだから」

誰に言い訳してるかわからない言い訳をしつつ一度消去ボタンを押しまっさらな画面に戻す、取り敢えず何を作ろうと考えそういえば最近やっていたゲームのことを思い出す

『モンスターハンター』友達が勧めてきたことでやってみたところ面白くてハマってしまったゲームだ。ここ最近はやる事が多く、出来る時間は少なかったがそれでも時間があればやる程度にはハマっていた  
パソコンにその中の代表モンスターである飛竜を作ってみる。カタカタとパソコンを弄り数時間かけなんとか形にする。

「出来た、本当になんでも作れるんだなこのパソコン」

ここまで作れるのならいけるとどこまでいってみたいと思ひ、いつそのこと自分の考え

たオリジナルを作ってみようと考えてる。

再び画面をまっさらにして頭に思い描いた竜を作っていく

「まず骨格はやっぱり最強種と名高い古龍種にしたいよな、それから能力は何にしよ  
う？今わかる範囲で出ているのは炎、氷、風、水、透明、音、雷、あと龍脈かな？わか  
らん謎パワーでいいや、それらは出てきたから後はどんなのがあるんだろ？龍とか爆破  
か？けど龍は何処かで出てきていた様な気がするんだよなあ…ぶつちやけ全属性もつ  
た奴もいるんだからこの際何出てきてもいいんじゃないか？どうせこの画面じゃ何も  
付けないし」

ぶつぶつと呟きながらパソコンを使い組み立てていく、ここまで来たらいくとこまで  
いってみたいよね！と変なテンションになって没頭していく

おそらく数日…

「で、出来たぞ…これが最高傑作だ!!」

時間の変化がわかるものが無いため何時間かかったか知らないが完成だ！パソコン  
の中にはある竜が浮かんでいた。暗緑色の身体で骨格はドス古龍を参考にし身体はゴ  
ツくしっかりしている。四つ脚はその身体を支えるため強靱に発達して爪はどん  
な障害をも切り裂くというふうにごツく鋭い、尻尾はするりと長く先端にはどんなもの  
でも貫く棘が一本生えている。脳内設定では独自の鉱石を生成・操作でき、それを全身

に鎧の様に纏っているという設定だ、ここまで作ると更に魔改造したくなってくるというのが変なテンションになってしまった人のサガ、取り敢えず全方位見れるように眼を増やすかと考え頭頂部と後頭部に眼を増設、更に不意打ちで噛み付けたら一撃必殺じゃね？と考え適当な位置に口も増設する。満足感と共に冷静になる、流石にやりすぎた。取り敢えず増やした部位はリセットするかと考えパソコンを触ろうとした瞬間に鳴り響く音と同時に画面が切り替わり文字が出る。

「え？何この音？それに画面も閉じたし『1週間が経過したためキャラクタークリエイトを終了します。次の場面に進んでください』って…え？本当にいつてる？」

なんとか画面を戻せないかと四苦八苦してみるが画面は変わらず警告が出たので諦めて次の画面に移ることにする。

「俺、竜になるのかあ…眼とか口とか増やしたままなんだけどどうなるんだこれ？とにかく次に進むか…えっと『転生先を選んでください』か、うん、選べるんだこれ…普通先に来ない？こういうの？そこからキャラクター作っていかないの？俺、竜だよ？眼が四つで口に関して七つあるよ？完全に選べる世界限られてくるよね？キャラクター作り直せないかなあ？ダメですか？そうですか…」

疑問を口にしてるとパソコンから凄く苛立ちの気配がしたので諦めることにする、あのパソコン何なんだろ？中になんかいるの？怖いんだけど…

「転生先はくと、選択式かよ…えっと、『ポケッ○モンスター』あんな姿でいけど？ポケ  
○ンバトルにあんな殺意の塊入れるの？技選択が『切り裂く(ガチ)』『踏み潰す(ミン  
チ)』『噛みちぎる』『貫く』になるよ？対面トラウマになるよ？ダメじゃん次々、『ワン  
パ○マン』うん、怪人枠でいくならワンチャンあるよ？主人公に見つかるともれなくミ  
ンチになる確率が高いね？ポケ○ンをミンチにする可能性があるならお前がミンチに  
なれと？嫌だよ？何が悲しくてミンチになりに行くんだよ、逃げてても何故か偶然ハチ  
あつたりしてミンチになるんだろ？主人公からは逃げられないってことだろ？知って  
る！はい次ー『モンスターハンター』ここしか無いじゃん、もう次ないからここしか無  
いじゃん」

色々とツツコミながら『モンスターハンター』を選択する、画面が切り替わり次の項  
目を表示する

「今度はなんだ…『能力を決めてください(二つまで)』決めれるんかい！とにかくこ  
れはさっきの脳内設定の独自の鉱石を生成・操作でいいかな？いや、ここまできたら増  
殖も増やそう、ツツコミさせられたんだからそれぐらい増やしてもいいでしょ多分…そ  
れで、もう一つは何にしようかな？モンスターハンターでしかもモンスターで生きるこ  
とになるんだから適応能力でいいか」

能力を打ち込むとまたパソコンの画面が切り替わり、文字が出る

「これ何個まであるんだろ? 『出現する場所を選んでください』か、食料があつて誰にも見つからない場所でもいいだろこれは」

場所を選ぶとパソコンの文字が消えて声が届いて来る

『これで設定は終了しました、よき転生ライフを』

パソコンが輝きだし目を閉じると意識が遠くなり、俺は意識を失った…

「グルウウウウ」

意識取り戻し声を出そうとしたら唸り声が出た、訳がわからず立ちあがろうとするも体勢を崩し倒れる。ここで漸く状況を理解する

ーそうか、転生したんだった

さっきの唸り声からして自分はある姿になったんだろう、そう考えていると冷静になつてきたので辺りを見渡す

見た感じはどっかの洞窟で上には光を放つ鉱石があつて洞窟内は明るく出口は見当たらない、自分のすぐ近くにある小さな穴から風が少し入ってきてるから空気は問題無いだらう。

とにかく自分のする目標を決めよう…目的がある方がやるべき事が分かりやすい。

一つ、この身体に慣れること

この身体はパソコンで作ったままの姿なら、今の自分はまだ使っていない器官が沢山あるはず、まずこの身体の出来ることなどを把握して万全に使えるようにすること、設定では雑食で何でも食えるがここには鉱石しかないためタイムリミットはこの洞窟の鉱石を食い尽くすまで。その後は必然的に外に出る必要がある。外にはモンスターやハンターなどもいるだろう、その時に身体を使いこなせなくてはあつという間に狩られてエサか素材の道を辿るだろう：

それは嫌だ、転生してからわかったがまた死ぬのは嫌だ、2回目を貰えたのなら最後まで生きていたい

なので身体に慣れるのは急務である。

二つ、出来るだけハンターに見つからない

あいつらは危険な存在であると判断した場合は問答無用で狩りにくる：はずなのでもし見つかった場合は目撃者を消すしかないため出来るだけ見つかりたくない次第だ

同じ人間だけどそれは前までの話、今は違う存在だし、向こうはこちらを殺しにくるのにこちらは殺さないなんて割に合わない。もし見つかった場合は全力で殺しに行く。

三つ、生きること

どんな時でも諦めず生きる道を探すこと、自分の死ぬ確率を少しでも下げるために油断はしないこと。幸いコチラは転生者、モンスターやハンターのモーションがゲームと同じかはわからないが道具などは変わったりしないだろうしこれだけで初見殺しはだいぶ回避されるはずなので油断さえしなければそうそう遅れを取ったりしないだろう。

取り敢えずこれらを目標にして頑張っていこう。まずは一つ目の身体に慣れることからだな！四肢に力を入れて立ちあがろうとするがまだ人間だった頃の感触で行こうとしてすつ転ぶ

「グルウウウウ」

……慣れるまで大変そうだな、これは

## 1話

目標を決めてから多分数時間：俺はなんとか立って歩けるようになっていた。感覚的には四つん這いでハイハイしている感じだ。立とうとしてすっ転ぶを数回、立ててから歩こうとして脚がもつれてこけること数回：これは本当に出現位置を誰もいない所に指定したのは英断だったと確信しつつ、俺は練習を続けていた。

取り敢えず動けることにはなったのだから次はどうしようかと考える：走る練習もしたいが、ここは洞窟：走ってこけて勢い余って壁に衝突からの崩落コンボを決められたら目も当てられないため自重する。そこでまず自分の増設した他の部位に目を向けることにする。

まずは眼、今開けてる両眼とは他に設定ではあと二つこの身体には付いている。自分の頭頂部に意識を向け、いつもの眼を開く感覚で開くようにしてみる。

——開いた：両眼で見えていた景色が更に広がる、上部分にあつた光る鉱石が見えることから頭頂部側の開眼は出来ただろう。次は後頭部の眼を開くように意識してみるが

「グルウ!? グウウウウ…」

開いたがこれは…すっごく気持ち悪い、映る景色も頭頂部の眼のように繋がっている

のではなく、景色の途中で全く違う景色が映り込み、酷く酔う。

これは時間をかけて慣れていかないとダメだな…

今すぐ慣れるのはキツイと考え後頭部の眼を閉じる。頭頂部は映る景色が広がっただけでそこまで負担が来ないのでこのまま開いておくことにする。

次は口、これはどうなったんだろうと考え、取り敢えず増やした所を開いてから考えようと自分の胸の部分に意識を向ける。

ガパアと自分の胸が横に裂け、口が縦に開く。

うわあ…自分で考えて取り付けたとはいえ、これは結構…いや、考えないでおこう。胸の口を力を入れるとガチガチと口が開閉する、動きに問題はない…かな？一つ目は問題なしと考え、二つ目の箇所である背面に意識を向けるのと同時に後頭部の眼を開き、自分の背面をみる。

今度は縦に裂け、口が横に開く、裂けた範囲はかなり広く肩辺りから腰の部分まで裂けている。恐らくここが一番大きい口だろう。これ使い道あるのかな？上からの奇襲に奇襲返し出来ると前向きに考えよう、うん…

最後は四肢の部分、その前に後頭部の眼を閉じてからそれぞれの太もも辺りに意識を向ける。首を曲げて四肢を確認すると縦に裂けそれぞれ一つずつ口が開いていた。

ー取り敢えず口も問題なし…本来の箇所にある口以外は牙とか無いけど後々考え

よう、次は待ちに待った能力だな!!

ワクワクしながら自分の前脚辺りを鉱石で覆おうと意識を向けて、固まる…

ー能力つてどうやって使うんだ？発動方法なんて分からないんだけど？

取り敢えずどこでもいいから能力を使おうと四苦八苦するが発動する兆しが見えず、徐々に焦りが募る。

ーこれどうしよう？なんか野生のパワー（笑）みたいなもので何とかならない？無理？そっかあ！

自分の疑問に自分で回答するという行為を行いながらも力んだり、逆に脱力したりするがやはり発動しない。

ーぬうおおお!!発動しねえ!!そもそも発動条件も知らないのに急に使えつていわれても使える訳ないかあ…後回しにして腹も空いてきたし鉱石食つてもう寝よう…

能力のことは一旦諦め、壁に生えている鉱石の方に向かう。恐らく食えると思うがもしも食うのがダメなら強制的に『ワクワク！お外でサバイバル！ポロリ（命）もあるよ！』の開催が決定される。能力は使えず全方位（後ろは短時間でデバフあり）の視界と意外な所にある口、後は強靱な肉体（操作に難あり）で外に飛び出して、生存競争に参加する羽目になるのだ。フラグの臭いがぶんぶんするぜえ〜！具体的には外に出て探索中に大型モンスターと出会う可能性がなあ！

——頼むよお！この身体の雑食パワーを今こそ見せつけるのだあ！

この身体の可能性を信じつつ、目の前の鉱石を噛み砕く。暫く咀嚼してから飲み込む……これを何回か繰り返し、空腹がマシになった辺りで一旦やめて伏せる。

——これで異常が出たらこれは食えない、逆にまた空腹感が来たら鉱石を消化して食えるってことでいいかな？異常が出てもここはモンハンワールド、多分時間経過で何とかなるだろ……鉱石系だから裂傷あたりかな？伏せてたら治るだろ多分、ヨシ！

あつてるかわからない判断基準と異常が出たら行う行動を適当に考え、後はこの身体に性能に期待して眠ることにする。身体を横にして眠ろうとするがなかなか眠れず、ドス古龍骨格の寝方はこうだっけ？と寝方を変更するとすぐに眠気がしてきて、意識を落とした。

——おはようございます！って誰に言ってるんだ俺……

目が覚めて最初に感じたのは空腹……身体を起こし、ぎこちない歩き方で暫く歩いて回り身体に異常が出ていないことから問題はなしと判断して朝食の鉱石を頂く事にする……

鉱石を食べてる時にふと他の口に食わせたらどうなるんだろうと思いつき、試してみる事にする。先ずは胸の口を開き鉱石に喰らいつく。

——うーん、何か入ってる感じはするけど味はしないかなあ……感触もそんなになし、後は飲み込めるのかな？

胸の口に入れていた鉱石を飲み込んでみる。鉱石はするりと奥に入っけいき、腹が少し膨れた感覚がする。背面の口や前脚の口にも本来ある所の口で鉱石をへし折り、放り込んでみるが結果は同じ。後脚はどう頑張っても届かないために断念するが多分他と同じだろう。

——口はどここの部位も胃には通じてるみたいかな？呼吸とかはどうなんだろう？

本来の口を閉じて胸の口で呼吸を試みると意外と出来た、なんなら背面の口で息を吐き、胸の口で延々と吸うことも出来るし、他の口達で一気に息を吸うことも出来る、恐らく7つも口があるからそれに準じた肺になってるんだろなあ。俺の身体どうなってるんだろ？

——こんなに肺活量とかも凄いなら大咆哮とかの技も出来るかも？試したいけどここで試すと崩落間違いなしだし外に出てからかな？後は能力を発動出来ればほぼほ追加したのは確認出来るんだけどなあ……

あれからも何回か試しているが一向に発動しない能力にため息が出る、他のモンスター達は火炎袋などの器官があり、恐らく自分にもそれに類似する器官があるはずだと思っただが身体に意識を向けても口がガチガチするだけで能力はダンマリだ。

——器官さえ見つけてしまえば後は眼と口の時みたいにな手くいくと思うんだけど見つからないんだよなあ：仕方ない、身体をもっと動かせるように練習しながら探していくかあ。

あれからかなりの時間が過ぎたと思う。洞窟内の鉱石を半分以上食い尽くしながらも身体の動きはかなり軽快に動くようになってきた。歩くのは完璧に出来るようになったし走ることも出来る様になった。眼も後ろの景色にだいぶ慣れ、口はもつと素早く開閉することが出来ないか練習中。あと練習中に気付いたんだがこの身体はどうやら膂力が結構あるらしく、四肢踏みで遊んでたらかなりの振動が洞窟を襲った。転生してから最初の危機が自分の遊びで洞窟崩落で生き埋めの可能性とか笑えないよ…

さて、能力についてだがここまで経ってるのに未だに発動しない。もう無いこと前提で動いたほうがいいんじゃないかと最近は思い始めている。しかしそれでいくとどつかの自然調和の役目を負う古龍さんとキャラが被ってしまう。儘ならないものだなあ…と考えつつ今日も身体を動かしていく。

——そういえばこの身体って鉱石が食えるんだから岩とかもいけるのかな？舐めて

みた感じ砂っぽくて食いたくは無いけど胸の口とかは食感の薄らとしか感じないし案外いけるんじゃないか？よし！善は急げだ！早速食ってみよう、もし行けるなら食費の軽減になるかもしれないし：

更に半分になった鉱石群に目を向けつつ、近場の岩に食らいつく、暫く咀嚼し飲み込もうとするが喉奥？辺りに違和感を感じた。

——何だこの感覚？喉奥…なのかな？胸の口だから胸奥か？いつもならすぐ飲み込めるんだけどやっぱり岩はダメなのか？取り敢えず吐き出そう。

引つかかっている所辺りに力を込めて吐き出す、吐き出して地面に転がった岩を見てみるがそこには鉱石が…ん？鉱石？

——あれ？鉱石？岩を食ったはずんだけど何で鉱石を吐き出したんだ？岩の中に鉱石が入ってたのか？

疑問に思いつつもその鉱石を口に入れて飲みこむ、今度は喉奥に引つかかることなく胃に収まった。

——岩の中に鉱石があるならまだ食糧はあるのかもしれない、周りの岩を食って確かめてみるか

周りにある岩を口に入れて咀嚼して飲みこむとやはり感じる違和感、吐き出すとやっぱり鉱石が転がっていた。

——おお！やっぱり鉍石が詰まってる！胸奥で感じる違和感は岩になんかしてるのかな？溶かしてたりしてるとのなら丸呑みでも大丈夫か？

食糧が増えたことを喜びつつ岩を胸口に入れてそのまま飲みこむ、暫く違和感を感じた後に吐き出すとそこには岩の形そのまんまの鉍石があった。

——形とかそのままの鉍石が出るから岩みたい見えてるだけで実質ほぼ鉍石みたいなものなのかな？

鉍石を観察しつつあまりにも口に入れる前の形にそっくりなのでどうやってそんな表面だけ岩になってるのだろうかと疑問に思う：それならまだ岩そのものを鉍石にしていると言われたほうが納得がいく…

待って、岩を鉍石にする？

——もしかして奥の方で鉍石に変換してる？お、落ち着け先ずは確信が先だ…

少し震えながらまた近くにある岩を胸口に入れて飲み込み、違和感を感じたと同時にすぐに吐き出す。出てきた岩を見ると岩の角辺りが鉍石化していた。

——やっぱり：岩の中に鉍石があるんじゃないやなくて岩が鉍石になってたんだ。なら違和感を感じる所辺りにあるものがそれを行うってことか？

ものは試しと違和感を感じた所辺りに力を込めつつ背口から空気を含み胸口から吐き出す。すると胸口から出たのはただの息ではなくキラキラとした物質を含み息だつ

たが、こっちはそれどころでは無い

ーよっしやあ!!能力の手がかりだあ!!やっと思つたあ!!

やっと思だ!やっと思つたんだ!喜びでジャンプしまくり辺りが振動で揺れ、頭に石が落ちてきたあたりで冷静になる。恐る恐る上を見て、崩落の心配がないことにホッと息を吐く。

ー手がかりさえ見つけたら後は使い方を学ぶだけだ!感覚的には恐らく胸口の喉辺りにある。あとは他にもその感覚がある場所を確かめるだけだ!

食糧が少なくなっているがこの能力があればある程度なら増やせるし、やっと思つけた手がかりだ。俺はワクワクしながら能力の発動方法の確認作業を開始した。

## 2話

能力の発動方法がわかり、色々試してみたがどうやら全ての口の奥に同じ器官があることがわかった。取り敢えずそれらの名前を鉱石袋にする。少し安直かも知れないが分かりやすいのでこのままにする。それから自分は雑食ではなく鉱石食に変わっていったらしい。恐らく他に何を食べても問題は無いが鉱石以外を食べると喉奥で能力発動の感觸がするので、そこで鉱石に変換してから飲み込んでいるのだろう。まだ岩しか試していないので確信は出来ないうが多分これで間違っていないだろう。それから喉奥の器官がそれぞれ同じ所に繋がっていることに気づいた。何回か能力発動を繰り返して漸く気づいた箇所がこれが自分の能力発動の核部分だろう。これは鉱玉でいいか。これが活性化することで能力を発動するのだろう。

——よし、ならこの鉱玉を意識すれば……！

鉱玉に力を込める感覚を行いつつ、自分の前脚に意識を込める。するとピシピシと前脚から音がして鉱石に覆われていく。

——やった！成功だ！後はこれをマスターするだけだ！

前脚に意識を向けつつ、鉱石の状況を確認する。脚首辺りまで覆われている鉱石は、暗い白色で澱んでいる。更に増殖させる意識を向けると関節部分まで伸びてきて、覆った部分を少なくする事は出来ないが砕く意志を向ければ、呆気なく砕けて粉になった。

――少なくともするのは無理だから解除したい時はその部位の鉱石を砕かないと駄目と……次は鉱石の特性かな？

自分の能力設定では「独自」の鉱石の生成・操作・増殖なので何か特性がついてる可能性が高い……はず。この色が特性だよなんていわれたらシヨックだが流石に無いはず……無いよね？

――これもまた時間かかるんだろなあ……取り敢えず一個ずつ試していくかあ

能力発動の発覚までにかかった時間を思い出しつつ、少しうんざりしながら思いついた事を試していこうと行動する。

案外すぐ見つかった。自分の鉱石の特性は圧縮による硬度の硬化だ。力を込めれば込めるほど鉱石は小さく硬くなっていき、限界まで硬化した鉱石は自分の爪でも砕けないし、口でも噛み砕けない。また、全体を薄くすれば刀のような物にもなり、試しに圧縮した鉱石を尻尾に纏い鉱石に振ってみたところ驚くほどずるりと切断することが出

来た。他にも思いついたものは試してみたが、上手くいったのは圧縮だけだったので、これが特性ということにする。

ーよし、大体試せたし次は鎧化だな。これが成功すれば大まか設定通りだ。

能力発覚からスルスルと確認作業が進み気分が良くなりこのままいけばいいなあと身体全体を鉱石で覆っていくが顔の部分はまだ少し怖いのでそこは除去する。顔を除く全身を覆いつくし、成功だと思いつながら動き出そうとするが動けない

ーう、動けねえ：そりゃ関節部分とかもガツチガチに鉱石で覆えば動けなくなるのも当たり前かあ：口も開かないし

完全に鉱石に覆われて動けない醜態を晒しつつ、胸口に力を込めてもうんともすんともいわない姿に久しぶりにため息を吐く。さつきまで順調にいつていただけに気分は更に落ち込む。

ー取り敢えず鉱石は砕いて対策を考えるかあ

鉱石を砕き粉にする。身体が動くことを確認すると伏せて考える。

ーさて、どうしようか？完全に覆うと身体は動かない、動きやすさを重視すると覆える部分が脚の一部と顔ぐらいになるかな？胴体を覆うと身体を曲げることが出来なくなるし、尻尾や首も同じ：うーん、久々に難問が来たなあ

一番のメインと考えていただけにシヨックは大きく、何とか実現したいが考えが思い

つかない。

——何も思いつかないなあ、鉱石操作の練習をすれば何とかなるか？

考えを巡らせつつ、鉱玉に力を込めて前脚を鉱石で覆いそれを砕く。乱雑に砕けた鉱石に意識を向け、再生するように念じるが動かず、なら増殖しろと命じたところ、石サイズの鉱石群が音を立てて大きくなる。

——元の形には戻らないけど、砕けたものは増殖することが可能でそれでも増殖可能な量は決まっていると：増殖可能時間とかあるのかな？

石サイズから一回り大きくなったそれらに目を向けつつ、確認事項が増えたなあなどと呑気に考える。

——食糧が厳しい時に増える確認事項、こうなったらとことんやってやらあ！けどその前に不貞寝する！

自分の中の設定が頓挫しかかっていることに思ったよりダメージがあるので今日は眠ることにする。お休みなさい!!!

時間は流れ、鉱石能力について分かったことが色々ある。まずは鉱石の切り離しから

の増殖は時間制限があつたことだ。これは寝る前に鉱石を「そのまま」「石サイズ」「粉」まで砕いた後に時間を置き、増殖を試したところ反応が無かつたことから発覚したことだ。そこから時間ごとに試してみたが、一時間が増殖限界時間だ。しかし自分が触るとそれはリセットされるらしく、触つてから増殖を命じると問題なく増殖した。次は鉱石弾を発射出来たことだ。鉱石プレスを吐く練習をしていたところ圧縮したらどうなるんだろと考え、実行したら石サイズの鉱石が鉱石袋に形成され、それを溜め込んだ息と共に放出することで発射出来たのが実情だ。更にこの鉱石はまだ大きくすることと形状を変形させることが可能であり顔口いっぱい大ききで先端を尖らせ発射したところ、洞窟内の一部をぶち抜き、ついでに崩落した。お陰で洞窟内の生活圏が少し小さくなりました。はい。

そこから副産物で発覚したのだが、どうやら自分の肺は空気を元からある程度溜め込んでいるらしく、数時間程度なら息を止めることが可能で、その空気のお陰でさっきの鉱石弾を実現できたみたいだ。

最後に1番深刻なのが、食糧問題だ。岩を鉱石に出来るのだから問題ないとタカを括っていたのだがどうやら岩を鉱石化させるにあたる消耗と鉱石化させた岩の補充量が一緒みたいで食つても食つても全く意味がありませんでした!!お陰で洞窟内の鉱石を食い荒らし、今は薄暗い洞窟で生活している。

そう、薄暗いのだ、周りの鉱石は全て食べ、あと残っているのは上で光を放つ鉱石だけなのだ。それもあらかた食べてしまったので後ほんの少ししか残ってないのだ。そのため少しでも消耗を避けるため動くことは極力せず、能力の練習だけ行なっているのが現状だ。

——食糧はあと僅か、後数本を食ったら外に出ないといけないだろう。何とか鎧化の実用にいけたらいいんだけど……

伏せて動くことなく生成した鉱石をどうにかしようと考えを巡らせるが上手くいかない、最近では食糧の節約を開始しているので余計に思考がぼやけてくる。

——どうする？外に出るか？しかし外は過酷な世界、少しの油断が命に関わる。出来れば万全な状態で挑みたい……

思考が外に出ることをすすめるが、やはり万全な状態で出たいと待ったをかける。少しでも能力向上を行えないかと鉱石の生成と破壊を繰り返して増殖させる。

——あーあ、あの増殖した鉱石で腹満たせたらいいんだけどなあ……消耗と補充が一緒だから意味ないし……

砕けて増殖する鉱石を視界に入れて思考を巡らせる。その鉱石を口に入れても鉱石の消費と補充が一緒だから腹は空く一方なのだ。勿体無いから食べるけど……

——砕けた部分の増殖かあ……何かに使えないかな？

自分の能力向上に役に立つかもしれない事は思い付いたことから何に使えるか考えてみる。今回は砕けた部分の増殖：部位破壊された所の再生か？

ーもし破壊されたらその部分に鉱石を生成してから操作の能力で操る。それが出来たら不意をつけるか？

恐らく相手も破壊した部位には意識を緩めるだろう。そこに不意をつけば有効打を打てるかもしれない：

ーこの使い方は一考の余地があるかもしれない。他にも使い方はあるかなあ？

破壊された部位の再生かあ、盾を生成したら役に立つか？もし砕けても即座に再生する盾か：ん？んん？

自分の頭に電流が走った感覚がした。もしかして鎧化問題を解決できるかもしれない！

即座に立ち、自分の身体に鉱石を纏っていくが今回は本来より薄く、動けばすぐに砕ける程度の硬度にしておく。やがて全身を覆い尽くし鎧化が完了した。

ーこつからが本番だ：頼むから成功してよ：

祈るように身体を動かす。関節部分などを纏っていた鉱石が砕けるがそこに増殖の能力を働かせる。すると砕けていた部分が再生し、動き終わった時には問題なく鎧姿のままだった。

「ーやった！成功した！後は砕けていないところを圧縮して砕ける部分は自分の力で破壊できる程度の硬度にすればいい」

最終問題を解決でき、歓喜に包まれる。飛び跳ねたいところだが前回の過ちは繰り返さないように静かに喜ぶ。

「ー常に鉍玉に消費を強いるけど身を守るためだ。本来より食う量が増えるだけだしそこまで問題はないだろうし、動いた時に砕けた鉍石は罨にも使えるかもしれない。デメリットより得られるメリットの方が多いためこの方法でいこうと決定し、動いても砕けなかった鉍石部分の圧縮を開始する。」

「ー少し重くなつたけど動けない程じゃない。後は頭部も覆えば鎧化は完成だな……頭部に鉍石を纏つてから眼を開くが周りが暗い白一色だった。」

「ーあ、そっか、全部覆えば見えなくなるか  
少し眼の部分の鉍石を薄くし、視界を確保する。ついでに各口部分に工夫を施し、問題なく開くようにする。更に砕ける部位の鉍石の硬度も調整し、今ここに鎧化が完成した。」

「ーよし！これで完成したぞ！これが俺のオリジナルだ！」

ここに旅立つ準備は整った。後は上の鉍石を食らい、外に出るだけだ。

「ーついに始まるんだ、生存競争が……外に出たら問答無用で始まるんだ。何処まで出

来るか分からないけど、必ず生き延びてみせる。

改めて自分の決意を呟き、鉱石を食う。ここにある光源は後一つ、これをライト代わりにしてここを旅立つ。その前に英気を養うため、眠ることにする。ギリギリ準備が間に合ったお陰か、安堵感を感じると共にすんなりと眠気がきて夢の世界に旅立った…

目が覚め、自分の鎧化が解除されていないことに安堵しつつ、最後の鉱石を啜え、壁際に進む。顔口が使えない為、胸口で深呼吸をし、覚悟を決め、洞窟の壁に自分の剛脚を叩きつけた。

洞窟内に響く轟音と振動、壁は崩れ上からは岩が落ちてくるが鎧化の鉱石に守られて何かが乗った感覚しか感じない。そのまま黙々と作業を続けて進み続け、とうとう自分は外に出た。

外の世界で最初に目にしたのは木々だった。緑が生え揃い、聞こえてくるのは鳥の囀りと何かの唸り声。唸り声？

疑問に思うまま唸り声の聞こえる方向を向くとそこには赤色とところどころ青色の甲殻に包まれた身体。そして本来なら水色に近い色をした大剣の尻尾は赤熱している。



## 3 話

ここはある森の中、二頭の竜が向き合い、威嚇しあう。一頭は動かたたびにパキパキと何かを砕く音を響かせ、キラキラした物をばら撒く竜。もう一頭は巨大な大剣のような尻尾をもつ斬竜と呼ばれる竜。片方は生き抜く為の最初の試練に打ち勝つ為。もう片方は縄張りに突如現れただけではなく、自分のお気に入りの場所を破壊された怒りから。今ここで二頭の竜の殺し合いが始まろうとしていた。

いきなりの大型モンスター戦、更に看板モンスターときた。お互いに睨み合いながら思考を回す。相手側から攻撃が来ないのが少し疑問だが相手からしたらこちらは見たことも無いモンスター。警戒するのも当たり前だろう。一定の距離を保ちつつ、少しずつ右へと移動し、相手の様子を伺う。

——相手側から攻撃が来る気配はないけど、攻撃するとすぐさまカウンターを取る準備はされてる…と。

さつきから何度か攻撃する素振りを見せているが、その度に腰を少し落とし、瞬時に移動する体制を整えられている。

——このままだと罅が明かない。多少強引にでも攻めるか…

相手から気付かれないように密かに尻尾の先端を鉱石化で更に尖らせ硬化させる。

——狙うは一点。序盤に奪えたら圧倒的有利に立てる…眼!!

動く直前に大袈裟に右前脚を動かして相手の視線を右前脚に向けさせる。相手がそちらに視線を向けたと同時に即座に踏み込み半回転、勢いに乗せた尻尾を相手の右眼に突き刺す!!

「グギャギイ!!」

しかし相手も生存競争に勝ち残ってる強者、少し顔を傾け右眼に突き刺さるのを阻止し、その勢いで後退、更に強靱な後脚による踏み込みによる反転からの自身の最大の武器である尻尾を使いこちらの尻尾を叩き斬らんとする。

——!!?! 硬化!!

こちらの想定にない回避と反撃をされ、尻尾を下げようとするが間に合わず、何とか硬化の能力で防御力の底上げで対抗する。

互いの尻尾がぶつかり合い、尻尾同士が衝突したとは思わない音と火花を散らす。

——痛つてえ!! 鉱石が薄いとはいえこの威力か!?!けど、攻め時だ!

相手もこちらの尻尾を叩き斬れなかったことに少し動きが硬直する。その際に相手に剛脚を叩きつけんと飛び掛かるが、その身体とは似つかない俊敏な動きで避けられ距離を取られる。

——仕切り直しか…あの尻尾の力は注意しないと…

お互いに睨み合い、次の手を模索する。遠距離ならどうだ？と鉱石袋に力を込め、顔口に鉱石槍を生成する。

相手も同じ考えだったらしく、尻尾を地面に擦り付け、こちらに爆炎をお見舞いする。

——それは悪手だ!!俺には効かん!

相手の爆炎を真正面からもらうが、鉱石の鎧が身体を守り無力化する。お返しにと顔口を開き、相手に向かって鉱石槍を発射する。

だが相手もこちらが口を開いた時に遠距離攻撃が来ることを察知したのか即座に尻尾を盾にし防ごうとするが、こちらの攻撃は貫通能力が高く、そう易々防げるものではない。

これは有効打ありだなと追撃の準備に入るが、そこで相手が驚きの行動に出る。

自身の尻尾に鉱石槍が命中すると同時にこの攻撃は防ぎきれないものであると判断したのか、即座に尻尾を傾け流した。

見当違いの方向に飛んでいく鉱石槍に驚きが隠せないが、こちらはもう追撃の体制に入っており、止めることは出来ない。

相手はこちらの動きに合わせてカウンターの体制に入るが、こちらは相手に剛脚を叩きつけんと立ち上がっている状態だ。ガラ空きの胴体に尻尾が振られるが甘んじて受け

るしかない。

ギヤリイイイと渾身の一撃を貰う。相手の力とこちらの勢いを乗せたカウンター攻撃であり、その威力は計り知れない。肉体にまで相手の攻撃は届いていないが受けた衝撃はこちらに届く。

胴体から感じる鈍痛に顔を顰めつつ、状態を確認すると鉱石がひび割れており、あと少しで肉体に届く所だった。

——このデイノバルド、相当経験を積んでる。鉱石槍を受け流すなんて普通出来ないでしょ……

こちらが怯んでいるのを好機と見たのか、相手からの攻勢が強まる。なんとか胴体の鎧を再構成しようとするが相手にも意識を割かなくてはならず、なかなか修復が終わらない。

苦し紛れに反撃しようと前脚を振ったり鉱石砲を撃つたりするが上手く流され更にカウンターを貰う。反動で数歩後ろに下がり、更にひび割れた胴体部分を見て相手がこちらに距離を詰める。

——攻撃が全然通らない。何かまだ相手が見てない札を見せなきゃいけない。出来れば決定打を打てる時まで隠しておきたかったけどこのままだとこちらが死ぬ。

相手はこちらのひび割れた胴体に眼を向けており、攻撃は嘯みつきからの拘束を狙っ

ている可能性が高い。効果があるかは分からないし賭けになるけど、こちらにはまだ広範囲技が残っている。

すぐさま背口と後脚口を開き空気の吸引を開始する。胸口や前脚口は相手から見える為、開かない。相手がすぐ近くに来ると同時に顔口を開き相手に向ける。

尻尾での防御が間に合わない距離、しかし相手は脅威の反応と強靱な後脚で顔口の視線から横に逸れた、が！この時点でこちらの賭けは勝ちだ！

顔口からも空気の吸引を開始、ヒュゴオという音と共に可視化出来るほどの空気が吸引される。そこで相手もこちらが行う攻撃がさつきとは違うと気付き後ろに下がろうとするが、もう遅い！

ガパアと胸口と前脚口も開口！限界まで吸引された空気を咆哮と共に全口から吐き出す！！

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

音が聞こえない声と共に吐き出された咆哮は地面を砕くほどの衝撃波として放たれた。洞窟で試さなくて良かったなあ…じゃなくて！

急いで相手を確認すると平衡感覚を失ったのかフラフラとしている。この好機を逃

す術はない。未だフラフラしている相手に走り寄り、自慢の剛脚を相手の顔目掛けて振り下ろした。

この殺し合い初の手応えに更に戦意を漲らせる。鎧化の鉾石を含めた重量による叩きつけの威力は凄まじく、相手を一撃で地面に叩きつけた。

だがその威力のお陰か相手が平衡感覚を取り戻し、すぐさま立ちとうとするがこちらはそれを許さない。胴体を右前脚で押さえつけ、爪を食い込ませる。相手の甲殻を貫き血が出る。

更に縦に引き裂こうとするが相手側の抵抗が強くなった為、一旦押さえつけに努めて左前脚を相手の顔面に振り下ろす。数回繰り返し、相手の顔の甲殻がひび割れ抵抗が止んだので、引き裂く行為に戻ろうとするが急に相手が動きだし、後脚で胴体を蹴られ思わず後退する。

その際に相手は立ち上がりこちらを見るがその見た目は変わっていた。怒り状態に移行したのか、背部の突起が赤く染まり、外殻の至る所から黒煙が噴き出ている。更に喉奥辺りが赤く光り、口を開くと轟々と炎が噴き出ている。

その状態を目にし、今の自分の状態では駄目だと確信する。この鎧化もただ守るだけではなく攻撃にも活かさなくてはならない。鉾石袋と鉾玉に力を込め、活性化させる。吐き出される息は常にキラキラとした物質を含み。暗い白色だった鎧は明るい白色に

変色する。更に鎧と化していた鉱石は所々変形し始め、棘のような部分が増殖する。更に顔口以外の口の中を鉱石が覆い、鉱石の牙を三重に生える。

自分の姿が変わったことをある程度確認し相手に目を向ける。向こうも自身の剣を研ぎ終わり、その身に更なる闘志を滾らせている。しかし、こちらの変わった姿と増えた口に対して冷静に視線を向けているのがわかる。

何回目かの膠着状態はさまざま相手の攻撃によつて破られた。相手のブレスが三発こちらに飛んでくるが全て受け止めながら相手に飛び掛かる。お互いに纏れ合いながら転がり、木々を薙ぎ倒しながらも止まらず、マウントを互いに取り合い譲らない。相手の喉元を噛みちぎらんと牙を剥けるが、相手も後脚でこちらを蹴り上手くないかない。しかしこちらの更に強化した鎧と重量により、こちらを蹴り飛ばすには至らない。

状況はこちらの有利であり、しかし有効打が入らない、有効打を決めるために再度、しかし今度は全口で空気の吸引を開始する。ヒュゴオという音と共に再び肺に空気が充填される。それを見た相手はなりふり構つてられないと判断したのか少しの溜めの後、至近距離でブレスを発射した。

首あたりに命中したそれは粘性を持つていたが、気にせず大咆哮を放とうとする。しかし放つ直前で大爆発を起こし、こちらの攻撃は失敗し、マウント状態も抜けられた。だが相手もそれ相当のダメージを負ったのか、口からは絶えず粘性の液体が垂れてお

り、顔からは血が出ており片眼は潰れている。それでも相手は諦めておらず、ギラギラと目が輝いている。

「????????」  
咆哮も滅茶苦茶な音となっており、しかし目の前の敵を打ち倒さんと示すべく吼える。

相手がこちらに突進を始めるがその動きは遅く、簡単に見切れる。だがあの眼を見ると油断するなど全身が警告を上げる。その警告は正解であった。

ある程度の距離まで近づくと一気に加速、さつきまで見ていた全ての動きより素早く尻尾を啜え力を込め、振り抜く。しかし片眼が潰れているせいか距離が足らず、こちらには届かない。それを見て警戒を解こうとするが相手の眼を見て一気に警戒を引き上げる。

相手は振り切って体勢を崩そうとするが無理矢理右脚を地面に叩きつける。火事場の馬鹿力なのか地面が割れ右脚が埋まるが、また尻尾を啜えこちらに振り切る。その時に右脚が変に捻れていたが気にする様子はない。

今度は直撃コース。ゴオウンと風切り音を鳴らし、こちらに迫る尻尾を見て、迎え撃つべくこちらは胸口を思い切り開き……閉じた。

s i d e  
???

己の最新の一撃を放ち、それを防がれたことを悟った己は、先程まで殺し合いを思い返す。いきなり己の縄張りに侵入すると同時にお気に入りの手入れ場を破壊したその竜は、全く強き竜の気配を感じず、ただ少し凶体のデカイ奇怪な竜だと思ったのだ。

最初は逃げるのかと思っていたが、立ち向かってきたことに驚き、次に的確に眼を狙ってきた時にはその狙いの良さに感嘆すら覚えた。しかし縄張りを侵入し、手入れ場を破壊した罪を断罪せんと振るった傲慢の尻尾が相手に弾かれた時は、こいつは敵になり得る竜だと思ったのだ。

それが確信に変わったのは、竜を追い詰めた時だ。数多の竜と竜の気配を纏った小さき者を潰してきて学んだ技で竜を追い詰めた時だ。トドメを刺さんと近づき、相手が口を開いた時にはまたあの石を飛ばす技かと。無駄な足掻きを……と思ったのだ。横に逸れ、隙を晒したその首を叩き斬ろうと準備に入った時に相手が息を必要以上に取り込んだのを見て、様子を見ようと下がろうとしたが間に合わなかった。

今までは無かった異形の口が開き、そこまで見た後に凄まじい衝撃がこの身を襲い、

頭が真っ白になった。意識を取り戻した時には己は地に寝転んでいて竜がこちらを見下ろしていた。何を見下ろしている。己を何だと思っている!!

怒りを感じ立ちあがろうとするが竜が己を突きえつけ上手く立てない。暴れに暴れるが竜の脚が己の顔を数度叩き、その衝撃に意識がとびかけ、次に意識が戻った時には己には怒りしか無かった。

竜を蹴り飛ばし、すぐさま自身の武器を磨き上げる。磨き終えてから竜を見ると奴も姿が変わっていた。全体に棘のようなものが生え、異形の口にもさつきまでは無かった牙が生えている。本性を現した竜に本来なら様子を見るべきだか怒りが自分を突き動かす。

竜を滅ぼさんとブレスを放つが、竜は気にせずこちらに突っ込んでくる。尻尾で撃退しようとするが思いの外動きが速く飛び掛られる。何とか上を取ろうと転がるが上手いはず、なら蹴り飛ばそうと脚を振るうが、さつきより竜が重くなっておりこれも出来ない。膠着状態に陥るが、竜がさつきの意識を飛ばす攻撃の準備行動に入ったため、己の今出来る最大の攻撃で迎え撃つ。

爆発で前が見えなくなると何かが砕ける音と共に己の顔を重点に何かが突き刺さる。痛み能耐えつつ、重りが無くなったことで立ち上がるが先程までの攻防で思ったより消耗していたようで、思考が定まらない。更に今までの経験と本能から今すぐ止まらなけ

れば死ぬと理解する。

だが前には敵が立っている。ならば己が止まることは許されない。今まで喰らってきた竜たちは自らの死を悟っても己に向かつてきたではないか!!ならば己もそれに準じよう!!!

天に吼える。竜に吼える。己はまだ生きています!まだ汝の命を摘む可能性のある敵であると!!竜が構えるのを嬉しく思いつつ己も汝の糧とならんと力を振り絞り突進する。最期の攻撃ならば己の一番の技でいこう。本来ならば溜めに時間がかかり、トドメ以外には使えないが、竜は待つてくれる気がする。それを確信しているのは己の気のせいだろうか?気持ちには穏やかに、殺意は鋭利に、己の最期の力を込めた振り抜きは、空振った……………

まだ!!終わってない!!!!

力の抜けていく身体を気合いだけで抑え、踏み込む。強引に尻尾を啜え振り向きながら思い切り振り切る。右脚から喪失感を感じるが気にしない。

竜よ！己の一撃、乗り越えて見せよ!!!

視界が霞み、それでも結果を見ようと見開いた眼で見た最期の景色は…

噛み砕かれた己の尻尾と、こちらを見下ろす竜だった…

## 4話

満足そうな顔をして、斬竜は力尽きた。一分ぐらい様子を見つつ、完全に動かないことから絶命したと判断する。胸口の中に入っていた尻尾を呑み込み、生き残ったことに安堵する。

——何とか乗り越えた。大咆哮が無ければ死んでいたのはこちらだったかもしれない。

逆転の一手となったことから、この技は切り札に匹敵するものだと思いを改める。

——ティガレックス亜種などが頻繁に行っていたから攻撃手段にはなると思っていたけどこんな威力が出るとは思ってなかったなあ……。んん？リアルで当てはめるとあの黒虎こつちに對する殺意高すぎないか？会わないことを祈ろう。

思考の中でティガレックス亜種が咆哮をしながら暴走している姿に身震いしつつ、改めて亡骸となったデインバルドに視線を向ける。

——やっぱり、ゲームとは違ったな。何個かは見覚えのある技があったけど、遠距離攻撃を逸らす行動なんか無かったはずだし……最期の捨身の攻撃もそうだ

リアルとゲームの違いを痛感させられる殺し合いだったと思う。冷静に相手の出方

を採る行為や自らの損壊も気にせず攻撃してくる姿勢。この個体が特に強かったのか、それともこれがこの世界の基準なのか、今はまだ分からないが少なくとも大型モンスターの大体の強さと自らの鎧の防御力はこの世界でも十分通じるということが分かったのは収穫だろう。

ーとにかく、勝者の特権ということでのこの個体は食べさせて貰おう。

デインバルドを前脚で引き寄せ、胸口に頭部を突っ込み食事を始める。大量の肉と血が胸口いっぱいに入ってくるが、気にせず咀嚼し呑み込む。鉱石袋でそれらが鉱石となるのを感じつつも食事の手を止めず、胴体、尻尾の残りを全て腹に放り込む。

ーこの身体って意外に大食漢なのか？全然満腹にならない…けど肉は消費より補給の方が勝ってるみたいだな。

満腹になる感覚はないが確かにエネルギーが貯まるのを感じ、これからどうしようかと考える。

ーまずは休息。そこそこ長い間戦っていたと思うし、疲れたから今日は動きたくない。次は探索かな？出てきたばかりでここが何処だか全く分からない。ゲームのフィールドなのか知らない土地なのか判断するために探索は必須だな。んで、最後に寝床の確保かな？でもこれはこの土地が過ごしやすいかどうかを判断してからでも遅くないだろう。取り敢えず寝よう。おやすみなさい!!

ーおはようございませす!!なんか恒例になってきたぞ俺：しかも周りを見ないですぐ寝るとか何か潜んでいたらどうする気だったんだよ。

起きてすぐに自分のやらかしが発覚し、気分が下がるが身体の調子は快調であり、動くのは問題なし。

ーよし、身体は問題なし、鎧も改造したままがデフォオになってるな。顔口以外の口の強化も問題なし。探索に行くかあ

流石に色は暗い白色に戻っているが、明るい白色は鉱玉が常時活性化している時の副産物なので気にしなくてもいいだろう。俺は歩き出し、森の中に入っていった。

森の中に入り、恐らくデイノバルドが作ったであろう獣道を通り俺は探索を続けた。この森は広いが所々空けているところもあり、そこに小動物が日向ぼっこしている姿を散見出来た。また、暫く歩いたところには大きな川があり、そこにはアプトノスやケルビなどのモンハンを代表する生にゲフンゲフン草食竜が群れを作っていた。

それらを眺めているとアプトノス達より少し離れたところの茂みからジャギイ達が現れる。それを見たアプトノス達は即座に逃走を開始するが逃げ遅れた個体もおりジャギイ達に囲まれる。何とか逃げようと暴れ始めるが尻尾に噛みついたジャギイに意識を向けたところで他のジャギイ達に襲われ、抵抗虚しく絶命した。

弱肉強食の文字が頭に浮かび、何度目かになるか分からない生存への意志を確認しつつ、再び移動を開始する。

それからざっと見て周り、ここはゲームには出てこなかった場所だと確信できたのと、良さげな洞窟を見つけたのでそこを寝床にする。今日の目的は達成したので適当に洞窟内に生えていた鉱石を食べ、眠ることにする。しかしその前に洞窟よりも一定範囲に自分の鉱石をばら撒き、意図的に脆くしておく。踏めば音が鳴る仕組みになっており、これで外敵が来れば気付くことが出来るだろう。しかし試したのは俺だけなので本当に機能を発揮してくれるか不安だが、小型程度ならこの鎧を突破することは出来ないだろうとタカを括って寝ることにする。

それから数日がたち、俺は今のところ平和な生活を享受していた。森の開けたところで伏せ、日向ぼっこしていると足元に小動物が集まる。

—そういえばこの身体は大型モンスターより大きいのに、こいつらが逃げたのを見たことないな…

ここ数日、何度か小動物や草食竜達とすれ違うことなどがあつたのだが威嚇や逃走をされたことがない。むしろジャギイ達がこちらに対し攻撃をおこなってきた程だ。勿

論、叩き潰しその日の食事とした。

——鉱石食だから危険はないと判断しているのか？けど一度あいつらが見ている前でジャギイ達を食ったからそれはないと思うんだけど。

ボヘーとしながら考えを巡らせ、何故逃げられないかを考えていると知らない間に足元には小動物達が増えていた。

——こいつらもよく集まるよなあ。確かに動かなかつたらただのデカイ岩にしか見えなないけどさあ…

自分の周囲を覆う鎧は日の光を少し軽減するみたいで、直接当たるよりか俺の下にいる方が心地が良いのだろう。

そんなことを考えていると近くにある茂みが揺れる。またかよ…何頭いるんだこいつら。

現れたのはジャギイ、こいつらこんなにいるなんて何処かにデカイ巣でもあるのか？全く動かないコチラには気づいていないのか完全に無視して奴等が狙っているのは俺の下にいる小動物達らしい。小動物達も狙いが自分だと気づいているのか逃げようとしているが既にジャギイ達に囲まれて逃げる事が出来ずに威嚇を続けている。無視して食われるのを見ててもいいが少なくとも愛着を感じているのも事実。なので今回は手を出すことにする。ジャギイ達がこちらに近づいてきたのを見て、右前脚を振り下

ろす。相手もコチラを岩と認識していたので反応が間に合わずミンチになる。仲間の惨状にジャギイ達は固まり、すぐさま逃走するが後ろから鉱石弾で追撃する。物陰に消えるまでに数匹に風穴を開けたが全頭を仕留めることは出来なかつたようだ。立ち上がりジャギイ達の元へ向かう。小動物達も状況が理解出来ず、固まっていたがコチラが動き出したことでそれぞれ逃げ出した。風穴を開けたジャギイ達を食べていると、遠くからアプトノスの群れがコチラに向かって逃げてきており、その背後には勿論ジャギイ。

こいつらそろそろ間引いた方がいいか?と考えている時にアプトノス達の背後から一際大きいジャギイが現れた。

ーあれが親玉かな?身体と襟巻きが大きいし、見た感じジャギイを引き連れているようにも見えるし。

あれを殺せば統率が取れなくなり、少しはマシになるかなと考え、ジャギイ達の元に向かう。リーダーであるジャギイ:ドスジャギイもアプトノスを一頭仕留めたところでこちらに気づき、他のアプトノスには目もくれず、こちらに向かつてきた。

ドスジャギイが周囲のジャギイに指示の遠吠えをあげ、ジャギイがこちらの周囲を囲むのを見ながら少し思いついたことを実行する。

ピシピシと音がなり鎧からヒビが入り始める。前から疑問に思っていたことである誰も逃げないことについて自分なりに考えた仮説を実行する。アプトノス達で試してもよかったが、成功した時はいきなり隣に自分の命を簡単に摘めるものが出現するとうことになり、驚かれるのは確定でありこちらも申し訳なく感じる。

その点こいつは元から殺す予定だし散々部下にちよつかいをかけられ続けた苛立ちもあり、遠慮は要らないだろう。

デインバルドと戦う時、奴には確かに威圧感があった。恐らくそれは強者が持つ独特の強さであり、それで大まかな強さを測るのだろう。それは身体から放たれており、しかし俺は身体を鉱石で覆っていて、それが原因でそれらを遮っているのではないか？というのが自分の仮説だ。

鎧が砕け、久々に本来の姿を晒す。重りがなくなつた為か身体が軽い。一通り身体を動かしたあと、ドスジャギイを見るとさつきまでの威勢は何処にいったのかひどく萎縮している。自分の仮説は正解だったと思いつつ、試したいことは試したのでドスジャギイを仕留めにかかる。

ゲームにはない攻撃があるかもしれない為、両前脚を鉱石で覆い疾走する。相手の顔を右前脚で叩き、そのまま押さえつける。

相手も逃げようとしているのか必死にもがくが、こちらはデインバルドを片脚で押さ

えつけられる膂力がある。ゲームにはない攻撃がないか観察したが、もがくだけで何かをする気配がないのでそのまま潰すことにする。

右前脚に力を込めて、いまだにもがき続ける相手の頭を潰した。

ドスジャギイを潰してから数週間が経った。あれからジャギイ達による襲撃は減り、平和な日々を送りたかつたんだけどなあ：

確かに襲撃は減った。しかし普通にジャギイは襲ってくるし、最近は他にも心配事が増えた。

自分の棲家となっている洞窟に登り、今日も消えていないとため息を吐く。自分の目線から見えるのは嵐。一週間前に移動してきて、それからずっと同じ場所に留まっている。更になんか距離があるこちらからでも微かに感じる独特な気配。それはあの嵐から放たれている感じがする。自分でも感じる気配であるため自分よりも遥かに危機感知能力が高い草食竜などはずっと何かに怯えるような動きを見せていて、既にいくつかの群れはこの地を離れている。流星に自分もあの嵐の主と戦う気はないため、こちらに嵐が移動して来れば即座に逃走するつもりでいる。

——嵐の主は誰でもいいけど、頼むからこっちは来ないでくれよ…  
嵐に向かって祈るような気持ちで呟きつつ、今日も食糧を探しに森の中に向かった。

## 5話

今日も森は異常なし。最近は一定範囲の森を見回るのが習慣になってきた気がする。朝に起きるとまず嵐の状況を確認し、その後は森の空けたところで日向ぼっこをしながら自分が使えるような技を模索して、思いついたのから試してみる。それで有効打になりそうなものは戦闘中にもしっかりと使えるように練習を重ねる。技を考えただけで何も問題なく使えるようになるとは自分では思えないのでこの練習は必須だ。なんなら前まで使っていた技の練習もしている。繰り返し同じ技を使っていると「こうした方が良くないか？」や「ここでこの技を挟んでみるといいかも」などの改良点が見つかることが多いので意外と楽しい。今のところ増えたのは鉋石槍の胸口版である鉋石砲、尻尾に鉋石で剣を作ったり、先端に鉋石塊を作ってハンマーみたいにして振り落したりする技も作ってみた。しかし鉋石の剣は尻尾の一部が固まり、使いづらくなるので使う場面はしっかりと考えなければならぬ。ちなみに鉋石砲を試し撃ちしてみた時に通りすがりのジャギイに直撃し爆散した。正直済まんかった。

満足いくまで練習をした後は川に向かって水を蓄えに行く。この身体は水を溜め込めておけるのか、飲んでいる最中は喉が潤う感覚ではなく身体に何かが溜まっている感

覚がする。なんなら数日間は何も飲まなくて大丈夫だが、急に川が枯れたりしたら怖いので常に満タンになるようにしている。

今までの行動中にジャギイが来れば食糧に、来なければ洞窟内の鉱石を食べるようにしている。自分の出現地点の洞窟とは違い、ここの洞窟は数日でまた鉱石が生えてくるので食糧に問題はなさそうだ。こういうところはゲーム基準なのね……

これが最近の自分の一日である。人間時代の時とは違い、伸び伸びと動けるのが気に入っている。この森には自分以外の大型が存在せず、なんなら中型も数週間前に潰したドスジャギイだけだったので、今この土地に生息しているのは自分と少しのジャギイだけだ。草食竜は嵐のお陰でつい先日、完全に姿を消した。それに伴いあんなに溢れるほどいたジャギイも数が減ってきている。自分としては鉱石食なのであの洞窟の鉱石が尽きるまで（尽きるのかな？）食糧に困ることはないし、嵐の主の威圧感に慣れるためにこの地に残っている。あの威圧感に慣れることで次の大型モンスターが自分より強大だとしても怯まず立ち向かえるのではないかと考えての行動だ。勿論、敵わないと確信すれば逃げることも厭わない。自分の最優先事項は生きることであり、そのためには今の生活を容易に捨て去ることが出来ると胸を張って言える。

——最悪は大咆哮で吼えながら逃げるかあ……

咆哮しながら全速力で後方ダッシュする自分の姿を想像しながら、もしものための逃

亡手段を確立させる。ついてこられたらどうするのかはその日の自分に丸投げしとこ  
う。ヨシ！

！！  
——やることやったから寝るかあ、明日も良い日になりますように！おやすみなさい  
！！

——おは!!? 何この気配!!?

恒例になった挨拶をしようとした途端、凄まじい気配と怒気に一気に目が覚め飛び起  
きる。急いで洞窟を飛び出して発生源を見ると嵐が勢いを増し、こちらからでも確認出  
来るほどの暴風雨を発生させていた。

——うわあ……すっごい怒ってる。相手はハンター? それともモンスター? こっち  
からだど強者同士の戦いつてことしか分からないけどね…

何週間も嵐の下にある土地って大丈夫なのか? と的外れなことを考えつつ嵐を見つ  
める。嵐は勢いが収まるどころか増していき、更に範囲を拡大させていく。

——うーん、嵐の主がやられたらこっちも嵐の動向を確認しないで済むから助かるん  
だけだなあ……勢いは増してるけど動く気配は無いし、いつもより少し早いけど森の見  
回りに行こうか

自分がこのまま見ても意味がないと判断し、森の中に入る。森の中は本来なら鳥の囀りや獣の声などが聞こえてくるのだが今は静かで木の葉の擦れる音しか聞こえない。流石のジャギイも嵐の主の怒気に怯えて巣穴に籠っているようだ。静かな森の中を歩き、いつもの日向ぼっこ兼練習場に辿り着く。いつもなら日向ぼっこを行うところなのだが嵐の主のお陰で空は薄暗く、とても行える状況ではない。

そこで趣向を変え、今回は別のことを行うことにする。

——前々から思ってたけど動かないと周りからは岩か何かと思われてるんだよなあ、ならゴツゴツした擬態形態でも作ってみようかな？

流石に今の棘が生えた鎧姿で動かなくてもモンスターを騙せてもハンターは無理だろう…ならゴツゴツしたこれぞ岩！って感じなのを作ればいいのでは無いかと考えた次第である。

早速棘の部分を砕き、ただ身体を鉱石で覆っただけの姿に戻る。その状態から自分の身体に背負うように鉱石の塊を生成する。ある程度生成した後、自分の尻尾でなぞるように触ってみる。

——うーん、すつごくバサルモスだね！逆に森の中にあつたらバレるわ！

リアルなバサルモスがああ岩を背負った姿なのか知らないが知ってるハンターが見ると逆に目立つだろう。

——それに鉱石を背負ってるだけなんて潜るわけじゃ無いんだから擬態にもならないよ！

ただ鉱石の塊を背負っている四脚の竜なんて座って動かなくてもハンターからしたらバレバレだろう。むしろ奇襲されるわ！

——とにかく！脚にも鉱石塊をつけて座っていても岩場っぽくしよう。首もゴツゴツにして頭は岩場が削れて少し飛び出ている感じにして尻尾は地面に埋まっている岩の上部が少し出ている感じにして、どうだ！

尻尾で身体を触り出来を確認する。触った感触から脳内でどんな感じかを想像し、岩場に個人的には見えたのでこれで行くことにする。

——後は動かずにジツとする練習かあ、地味にめんどそうだけど擬態も使えるようになるれば奇襲出来るかも知れないから仕方ないか……

その場で伏せ、脚の位置を岩場に見えるように置き、尻尾も地面につけてジツとする。——取り敢えず今日一日はこのままジツとしておくか……

ノルマを決めつつどうせなら尻尾以外の関節部分の鉱石を硬化させ物理的に動けなくする。準備は出来たのでジツとしながら今後のことを考える。

——この擬態状態でどこまでいけるか確かめたいな。けど今のここには何もいらないから場所を変える？明日の状況で考えようかな？明日も嵐が続いていたら移動しよう。

消えていたら草食竜達も戻ってくるだろうしもしかしたらそれを追いかけて大型も来るかもしれないからもう少し待ってみよう。出来たら気配に敏感な奴が来て欲しいな、そいつ相手に試してみてゆくゆくはハンターにも効くかどうか試して「先輩！森が空けますよ！」!?

飛ばしていた思考をすぐさま戻し、意識を切り替える。今のは明らかに人の声だった。擬態中のため動けないのがもどかしい。話し声は後ろから聞こえてきて、徐々に近づいてくる。

「静かに話さないと言ったでしょう？何処に何が潜んでいるのか分からないんですよ？」

「こんなに静かなんだから大丈夫ですって！」

なんて話しているのかは分からないが、こっちはそれどころでは無い。いつかは出会うと思っていたが流石に今だとは思わなかった。

一人は騒がしくボーン装備をした操虫棍を持つ青年。もう一人は静かにこちらに近づいてくるルドロス装備をした太刀を持つ女性

「どうする？今すぐ攻撃するか？いや、ここはチャンスだこの擬態の効能を確認させて貰おう。」

自問自答しつつ、この擬態を向ける最終目標が現れたので焦る気持ちを抑え、ジッと



「ー見た感じ男性ハンターは警戒が弱いな？それに比べて女性ハンターは警戒を欠かしていない。狙うなら先に男性ハンターか？」

残念だが自分はハンターを見つけた時点で逃すつもりはない。自分の痕跡を見つけた以上、帰られたら何を報告するか分からないからだ、調査隊などを派遣されるリスクがあるなら、可能性自体を無くすしかない。

ハンター達が休憩を終えたのを見てゆつくりと尻尾を持ち上げる。ハンター達はこちらが休憩中に手を出さなかったことで気付く様子はない。

男性ハンターの後頭部を狙い尻尾を突き刺す！

「!?伏せなさい!!!」

「え?はい!」

刺さる直前に女性ハンターがこちらに気づき男性ハンターに向かって叫ぶ。男性ハンターもハンターの端くれなのか、喋りながらも素早い動作で伏せた。しかしこちらの攻撃は終わっていない。尻尾を伏せた男性ハンターに振り下ろす。

「なにこれ!?どつからの攻撃!」

「あの岩からよ!早く離れなさい!」

慌てて転がりながら尻尾攻撃を避ける男性ハンター、そこで女性ハンターが走り寄り、太刀でこちらの尻尾をそらす。

――範囲外に出たか、それじゃあ本番と行こうか

関節部分の鉋石と擬態形態の鉋石を砕き立ち上がる。ハンター達がこちらに驚いている間にいつもの鎧姿に戻る。

――ハンターとの初めての戦いだからな、リアルでは何が出来て何が出来ないのかを確かめさせてもらう。

ゆっくりと構えをとり、ハンター達を睨みつけた。

## 6話

「ジャギイの討伐……ですか？」

「そう、南西の森から増加傾向があるみたいで被害が増える前に討伐して欲しいって依頼よ」

朝、私は受付嬢から依頼を推薦されていた。

「でも私に勧めるんですか？いくら人手不足でも私より適任な人は数人居たはずですけど……」

「今回の依頼は少しギルドからの依頼も混じってるの、だから上位ハンターである貴方に頼むの。それにいつものやつもお願ひしたいし……ね？」

「またですか？なんでいつも私なんですか？」

「あなたは人気だしなんだかねで面倒見がいいから安心して任せれるのよね、報酬に色をつけるからお願ひ！」

手を合わせ、首を傾げながらお願ひしてくる受付嬢にため息がでる。どうせ嫌だと言つてもなんだかねで受けるハメになるんだろうと諦め依頼の説明をさせる

「それで？何をすればいいのですか？」

「ギルドからの追加依頼は生態調査、ジャギイの大量発生で生態系に影響が出ていないかの確認ね。それとあなた個人のお願いは新人ハンターの引率よ」

「やっぱりか。何故か私は新人からの人気が高く、ギルドが新人ハンターに勧める引率の話が出ると高確率で私を選択するのだ。」

「生態系調査は分かりました。それで新人ハンターは何処にいていつ頃から出発すればいいのかしら?」

「出発は明日、新人くんはあなたの後ろにいるわよ?」

「受付嬢の言葉を聞き、後ろに振り返る。そこにはポーン装備を着た青年が立っていた。」

「君が今回の新人くんか、よろしくね」

「はい!よろしくお願ひします!先輩!」

「元気のいい青年だなと感じつつも話を進める。」

「出発は明日よ、しっかり準備をすることね。」

「分かりました!」

「大声を出しながら去っていく青年に少しため息がでる。」

「今回は疲れそうね。」

「おう!また新人の引率か?精が出るな!」

「あ、ギルバドさん。おはようございます。今日も依頼ですか？」

声をかけられて振り返るとそこにはレイア装備をした大柄の男性が立っていた。

「おう、俺もお前達のクエスト地点の近くでだな！途中までは一緒だからよろしく頼む！」

「ええ、よろしくお願いしますね。どうせなら道中の会話も任せます。」

「いいぞ！俺の武勇伝を聞かせてやるよ！」

「それって小型のリオレイアの話ですよ？他には無いんですか？」

「無い！俺にはあれほど熾烈な戦いは無かったからな！」

話をお願いした手前、いつもと同じ話は流石に疲れる。他の話もお願いしてみるが、彼にはあの話が一番の自慢らしくそれ以外は話したがるらないのだ。

「まあ今回の依頼が終わったら一杯やろうか！奢ってやるぞ！」

「それは嬉しいですね、ご馳走になります」

それを聞いて少し明日の依頼に対するやる気を向上させる。店の指定もされてないし、高級店でも指定してやろうか。

「それじゃあ、私も準備があるのでこの辺りで。」

「そうか、準備はしっかりしろよ！」

家までの帰宅道で明日の依頼に対する動き方を考える。取り敢えず新人くんには最

初は後ろで見ってもらって、後は一緒に戦おうか。生態調査はジャギイを探す合間にやればいいだろう。新人がどんな動きをするのか分からないため少し鬱憤とするがそのあとの一杯を考えると気分が良くなる。

高級店を指定して慌てるギルバドがそれでも奢ってくれる姿を思い描き、頬を緩める。こうなったら早く依頼を終わらせるしかないな。当時はそう思ったのだ。思っていたのだ。

森の中、道中で粉のような何かを辿り、森の空けたところに”それ”はいた。全身が岩のようなもので構成されており、眼はなく、口のようなものも見当たらない、更に立ち上がったからこそわかるその大きさ。

(何このモンスター!?!見たことないわよ!)

自分の中の記憶を何度見直してもこんなモンスターは知らない。自分が知らないだけの可能性はあるが自分が活動する範囲で生息するモンスターぐらいは頭に叩き込んでいる。

つまり流れてきたか、見たことのない新種の可能性がある。それは不味い。何をしてくるかが分からず、新人を庇いながら動けるとは到底思えない。

「うわ、デカいっすね。これ」

その新人は随分とアホなことを話してる。これだから想定外のことが起きた時の新人は嫌なのだ。

「撤退よ、私も見たことないモンスターだから何をしてくるか分からない」

「何でっすか!?!なら尚更狩りましょうよ!先輩が見たことないってことは新種の可能性があるんすよね!有名になりますよ!!」

……この新人を今すぐ殴りたい。しかし今日を逸らすのは不味い。目の前の新種は殺気などは一切放っていないがそれが怖い。何故なら殺気がないならさっきのような攻撃はせずに身じろぎをするなどして追い返すのが普通なのだ。だがあの攻撃は完全に新人を殺す気だった。

更に新種は構えをとっている。これもおかしい。構えを取るということは戦闘の意思があること。なのにこの新種からは何も感じない。殺意も戦意も何も感じないのだ。

「いいから言うことを聞きなさい。死にたいのですか?」

「こんなに何も感じないんですから大丈夫ですって!先輩は新種だからって警戒し過ぎっすよ」

新人は英雄願望を持つてるものが多く、恐らくこの新人もその類なのだろう。そういった者は大型モンスターに無謀は攻撃をし、死ぬものが多い。ハンターが大型モンスターに挑むのは大変なのだ。力が自慢の相手なら攻撃が少しでも腕などに当たると折れる、最悪は飛んでいく。それほどに差があるのだ。それを防具と武器と技術でなんとか均等にしているだけで、それも相手の特徴を把握して初めて戦闘が成り立つのである、初見で相手を殺せるのはそれこそ英雄と呼ばれる人間であるといえる。

「いい加減にしなさい！あなたの下らない英雄願望で仲間を危険に晒す気ですか!!」  
「下らな!!……分かったつす」

下らないのくだけで怒りを露わにしたが、そのあとの仲間で冷静になったようだ。少なくとも分別することは出来るらしい。なら多少教育すればこの先も生きていけるだろう。新人に次の行動を話す。

「私が気を引きます。あなたは新種の気を引かずに静かに後退、撤退しなさい。」

「先輩はどうするんすか？大型モンスター相手に一人は無謀つすよ?」

「避けるのは得意分野です。見切り斬りなどの超人技術は使えませんが、逸らすぐらいなら出来ます。出来ないと生き残れませんから。」

見切り斬りは相手の筋肉の収縮などから次の行動を未来予知レベルで予想し、相手の攻撃を躲しながら攻撃する技術だ。少しでも予測を間違えると死に直結する危険な技

術だが、習得出来ればその恩恵は計り知れない。しかしそんなことを出来るのは英雄か長年ハンターを続けているハンターだけだ。

「分かりました。御武運を」

新人が徐々に後ろへと後退する。それに合わせて私は前に出るが、新種は私に目をかけずに新人へと飛びかかった。

「!?そちらへ行きました!」

「分かっているっす!!そりゃあ!」

飛びかかってくる新種に新人は操虫棍を地面につけて跳躍、新種を飛び越える形で回避した。

「これは逃す気は無いつてことっすかね?」

「そうみたいです。こうなると痛手を与えて怯んだ隙に撤退するしかありません。」

太刀を構え、新種の動向を見る。新種はこちらを逃す気は無いのか新人の方に顔を向け、その動向を見ている。

「突撃します。援護を」

「分かったつす。正面から見ると大きさのせいで距離感が少し分かりずらいつす。お気をつけて」

「情報感謝します。」

相手に向かって疾走する。新人がそれを見て新種に猟虫を飛ばす。新種は猟虫に視線を向けたのを見てこちらも太刀を突き刺す。太刀が相手の表皮に当たるが火花を散らし弾かれる。

それでこちらに意識を移したのか右前脚をこちらに振り落としてくるが即座に後退し、回避する。それを見た新種は爪による爪撃を繰り返してくるのを太刀を添えて攻撃をなんとか逸らす。

「グウ！なんて重さですか！」

「先輩！大丈夫ですか!？」

後ろからの新人からの声の問題ないと声をあげるが状況は悪い。新種はあの巨体から想像していた通り、パワータイプのような。手を見ると少し痺れていてそう何度も攻撃を受け流すことは出来ないかと判断する。

なんとか痛手を与えたいが新種の表皮の硬さは相当なもので私の武器だとダメージを与えられない。

「どうにかしてダメージを与えたいのですが、難しいですね。」

「そうっすね。猟虫も表皮が硬いせいでエキスが取れないみたいです」

新人の猟虫を見ると新種に張り付いているがエキスが取れないのか所在なさげにオオオしている。仕方ない。

「救援を呼びます。少し逃げていてください。」

「そこは任せたとか言ってほしかったっす……」

新人のボヤキは無視してアイテムポーチからとある球を取り出し、点火する。腰に差してあつた特殊な銃に装填し、空へと撃ち出す。

（気づいてくださいよ、ギルバドさん）

まだ近くで依頼をこなしていることを祈りながら新種に目を戻す、新人は必死に攻撃をしているが新種はそちらには視線を向けておらず、その視線は私に向いていた。

（新人は脅威なり得ないと判断したの？それともいつでも殺せると判断したのでしようか？）

後者だと少し不味いなと考えつつ新種に突撃した。

戦闘開始から数十分経過したが、状況は変わっていない。こちらが攻撃し新種が反撃する。新種からの攻撃はこちらが逃亡しようとした時だけであり、それ以外はこちらが攻撃しない限り何もしない。

逃す気が無いのに積極的に攻撃をしてくる気配もない。こちらが観察されているよ

うな気分がし、気味が悪い。

「先輩、少し提案があるっす」

「何でしょう？手早くお願いします」

新種が手を出してこないことをいいことに話し合う。新人は真剣な顔をしながら自身の提案を話し始める。

「悔しいですが、自分はその新種から相手にされていません。自分の武器は弾かれるし猟虫も少し気を引くだけで役に立ってるとは言えません。」

「それは……そうですね」

「ですのでそれを利用してあの新種に乗ります。ナイフが刺さるかは分かりませんが相手はこちらを振り落とそうとするはずっす。」

「危険です。相手は様子見をしているだけで何をしてくるか全然分かっていません。」

「それは承知の上っす。けどこのままだといずれ倒れるのはこっちっす。」

新人の強い瞳をみてため息を出す。これは否定しても無視して勝手に実行する眼だ。ならこちらのタイミングでやって欲しいと指示を出す。

「はあ……分かりました。ならこちらが気を引くので後ろからお願いします。」

「分かったっす！」

新人が離れたのを見てこちらも新種に突進する。新種の攻撃をなんとか躲しながら

注意をこちらに引く。こちらの攻撃は全て弾かれるが新種の攻撃も前脚を振り落とすか爪撃しか行わないので慣れた今では完全に躲せる。

暫く攻防を繰り返していると後ろから新人の姿が見えたのでこちらも後ろに下がる。そしてそのまま逃げる体勢をとる。

(さっきまでの行動から逃げる体勢になれば追いかけるために少し身を屈めるはず)

そうなれば新人が乗りやすくなる筈だと考えていると新種の様子がおかしい。少し屈むだけで追いかけてくる意思がない。まるで何かを待つような……

「どりやああつす!!」

「!?待ちなさい!」

後ろから飛び出す新人の姿に嫌な予感がし、大声を出し呼び止めるが止まる様子がない。新人が跳躍し新種の背中に飛びつこうとした時に新人が顔色を変えた。

「!?先P

何かを叫ぼうとした新人の姿が消えた。

「どうしたんですか!?レクレくん!!返事をして下さい!」

新人に声をかけるが返事が返ってこない。何度も声をかけるが新種がこちらに攻勢を仕掛けてきたことでそれも中断される。

「くう!!レクレくんをどこにやったんですか!!?」

この新種が何かをしたのだがそれが何か分からない。相手の攻撃を躲しながらも思考を重ねるが答えが出ない。

そんな思考を重ねたのがいけなかったのか新種の攻撃が腕に掠る。

「!!」

激痛に顔を顰める。新種の尻尾の薙ぎ払いが来るが、利き腕をやられたので太刀をしっかりと握れず逸らすことも出来ずに直撃する。

「(っ)ほ!!ゲホー!か、回復を」

地面を転がり勢いが止まったところで回復しようとポーチに手を伸ばすが見つからない。視線を動かしポーチを探すと転がった時に外れたみたいで遠くに転がっていた。

(ははっ、万事休すですか……)

新種がこちらへとゆっくりと歩いてくる。それに対しこちらは動くことが出来ず、それを見つめ続けるしか出来ない。

(私が居なくなると少なくともこの地域に搜索は入る筈。この新種は危険です……人里に行ったら被害が分からない。早めに見つけてくれると助かるのですが……)

ボンヤリと思考を続け、新種が前脚を振り上げるのを見つめる。

(ああ、高級店に行くの楽しみにしてたんだけどなあ……)

新種の脚が振り下ろされる。

「おい！まだ諦めてんじやねえよ!!」

振り下ろされた新種の一撃は森から飛び出してきた人間の持つていた大剣に逸らされ私の真横に落ちる。

新種は後方にジャンプし現れた新手に警戒をしているようだ。それに対し私には安堵と少しの罪悪感。

「ギルバド………さん。」

「おう！無事か!!」

呼んだ救援が駆けつけてくれた。

## 7話

ーむ？ 新手か：

相手の行動をある程度見終わり、同じ動きしかしなくなつたので殺しに動き、男性ハンターは背口のだ真ん中に飛び込んできたのでそのまま食らい、女性ハンターにも止めを刺そうと前脚を振り下ろした時にその男は現れた。

ー武器はリオレイアの大剣、装備もリオレイアか……大剣使いの動きも見させてもらおうか。

ゆっくりと構えをとり、いつでも攻撃出来る様に体勢を整える。

「まあ、任せとけ！俺の装備とこの「祖父から継がれてきた大剣に誓って、ですよね？何回も聞いてますよ？」む？そうか！」

相手は相手でなにやらイケメンムーブをしている。女性ハンターは微笑み男性ハンターは少し照れくさそうにしている。焦つたいな……生暖かい視線をくれてやる。(後で殺すけど)

眼を色々変えてみてこれだ！と思つた生暖かい視線を相手に注ぐ。暫くすると話を終えたのか男性ハンターが数歩歩きこちらに大剣を向けてきた。

「待たせたな！これからは俺が相手をさせて貰うぞ！（何やら変な目線を感じる……気のせいかな？）」

何かを口に含みながら男性ハンターが突っ込んできたので生暖かい眼をやめてこちらも攻撃する。

右前脚を振り下ろすが相手は直前で停止、こちらの右前脚は相手の目の前に振り下ろされた。

「ダエエエエエイ!!」

男性ハンターの渾身の振り下ろしが右前脚に来るが命中箇所はこちらの鎧の中でも上から数えた方が早い方の硬度なのでそのまま受けることにする。

ガキンと男性ハンターが振るった大剣はこちらの鉈石に弾かれる。渾身の振り下ろしが弾かれるとは思ってなかったのか、少し驚愕の気配をさせる男性ハンターに左前脚で反撃するが後ろにジャンプして躲される。

「思ってた以上の硬さだな！溜め斬りでも弾かれるとは思わなかったぞ！」

男性ハンターが何かを話しながら種のようなものを口に入れた。そのあとすぐに突進してきたので今度は尻尾で攻撃すると同時に鉈石弾の準備をする。

尻尾を頭部に向けて突き出すが男性ハンターは身体を傾けてそれを回避、一回転してそのままの勢いでこちらに大剣を振り上げ尻尾を斬りつけてくるがまたしても鉈石に

防御される。だがさつきより力が増している。

「ー威力が明らかに上がった。さつき口に入れてたのは怪力の種か

威力上昇の理由を理解し、それと同時に危機感を持つ。怪力の種でこの威力上昇なら鬼人薬や鬼人薬グレートだとどれほど上がるのだろうか？

思考が違うところに飛びかけるが男性ハンターが攻撃してきたため元に戻し振り下ろしてきた大剣に対してこちらは尻尾を振り上げる。大剣と尻尾がぶつかり合い火花を散らす。怪力の種で力を上昇させようがまだまだこちらの方が力は強い。

大剣を跳ね上げ胴体がガラ空きになった男性ハンターに向け鉈石弾を放つが男性ハンターが咄嗟に身体を捻つたため男性ハンターの脇腹に突き刺さるだけで終わった。

「ギルバドさん!!」

「グウー!しつかり遠距離攻撃も持っていたか!しかし!」

男性ハンターが鉈石弾を掴み抜き取る。身体から血が出るがすぐに止まる。

「ー何で血が止まった?回復アイテムを使用した形跡は見られないしまさかアニメとかでよく見る筋肉のゴリ押しか?」

一瞬刺さりが見えなかったかと思つたが男性ハンターが投げ捨てた鉈石弾の先端に付いている血の範囲的にそれは無いと考えを切り捨てる。その間に男性ハンターはまた何かを口に含む。

ーまた強化系か？怪力はさつき食べてたから今度は硬化か？

そういえばあのヘルムでどうやって口に入れてるんだと疑問が出てきたが今は戦闘中のためその思考を外に追い出し再び突進を開始した相手に向かって鉈石弾を放つ。

「その攻撃はもう見たぞ!!」

大剣をこちらの鉈石弾の先端に添えて、少し傾け逸らす。それを見て再び鉈石弾を準備するが今回は少し細工をする。そして発射。

飛んでいった鉈石弾をまた男性ハンターが逸らそうとするが目前で鉈石弾が自壊、散弾となって男性ハンターに襲い掛かるが咄嗟に大剣を盾にして散弾をやり過ぐす。その男性ハンターの胴体に向かって尻尾を突き出すも男性ハンターは腕を間に挟むことで胴体を守る。

尻尾が男性ハンターの腕に突き刺さり貫通するが腕を挟まれたことで威力が下がり胴体の鎧を貫通させることは出来ない。

仕方ないのでそのまま持ち上げ適当に振り回したあと視界の端ですつとコソコソしている女性ハンターに向かってぶん投げける。

ー今ので腕はイカれてると思うんだけど、どうやって回復するのかな？

回復アイテムの効能が見たいため殺さずに壊す方にしてみたがどうだと視線をそちらに向けるが女性ハンターが受け止めたのかそこには怪我もなくピンピンとした男性

ハンターが……て、ちょっと待て。

——何で腕の傷も治っている？貫通したんだぞ？まだ回復アイテムらしきものを口に含んだ所なんて見てないぞ。

どうなってるんだ？と少し混乱する。そんなこつちを見ながら男性ハンターは女性ハンターに何かを言われているようだ。

——どうせ私も一緒に戦います的なことを言ってるんだらうけど、もう女性ハンターに対しては見るこたないしとつとと殺したいんだよなあ。

太刀といえは鬼人斬りなどがあるが向こうが使ってくる気配が一切無いので次の太刀使いに出逢えばその時でいいかと思つていたので、近づいてくるなら即刻叩き潰す。

しかし男性ハンターが何かを話し、女性ハンターの参戦を拒否したみたいだ。悔しげに下を見つめる女性ハンターを見ていたが、男性ハンターにこちらに近づいてきたことで視線をそちらに戻す。

「待たせたな！少しお転婆娘を宥めるのに時間がかかった！」

男性ハンターが何かを話しながらこちらに近づいてくるがこちらはさっきの回復アイテムを使わずに傷を治した方が気になる。やはりハンターはモンスターだった？

「疑問に思つてそうだが、卑怯とは言わないでくれよ！こちらは貴様たちに比べると

遙かに貧弱な身！だから小細工をしないとならんのだ!!」

また男性ハンターが何かを口に含む。そしてこちらに突進してくるが今度は少し右回りで来るため鉋石弾が撃ちづらい。

狙いを定めて撃つてみるが少しずれた、修正して再び撃とうとしたがその前に男性ハンターがこちらに来たため諦めて前脚で応戦する。振り落とされる前脚に男性ハンターは必要最低限の動きで回避、そのまま大剣をこちらの関節部に振り下ろしてきた。

ピシ、と関節部にヒビが入る。それを感じたと同時に後ろにジャンプし、即座に鎧の状況を見る。まだ一番脆い関節部にヒビを入れた程度だが、ヒビを入られたというだけで警戒ランクを上げる理由にはなる。

すぐに修復を終え、男性ハンターに飛びかかる。男性ハンターもこちらの飛びかかりに何とか反応し大剣を盾にするがそのまま地面に倒れ込む。

このまま止めを刺そうと両脚に力を込めていき男性ハンターを大剣ごと踏み潰そうとするが向こうもこのままだと死ぬとわかつているか必死に力を込めて抵抗してくる。しかし力では圧倒的にこちらが勝っているので徐々に男性ハンター側が押されていく、大剣が男性ハンターに触れるところまで押し込み止めを刺そうとしたところで眼に衝撃が来る。

女性ハンターがこちらの眼を覆う所を太刀で突き刺してきたのだ。大丈夫だと知っ

ていても生物として反射的に反応してしまい。のけぞったところで男性ハンターに脱出される。

止めを邪魔された苛つきで横から尻尾で女性ハンターの両脚を貫き、持ち上げて地面に叩きつけようとしたが男性ハンターがこちらに突進してきたため、そっちへ投げ飛ばし追撃で鉾石弾を放ち更に突進する。

女性ハンターを受け止めた男性ハンターは鉾石弾を大剣で防ぎ、一、二言喋ると口から吐き出した何かを女性ハンターに渡し後方に投げ飛ばす。

そのままこちらに斬りかかってきたがこちらは顔口で相手の大剣を受け止めようとすると即座に下がりこちらの攻撃をやり過ごす。

——また膠着状態か、この男性ハンター攻めるのも上手いけどなにより防御が強い。さっきの飛びかかりも相手がこちらの速さを知らなかったから出来たことだろうし、見られたからにはもう一回やっても不意をつかない限り成功する確率は低いだろう。ところで邪魔してくれた女性ハンターは何をしてるんだ？

思考を回している間にふと目に入った女性ハンターをみると脚から血を流しながらも男性ハンターに渡された何かを見つめながら百面相をしている。

頬を赤らめながらも意を決した顔をしつつ何かを飲み込むと脚から流れた血が止まるどころか怪我そのものがなかったかのように治り始めた。

ーなるほど、秘薬か……それをずっと口に含みながら戦って、大ダメージを負った瞬間に飲み込んで回復すると……それならさつきまでの回復にも説明がつく。

脇腹と腕がすぐに治ったトリックがわかったので、少しスッキリする。そのまま目の前の男性ハンターを仕留める方法を考え始める。

ー女性ハンターに渡した分で使用回数は三回。支給用なのか普通に二つ以上持ち歩けるのかは知らないが最低でもあと二回は即死で無ければ無かったことに出来るわけか。上限があるのか分からないから弱らせていく方法は使えないなあ。なら狙うのは秘薬を飲み込むより前に殺せる部位、喉とか頭か？

方針が決まったので攻撃を開始する。尻尾で喉などを突き刺そうとするが男性ハンターも大剣で防ぎ逆にこちらの関節部を狙い斬りかかってくる。しかしこちらはヒビが入るだけでそう何度も同じ場所を攻撃されると不味いが男性ハンターはそこまでの技量は無いようだ。そこで一気に勝負をつけることにする。

胸口に鉦石槍を生成、巨大化させ鉦石砲の準備をする。直撃したら恐らく即死するだろうし防いだとしても衝撃で大きな隙を見せると予想できるためそこを突く準備もする。尻尾の先端を鉦石で覆い更に圧縮し、薄く鋭く作っていく。

準備が完了したので男性ハンターから距離をとり跳躍する。着地点は男性ハンターと女性ハンターが直線上に位置するところ。着地し、すぐさま胸口を開くと両ハン

ターは胸口に驚愕していたがその中にある槍を見つけてすぐ退避しようとするがそれよりもこちらが速い。

鉾石砲を発射しすぎさま距離を詰める。男性ハンターは女性ハンターの回避が間に合わないかと判断したのか大剣で防ぎ切る行動をとる。

衝撃と音が辺りに響く、大剣はヒビ割れるが男性ハンターは何とか腕を上には振り上げ鉾石砲を上へと逸らした。それを見てこちらは思い通りにいったことに思わず口角を上げる。男性ハンターは目の前に迫るこちらを見て急いで腕を下げようとするがその前にはこちらの攻撃は終わっている。

男性ハンターのヘルムの眼の部分目掛け尻尾を突き刺す。ずぶりという感触と共に男性ハンターの後頭部から自分の尻尾が突き出ている。

尻尾を引き抜くとヘルムの隙間から夥しいほどの血が噴出し男性ハンターは倒れた。ピクリとも動かないし回復する様子もないため即死だろう。

その様子を見てみると女性ハンターが呆然とした様子でこちらに歩いてくる。そのまま男性ハンターの横に座り揺さぶっているが男性ハンターが起き上がる気配はない。ヘルムを脱がし、秘薬らしきものを口に突っ込んでいるが男性ハンターは飲み込むことも無い。

暫くすると理解したのか涙を流しながらも太刀を握りこちらに突進してきたが素直

にくらってやる道理もないので前脚を振り下ろし女性ハンターの腕もろとも太刀を吹き飛ばす、そのまま女性ハンターを押さえつけ尻尾を目の前に持つていくと血塗れの尻尾に恐怖したのか嫌々と首を振り始めたので、少し男性ハンターの止めが遅れたのに対する仕返しをしようと思う。

女性ハンターを持ち上げ胸口を開く、自分がどうなるのかを想像してしまったのか何かを必死に叫んでいるが構わず放り込む。放り込んだあと暫く胸口を開けておくと女性ハンターが牙に傷付けられながらも出て来ようとするので出口が近づいたところで胸口を閉じる。内側から感じる小さな衝撃を無視しつつ咀嚼を開始した。

## 8話

胸口に入っていた女性ハンターを飲み込み、これからどうしようかと考える。気分的に擬態の練習を続ける気にはならないし、かといつて寝るには少し早すぎる。悩んでる間にまだ男性ハンターを食べていないと思いついたので遺体を掴み胸口に放り込む。

——この戦闘で分かったのは、ゲームのモーション通りに武器は振るわないうつてこと。これはモンスター達のお陰で薄々そうなんだろうなあとは思っていたけど、アイテムを口を含みながら戦うのは分からなかった。それにハンター次第で使える技も違うのかもしれない。レイア装備の男性ハンターが大剣も持ったまま走り回るの驚いたなあ。同じ武器種を持つてるハンターがいても暫くは様子見から入った方がいいのかもしれない。あと強化系のアイテムも警戒だな。反省会はこれぐらいでいいかな？取り敢えず周りの戦闘跡を出来るだけ消すかあ。調査隊が来られても嫌だし。

ハンターが帰ってこない場合、ギルドが怪しんで調査隊を派遣する可能性があるかもしれないので周りの血痕などを消すことにする。地面についた血痕を地面ごと掘り出して胸口に入れる。それから男性ハンターと女性ハンターの武器も胸口に放り込む。端っこに落ちていた恐らく女性ハンターが落としたのだろうアイテムポーチは持って

帰ることにする。ざっと見渡すと戦闘があったところは少し地面が掘り返されただけの場になっており戦闘を行った形跡などは他者が見ても分からないと思うためこれだけ後処理は完了したことにする。ヨシ！

その後は川に行き、出来る限り身体についた血などを洗い流し、ついでに水分を補充してから洞窟に戻ってきた。洞窟の中に入った後に尻尾に吊るしていたアイテムポーチの中身を確認しようと思う。

ーゲームのアイコンで大体の種類はわかるけど秘薬などは黄色い袋に入ってるだけで中身が何かは分からなかった。そのせいで男性ハンターの瞬間回復の仕組みにも気付くのが遅れた。ここで確認できる機会ができたのは幸運だな。男性ハンターも考えなしに食べる前にアイテムポーチを剥ぎ取つとけばよかったな。

アイテムポーチを四苦八苦しながら開き、中身を尻尾で掴み地面に置いていく。中身を全て取り出し終えたので順番に確認していくことにする。

ーえーと、瓶の中に入っている緑色の液体だからこれは回復薬かな？いや、Gって書いてあるからグレートの方か。それから黄色の液体は強走薬か？これもGがついてるからグレートか。それでこの石は何だろう？砥石か？それともただの石ころ？多分どっちかだろ次だ次、何かに包まれてるけど形的に多分こんがり肉だな、包んでるけどよく突っ込めるな。次は、玉かな？五つあるけど閃光か音爆？ペイントか？それとも

空に打ち上げてたやつか？後で投げればわかるかな？これだけかな？意外と少ないな。回復薬とかは一回飲んでみようかな？効果が出るなら役に立つかもしれないし。

回復薬グレートの蓋を尻尾で斬り裂いてから顔口で啜え中身を飲んでみる。液体は鉱石袋で鉱石となり体内に収まった。

ー 飲んででも中で鉱石になるから意味ないと。もしかしたら鉱石が消化される時に効果が出るかもしれないけどそんなタイミングなんて分からないし、ピンポイントで怪我してるなんてなかなか無いことだし大して意味ないってことかな。かけてみるとどうだろう？

鎧を砕き、自身の右前脚に尻尾を少し刺してみる。血が出たのを確認してから回復薬グレートをかけてみるが怪我が治る様子はない。

ー まああそうだよなあ。かけて治るならハンター達もいちいち飲むよりかぶっかけるだろうし。分かったことは、他のモンスターならまだ分からないけど俺には飲料系のアイテムは意味ないってことかなあ。

飲料系のアイテムは使えないことに少し気分を落としつつ、こんがり肉を食べながら玉に視線を向ける。

ー 取り敢えず、投げてみたら分かるかな？

五つあるうちの一つを尻尾で掴み、念のため眼を閉じてから放り投げてみる。玉はあ

る程度飛ぶと爆音と共に弾けたがそれよりも大きな音を出せる自分には効果は無い。二つ、三つと投げてみたがそちらも爆音を響かせるだけだった。

——三つ連続で音爆弾かあ、これ全部音爆弾じゃないの？残しても邪魔にしかならないだろうし全部投げるかあ。

二つ残しても意味がないし口に放り込んでも中で弾けて残ったカスが鉱石化しても消費の方が勝るのでやる意味がない。二つ同時に放り投げて、洞窟の鉱石を食べるかあと後ろを向いたと同時に辺り一面に弾ける閃光。

——ぬうわああああ！眼があ！眼がああ！！

後頭部の眼が閃光を見てしまい視界の一部が真っ白に染まる。鉱石で覆われているのに視界が真っ白に染まる威力にそりや他の大型も閃光くらうと暴れるわと一人納得する。暫く悶えていると後頭部の眼も見えるようになったので鉱石を食べて寝る事にする。最後に酷い目にあつたわ。

次の日、朝起きると空が快晴なことに驚き、いつものところで嵐の確認をするとそこに嵐はなく青空が広がっていた。

——倒せたんだ。逆に考えると古龍を倒せる化け物がこの近くを通るかも知れないっていうことなんだけどね！嵐も止んだし草食竜も帰ってくるだろうからまだこの地に残ろうかな。他の大型も呼んでくれたら嬉しいけど、ハンターはお呼びでない。つ

いでに古龍を倒した奴もお呼びでないからどうか来ないでくださいよお。

何かにお願いしながら森の中に入る。上から差し込む日光に気分が良くなるのが分かる。やはり生物なんだからずっと日光を浴びないのもダメだな。夜行性と洞窟内に住んでいるのは知らん。

気分良く歩き、古龍が消えたことで元気になったジャギイを蹴散らしつついつもの場所まで歩く。森の空けたところに着くと昨日発覚した自身の鎧化のデメリットである追跡のされやすさに考えを巡らせる。

——地面に落ちた鉱石粉をどうにかしたいんだけど、どうしたらいいんだろう？ 思いついたのから試していくか。

まず尻尾を地面につけ、地面に落ちた鉱石粉を回収するやり方。暫く歩くと尻尾が鈍みたになり道なりに跡を起こすようになったので没、鉱石粉が出ないようにゆっくりと歩くやり方。遅すぎ、ここから洞窟までに何時間かかるか分からない、没。逆に速く動くやり方。歩くよりかは落ちる量は減った感じがするが走ることで地面に付着する量が少なくなるだけで根本的な解決になっていない、没。関節部の鉱石を少し軽くし、砕けた後に風に巻き上げてもらうやり方。防御力が下がるが今のところ一番手応えあり。

その後も色々試してみたがどれも上手くいかないので風に巻き上げて貰う方法で妥

協する。

次は擬態形態の改造に入る。昨日ハンターを襲う時にどうせ殺すために襲うのだから近づいてきた時に攻撃したらいいのではないか？と考えたのだ。尻尾で襲い掛かる時に、二人のチームでさえ気づかれたことからハンターの最多人数である四人なら更に気づかれる可能性がある。そこで奇襲能力を上げることにする。

擬態形態になりそのゴツゴツとした鎧の各部に適当な形の穴を開けてそこに先端が鋭く尖り、両側に返しをついた鉱石の針を入れる。この穴は顔口を除く口にまで空いており各口から空気を通すことが出来る。そこに針状の鉱石を入れることで口から空気を思いつきり吐くことで針状の鉱石を飛ばすことが可能になる。吹き矢と同じ感じかな？

威力を確かめたいと森の中を歩く。ハンター相手なら擬態するがそれ以外だと擬態する意味があまり無いのでそのまま歩く。暫く歩いていると茂みがゆれ、お馴染みジャギイが五匹現れる。ジャギイがこちらを囲み飛びかかってきたのでコイツらで威力確認をしようと思う。三匹が穴の直線にいるのを確認したので口から空気を吐き針状の鉱石を飛ばす。一匹は頭部に当たり即死、残りは胴体と脚に命中し、まだ生きているが返しをつけているので抜けずにそのまま衰弱死だろう。獲物を甚振る趣味は無いので止めを刺し、そのまま食べる。威力の確認は出来たため擬態形態はこれで終了。いつも

の姿に戻り日を確認すると沈みかけていたので今日はもう水分を取ってから眠ることにする。川で水分を取っている間に少しチリチリした感覚がしたが昨日のハンター戦で気が立っているのだろうと気にせず洞窟に戻り鉱石を食べてから眠った。おやすみなさい!!!

ー暑い、何でこんな暑いんだ？昨日は普通に涼しかったぞってファ!?  
夜、あまりの暑さに目を覚まし、外の様子を見ると同時に驚愕した。

森が燃えている。轟々と炎を巻き上がり木が倒れていく。

ーえ？何で？森火事？自然発火？取り敢えずここから逃げないと……

状況が理解できず混乱するが森から逃げるジャギイ達を目にしたことで自分も走り出す。森はかなりの広範囲で燃えており視界一面が炎で埋め尽くされていた。

ーーモンハン界の森火事ってこんなにも酷いの？それともこれが普通？

逃げながらも思考を回しこの火事を考える。自然発火がここまで酷いなら森を住処にするのはやめたほうがいいかな。

そんなことを考えていると自分の少し前を走っていたジャギイ達がいきなり爆発する。

ーえっ? 何で爆発? いや、攻撃!?! どこから!?! 上!!

頭頂部の視界から上から降ってくる火球に気づき慌てて回避する。数発飛んでくる火球を回避し、上空を睨みつけると空を旋回する飛竜の姿が炎に照らされて目に入る。しかしその飛竜は本来の姿とは似ても似つかない、赤色だった甲殻は黒ずんでいて血だらけであり、尻尾の棘は数本折れている、翼も穴だらけで何故飛べているのか分からない。更に右脚は付け根の部分が潰れており血が常に垂れている。明らかな死に体、しかし飛竜は悠然と空を飛び辺りに炎を撒き散らす。目尻から頬まで伸びる赤い光を放つ線が印象的だが眼は濁っており明らかに正気を保っているようには見えない。

山! 見逃してくれる……訳ないよねえ、知ってた。

逃げようとするがこちらに火球を飛ばしてくることからこちらも戦闘体制に入る。

その飛竜、リオレウスは狂気混じりの悲鳴染みた咆哮を上げる。

「」

昨日のハンター相手で疲れてるのにもう少し待つて欲しかったなあ! 死にかけ

????????????????

てるんだから何処かで安静にしときなさいよお!!もお!!

## 9 話

「――取り敢えず、あいつを空から落とさないとダメだな。」

死にかけとは思えない動きで空を飛びオレウスを睨みつけながら思考を回す。相手からすれば攻撃し放題な空からわざわざ降りる理由もないのでそのまま火球を撃ってくるだけだろう。回避し続ければそのうち近接戦に切り替えてくるかも知れないがそれはこちらの希望的観測。

しかし可能性は高いと思う。相手は死にかけでありこちらが回避に徹していれば、勝手にくたばってくれるだろう。

「――そうなればこっちの作戦は攻撃しながら逃げ回って相手に消耗を強いる。それで相手が近接戦に切り替えたら迎え撃つ形でいこう。」

方針が決まったので真逆を向き、走り出す。後頭部の眼で後ろから相手がこちらを追いかけてくるのを確認しながら顔口に鉱石槍の準備をしておく。

相手が火球を吐き出したのを確認したので左右に回避しながら右前脚を地面に叩きつけ急停止、反転し空を飛び相手に鉱石槍を発射。しかし相手は身体を翻しそれを回避すると同時に火球を撃ち出す。

それをこちらも後ろにジャンプし回避する。再び走り出し相手の様子を伺うが特に変わった様子はなく。また火球を吐き出してくる。

さつきと同じ動きで回避と反撃をすると相手も罅が開かないと判断したのか少し高度が下がった。少し溜めの動作をした後に火球を吐き出し、そのまま急降下しこちらへ向かってくる。こちらとしてはそれを待っていたので急停止し迎え撃つ体勢に入る。

相手の火球を受け止め、次に来る本体にカウンターするべく前脚を上げる。相手も左脚をこちらへ向け急降下してくるが右脚を動かさず様子はない。

——相手側が先に届くが問題ない。攻撃は受け止めてそのまま顔面にカウンターしてやる。

そう思考しつつ相手の蹴りを受け止めるがそこで想定外が起きる。想像以上に重いのだ。

その威力に持ち上げていた上半身は耐えきれずにひっくり返る。こちらの上を取った相手はそのまま右翼を叩きつけてくるがその威力にまた驚愕する。一撃で鎧にヒビが入った。

二撃、三撃と加えられる攻撃と同時に広がっていくヒビ割れに洒落にならんとこちらも尻尾で相手を突き刺しに動くが刺さる直前で回避される。しかし回避のためにこちらから離れたので体勢を立て直す。



ろめく威力つて本当にどうなってるんだ？

上空を旋回する相手に鉋石槍で狙い撃ちしながらも思考を回す。相手はさっきの蹴りで左脚も負傷したのか血を流している。所々よろめいているところからあと僅かな命だろう。

相手もそれを自覚したのか知らないが胸の辺りが発光し始める。通常のリオレウスにそんな能力は無かったはずだと警戒ランクを更に上げる。

相手が火球を撃ち出してくるがさっきまでのよりか桁が違う。これをくろうのは不味いと全力で回避する。

地面に着弾した火球は大爆発し、辺りに炎を撒き散らす。

ー嘘でしょ、何この威力。リミッター外したただけでどれもこれも強化されすぎじゃない？て、まっず！

上空を見上げるとさっきの火球が更に数発こちらに向かって落ちてきている。

急いで回避行動をとり、火球の直撃を避ける。辺りの地面が火球による爆風などで巻き上がり砂埃が発生する。

ーあの火球連発可能か……気をつけないと。砂埃で相手の姿は見えないし、相手も同じだろうから今のうちに少し情報をまとmグウ!!?

少しでも情報を纏めようとした時に横から感じる衝撃、横に転ばされ慌てて衝撃の

あつた方を見ると相手がこちらにのしかかっていた。

見えていないのにどうやって場所がわかった？などの疑問が沸くが相手からしたら火球が着弾するまでの自分の位置を十分に確認出来ているのだから砂埃で隠れても最後に自分がいた場所に攻撃したらいいだけなのだ。

急いで空気を吸引、大咆哮で相手を追い払おうとするが二発相手はこちらに攻撃をし、自発的に離れると同時にこちらに火球をぶつけてくる。

大咆哮をしようとするが火球の衝撃により中断する。その際に相手は再び上空へと飛び上がった。

——学習されてる。どうか決定打を入れたいけど近づいてこないとどうしようもない。それにしても弱ってきてるはずなのに全然倒れないな？

相手は常に血を流しており、そろそろ倒れてもいいと思うのだがその気配が全然しない。今も飛行中でよろめいてはいるのだがそれだけである。

——これは衰弱死の可能性を省いた方がいいかもしれない。

そうなるはこちらがだいたい不利になる。どうしようかと考えた時にふと自分の今いる場所が洞窟の近くだと気づく。

——もしかしたらあいつに届くかもしれない。

洞窟の方目掛け走り出す。相手もそれを追ってこちらへと向かつてくるが予定通り。

暫く火球を回避しながら走り続け、洞窟へと辿り着くが用があるのは中ではない。

そのままジャンプし三角跳びの要領でこちらを追いかけていた相手目掛け飛び掛かる。相手もこちらが飛び掛かって来るとは思ってたようでも再び地面に叩きつけることに成功する。

——今度は逃がさん。このまま殺す。

相手の両翼をこちらの両前脚で押さえつけ、尻尾で相手の尻尾を突き刺してはりつける。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「!!?」

相手に大咆哮を浴びせ動きが硬直した頭目掛け胸口を開け飛び掛かる。

——相手は大咆哮を至近距離で受けたのだから暫く動けないはず。流星に頭を噛み切られたら死ぬだろう。

確実に殺すと飛び掛かる途中で相手を見ると何故か目があった。相手の口から炎が漏れる。

——!!不味い!!

急いで胸口を閉じようとするが相手の方が少し速く、胸口の中に火球を撃ち込まれる。

ー!!??  
!!コフウ!!

胸口の中は鉱石で覆われていて無事だが火球は鉱石袋を通り胃へ到達。逆流し各口へとその猛威を振るう。

各口から黒煙と胃を傷つけられた事による吐血。あまりのダメージに倒れてしまう。相手の追撃が来ると警戒するが相手も大咆哮のダメージが大きくすぐに立つことは出来ないようだ。

暫く悶え、ようやく立てるようになった時には相手も回復したようだが空に飛ぶ様子は見られない。恐らく飛ぶ余裕も無いのだろう。ならばこちらが有利と言いたいがさっきのダメージが大きくこちらでも走り回ることがまだ出来ない。

相手は口から炎を漏らしながらこちらを見ているが中に撃ち込まれない限りダメージにはならないとさっきの威力で確信したのでこちらは相手が接近して来るのだけを警戒する。

相手も飛べない今、勝負はこちらの脚が回復すればこちらの勝ち、その前に相手がこちらを仕留めれば相手の勝ちということだろう。相手もそれがわかっているのか急に走り出しこちらに向かってきた。

相手の翼の攻撃にこちらの前脚の振り下ろしを合わせる。本来なら骨格などからこちらが有利な攻撃は相手の死に際のリミッター解除による威力上昇で均衡にまで持つ

ていられる。

数発繰り返した時に相手が反転、尻尾がこちらの顔に打ちつけられるが逆に噛みつきそのまま噛みちぎる。千切れかけた尻尾を気にする様子を見せずに再び相手は翼を振るうがこちらが噛みつこうとするとすぐさま引つ込め代わりにと至近距離で火球を撃ち出してくる。

こちらもそれは予想出来たので口を閉じ火球を耐える。その際に尻尾を動かして相手の左脚に突き刺し、相手を動けなくするが相手は無理矢理動きこちらに噛みついてくる。それを後ろにジャンプしてかわし、それと同時にこちらの勝利を確信する。

脚を動かし問題なく動くことを確認し、相手に視線を戻す。相手はこちらが動けることに気づいているのか唸り声をあげこちらを見るだけだ。このまま鉈石砲などの遠距離離技で仕留めたいがカウンターで火球を撃ち込まれるのも怖いのでそれはやめ、代わりに頭部に鉈石の角を生やす。

圧縮しある程度の硬度で止め、相手に向けて突進する。相手も諦めていないのか胸を限界まで輝かせ火球を放つが、こちらの鎧にヒビが入るだけで止めるには至らない。

そのまま突進し、一か八かで空を飛ばうとした相手の胸に角を突き刺した。

思い出せない懐かしい何かの気配を感じ向かった場所で出会った竜に胸を貫かれ、今までの記憶を思い出せた。

自分は飛竜の中では体格が小柄で周りの同族達に比べると手際は悪かった。それでも自分のことを好きだと言ってくれる竜がいた。

『貴方がどれだけ手際が悪くても私は気にしないわ。だってその分私が動けばいいもの！』

『それだと俺の罪悪感が凄いんだけど』

『同じ小柄夫婦なんだからそんなこと気にしたら負けよ！』

『小柄夫婦とか関係なく無い？』

その竜は……妻は同じ小柄という理由だけで自分を好んでくれており、それ以外は特にいらないう。理由を聞いても

『私はずっとこの体格を気にしてたの、周りより力があっても体格で決める竜が多すぎるのよねえ……そんな時に貴方に出会ったわけ！これは同じ小柄同士仲良くするし

かないって思ったのよ！それだけで貴方のショボイデメリットなんて気にならないわ  
！」

自分の気にしていることをショボイと笑い飛ばす妻にいつのまにか絆されていたのだろう。月日は流れお互いにあーだこーだ言い合いながら巣の場所を決めて、共に巣の材料を集め、卵を産み、やがて五匹の雛が孵る。

その雛達を見ながら『この子達の成長が楽しみね』と笑う妻に『そうだな』と返した時は幸せだったのだ。

ある日妻はいつもの時間に帰って来なかった。その日は何もなく妻がいつも通りに食料をとりに行っただけだ。朝に縄張りを見回った時は脅威になるものもいなく、他の小型の竜も妻ならば問題なく殺せるものだったはずだ。

何かあったのかもしれないと探しに行くべきだと考えたが雛から目を離すわけにはいかない。もしかしたら何処かに寄り道しているだけでそのうち帰ってくるかもしれないと雛に残っていた食料を与えながら考えていた。

結局その日、妻は帰って来なかった。次の日も、その次の日も妻が帰ってくることは無かった。

数日経ったある日妻の気配を感じ、それがある程度巢より近い位置に来たので迎えに行ったらそこには小さきものが出てその者が持つ剣というものから妻の気配を感じた。

訳がわからなかった。何故妻の気配がするのに妻がいない。どういふことだ？結局答えは出ずにその日は巢に戻った。

更に日は流れ、妻はもう帰って来ないと理解してしまった。胸の辺りが苦しく、辺りに当たり散らしたいと考えてしまいが視界の端にいる雛の姿を見てそれを押さえつける。

『そうだ……雛を育てない……』

妻の残したものだ。この子たちが育つてから妻を探しに行けばいいと。きつと何処かで生きていて何かが原因でこちらに帰って来れないだけだと、ならこちらから迎えに行つてやればいい。きつとまたあの笑顔を見せてくれるだろう。

その日から雛の育成に力を入れた。外敵があまり動かない時間帯に食料を確保しに行き、それ以外は巢に引きこもった。前みたいな見回りはその間に巢の中に不埒者が入つて来ないとも限らないので雛を育てきる覚悟を決めてからやっていない。

あれから暫く日が経ち、新たな悩みが来た。嵐が近づいてきている。自然の嵐なら良かったが中に何か巨大な気配があり、威圧感を感じる。

すぐに逃げるべきだ。分かっているのに妻と過ごしたこの巢から離れたくなくてギリギリまで嵐が進路を変えてくれないかと願っていた。

しかし現実は無情で嵐は進路を変えずこちらに近づいてきた。今すぐ逃げなければ

間に合わないだろう。雛も逃さなければならぬ。

気持ちを整理し、逃げるために雛も元へ歩く。雛を掴もうとした時に感じる振動。嵐が来るには少し速い。辺りに視線をやると地面からそれは現れた。

暗緑色の鱗に異様に太く強靱に発達した後脚と尻尾。そして喉元まで裂けた口に棘に覆われた顎。突如現れたその竜は涎を垂らしながら雛を見ていた。初めて食われる側の立場に立った雛達は怯えていたが心配することはない。雛達の前に立ち、その不埒者に咆哮をあげる。雛を食いたければ自分を殺してから行けと。不埒者もこちらに目を向け、激突した。

あれから何時間過ぎただろうか？お互いに傷を負い、しかし倒れることはない。巢の外壁はボロボロになりここからでも外が見える。そんなことを考えていると不埒者が弱々しい咆哮をあげて自身の千切れた尻尾を咥え地面に潜航する。暫く警戒していたが戻ってくる様子が見れないため割に合わないかと逃げたようだ。そう考えると身体から力が抜けて倒れ込む。なんとかか立とうとするが立つことが出来ない。暫くは無理だなど思っているとかかなり強い風が吹いている。そこで何が迫ってきているのかを思い出し、血の気がひく。慌てて外に視線をやると嵐がすぐそこまで来ていた。どうにかして身体を立たせようとするがいうことを聞かない。

嵐が来た

雛に大声で何かに捕まるように叫ぶ、それと同時に身体を引き摺りなんとか雛を庇おうと近づく。

一匹が反応に遅れ、そのまま巻き上げられた。

一匹が地面に倒れ込み巢の枝に捕まる。諸共巻き上げられる。

二匹がお互いにしがみつき、何とか耐えようとする。二匹とも巻き上げられた。

最後の二匹はすぐ横にあった木の枝にしがみついている。それは妻と一緒に運んだ木だった。

『頼む、何とか耐えてくれ。』

何かに祈りながら必死に身体を引き摺る。後もう少しというところまで近づいたが現実はどこまでも非情だ。

パキッと何かが折れる音がする。それと同時に最後の雛の身体が浮き上がる

「びいびい!?!」

「ぐるおおおお!!」

何とか首を伸ばし雛を啜えようとするがギリギリ届かない。遠のいていく雛の姿を

追いかけて上を見上げた時にそれを見た。

山吹色の模様が入った白い皮膚に黒い甲殻、そして頭部にある巨大な二本の角。そこまで見たところで頭部に衝撃がきて、そのまま意識を失った。

『うう、( )は、!?!雛は?!』

意識が戻り、嵐が去り空は晴天なのに止まらない雨を疑問に思いつつ、ボヤけた視界で真つ先に雛の姿を探すが巢の中には見当たらない。急いで飛び上がり辺りを探し、巢の下にそれを見つけた。

首が変な方向に曲がったり、身体に石の破片が突き刺さったり、身体の一部がなかったり、頭部が陥没している雛だったもの。

『あつ、ああ……』

声が出ない。顔でつついても冷たくなった雛は反応することは無かった。

『いや、まだ一匹いない。きつと生きているはずだ。そうだ、そうに違いない。冷たくなった雛達を食らい、飛び上がる。縄張りを探し回るが見つかからない。』

『きつと何処かに隠れているんだな、外は危ないと伝えていたからな。』

それから数日雛を探すが見つからず、もしかしたら何処か遠くに飛ばされたのかも知

れないと思い、雛がいそうなところを片っ端から探すことにした。

『なんだよお前！いきなり来て！俺達の雛に手を出すんじゃない！』  
うるさい、黙れ

『やめて！この雛は私達の雛なの！手を出さないで』  
喋るな

足元で喚く二匹の同族の首を踏みつける。何か折れる音がした後、静かになった。

『……違う、雛じゃない』

自分の雛に似た偽物に苛立ちが募り、踏み潰す。雛はどこに行ったのだろうか？

ここじゃない

ここにもいない

何処にいる？

隠されたのか？

思いつくところを見て行ってもそこにいるのは偽物だけで自分の雛が見つからない。  
また一つ偽物を潰したところでふと思い出した。

『そうだ、雨が降っていたら身を隠すようにいったんだった』

なら出て来ないはずだと自分で納得し、まずは降り続ける雨を止ませる方法を探そう。そう結論を出し飛び立った。

雨が止まない…… その竜、雨の止ませ方を知らないか？雲より高く空を飛んでも、どこまで遠くに走っても、この雨は止まないんだ。  
知らない？そうか、すまないな

雨が止まない…… その竜、雨の止ませ方を知ってるか？洞窟の中に入っても、空を爆炎で覆おうと、この雨は止まないんだ。

知らないか？そうか……

雨が止まぬ…… その龍、雨の止ませ方を知らぬか？何、嵐を操る貴様なら雨の止め方ぐらい分かるだろう？

何故止まん…… その竜、雨の止ませ方を知らぬか？かつての仇を殺しても、この雨は止まぬのだ……俺が初めて見る貴様なら何か知ってるのではないか？

雨は止んだ。この晴れた視界ならきつと雛も見つけられるだろう……

随分と待たせた。まだ待っていてくれるだろうか？ 迎えに行く前に父は少し疲れた。だから少しだけ眠らせてくれ。

竜よ、感謝する。

## 10話

突き刺さった角を引き抜き、数歩距離をとって相手を見る。相手は少し呻くような、何かを話すような様子で口を動かしてからゆっくりと眠るような体勢で地面に倒れ、そのまま絶命した。

――何とか勝てた。相手が死にかけじや無かったら今頃どうなっていたことやら……

倒れた相手を見るととても穏やかな表情にも見えて実はまだ死んでいなくて寝ているだけなのではないか？と疑問に思ってしまう。

――本当に死んでるよな？すぐく穏やかな顔なんだけど、足元の血溜まりがなかったら死に真似にしが見えないな。それにしても、あー、腹が痛い。

火球をくらってから腹がジンジンと痛む、各口から出ていた血は既に止まっているのは流石モンハン界のモンスターというべきか。

それでも直撃した胸口は損傷が大きく、胸口から鉱石槍などの生成をしようとする酷く痛む。

――これ放っておいても治るかなあ？自然治癒に任せるしかないかあ……それに

さつきから何か空に飛んでるし……

リオレウスにトドメを刺す少し前から頭頂部の眼は空を飛ぶ飛竜を視認していた。

途中で乱入してくるかと警戒していたがそんな事はなく、トドメを刺した今でも様子を見るように上空で旋回しているだけだ。

——流石に連戦は嫌だなあ、来たら迎え撃つけど。

来ないなら先に補充を済ませようと亡骸になったりリオレウスに近づくが、それを見た飛竜は急降下、こちらの頭に蹴りを放ってくる。

こちらはそれを見ていたので頭に当たる直前で顔を傾け回避、更に顔口で突き出された脚に噛みつき地面に叩きつける。

数回地面に叩きつけた後、相手を亡骸の方にぶん投げる。投げられた相手は地面を転がり亡骸に衝突、停止する。

ここで相手の容姿を確認するがそれはついさつきまで戦っていた個体の本来の姿であるリオレウスだったがこいつも少し容姿が異なる。

身体には嵐に揉まれた様な傷跡があり、特に顔にある大きな傷跡が印象的だ。それよりもこちらが気になるのはその背中にある鞍だ。

——何でリオレウスに鞍なんてついている？もしかして近くにこいつを飼い慣らしてるハンターが居るのか？

辺りを見渡すがハンターの姿は見えない。しかしすぐ近くに居る可能性は高い。

——合流されたら不味い、すぐにこいつを仕留めないと。

再び鉾玉を活性化、鎧が明るい白色に変色するのを確認する前に目の前の敵を殺すと飛び掛かる。

相手は少し口を動かす。火球だと思い気にせず突っ込むが撃ち出されたのは火球ではなく玉みたいなもの。

玉?と疑問に思った途端に弾ける閃光。

「!?グルウオオオオ」

その玉に意識を向けた時に弾けたので視界が真っ白に染まるが、すかさず反転。後頭部の視界を使い相手を仕留めにかかると。

こちらに近づいてきてしていると予想し、尻尾を振り回すが空振る。相手はこちらを無視して亡骸を掴み、空に飛ばたこうとしていた。

——何が目的だ?獲物の横取りか?

真っ白に染まっていた視界が元に戻り、相手を見つめるが相手はこちらを気にせず亡骸を運ぶことに意識を向けている。

鉾石槍で撃ち落とそうかと考えたが、既に相手は空高く飛ばたいしており、当たったとしても対して効果は得られないだろう。

身体中に傷跡があるリオレウスは亡骸を掴んだまま火の海となった森を越えて夜空に消えていった。

ー森を越えたということはハンターは近くに居ないのか？いたら合流する可能性が高いはずだし、こちらとしたら連戦は勘弁して欲しかったけどその対価が戦利品の損失つて割に合わないなあ。

力を抜き、元の暗い白色に戻る鎧を見つつ地面に伏せる。

ー流石に疲れた。けどすぐに移動しないと。

辺りに視線を向けると一面が炎で明るくなっている。空は黒煙で覆われており、夜と相まってこの火災は遠くからでも良く見えるだろう。

恐らくギルドなどもこの事態は把握している。この火災が治まった後に被害状況などを確認に来る可能性は高い。そうなればこちらも見つかる可能性が高くなる。それにこの火災だ。本来の残る理由であった草食竜やそれを追いかけてくる大型モンスターもこつちにくる可能性は低いだろう。

ここに残るのはデメリットの方が多いため新天地目指して移動することに決めた。

ある程度の休息は取れたので立ち上がり適当な方向に向かって走り出す。出来れば自然豊かで食料がいっぱいあるところに辿り着きたいなあ。

走り始めて数日、腹の痛みはすっかり治ったが未だに納得のいく土地に辿り着けない。何箇所かはこれは……という土地を見つけたのだが寢床となる場所がなかったり、主食の鉱石が少ない場所だったりしたので候補として置いておき先に進んだ。

——候補といっても当てもなく走り回ってるから今更戻れるわけないんだけどね！何で考えなしに走ってるんだよこのお馬鹿!!

四個目の候補地点から走り出し、数時間経ってから気付いたことだが、辺りは平原で方角も見えてなかった。今更反転しても戻れるかは分からない。

自分の間抜けさを自分で罵倒する何も意味がないことをしながら走り回る。

更に数十分走り続けると遠くに何かが見える。先頭をポポが引いており、屋台のようなものが七つ繋がっている。

——あれは確か……キャラバンだったっけ？

モンスターハンター4に出てくる我らの団の最初の移動手段であった筈。パツと見た感じ、見覚えのある形状では無かったので我らの団のキャラバンではないだろう。

——我らの団のキャラバンだったら即座に回れ右してるけどね、主人公の乗ってる可

性能があるなんて襲うリスクが高すぎる。

けど初期頃の状態なら今のうちに襲うのもありか？と考えながらキャラバンを見て  
いるが動く気配がない。

ー休憩中かな？こんな見通しのいい平原でよくやれるなあ。見つけてくれって  
いつてるようなものだぞ？

いや、逆に見通しの良いところで休憩することでモンスターから奇襲される可能性を  
下げてるのか？

奇襲される可能性を下げるなら、森などに隠れて見つかる可能性を下げた方がいいと  
思うんだけどなあ……

キャラバンの乗組員達の度胸に驚嘆しつつ眺めていると何やら騒がしい。目を凝ら  
して見るとどうやら休憩ではなくトラブルが起こっていたようだ。

なにやら三つ目の屋台周りに人が集まっており数人が首を振っている。その少し離  
れたところにはリーダーらしき人に縋り付く人がいる。

暫くすると三つ目の屋台から人が離れ、臃げだが見えた。

ーうーん、車輪が壊れたのかな？それで予備が無いから直そうにも直せない。  
リーダーらしき人に縋りついてるのはその屋台の持ち主かな？車輪を分けてくれとか  
言ってるのかな？

色々予想しながら見つめていると人が動き出した。どうやら三つ目の屋台の連結を外し始めたようだ。

ーおお、捨てていくんだ。それじゃあ、あの継りついてるのは車輪を分けてくれじゃなくて見捨てないでくれとでもいつてるのかな？

未だにリーダーらしき人に継りついてる人を見る。他の屋台に荷物を載せて貰えば良いのに。あ、殴られた。

地面を転がる持ち主を見てると再連結が終わったようだ。キャラバンがまたゆつくりと動き出す。それをみた殴られた持ち主は慌てて自分の屋台に戻り、暫くすると袋を背負いながら出て来て、一番後ろの屋台に飛び込んでいた。

さて、自分としてはこのキャラバンを見送る気はない。理由はこちらはお腹が空いており、偶然目の前に食料となるものが通り過ぎている。それだけの理由だ。

ー右、何もいない。ヨシ！左、何もいない。ヨシ！上空、鳥が飛んでいるだけ。ヨシ！地面、見てもわからん。多分何もいない、ヨシ！

平原だし逃げようとしてもこちらが気づけるから問題なし、ヨシ！行くかあ！

キャラバンの先頭目掛け走り出す。それと同時に顔口に鉱石槍を生成する。

ぐんぐんとキャラバンとの距離が近づき、あちらもこちらに気付いたようだ大声で周りに知らせる。

「大型モンスターが出たぞおお!!」

「ここら辺にはいないってギルドが言ってたじゃねえか!ガセだったのか!」

「知るかよそんなこと!早く迎撃するぞ!!」

キャラバン内が騒がしくなり、中からアロイ装備をした人が出てくるが気にせず鉾石槍を発射。

鉾石槍はポポに命中、ポポが倒れるのを気にせずに目の前までに迫った人間を右前脚で踏み潰す。

周りの人間が動揺するがリーダーっぽい男が声を上げた事で落ち着いたようだ。

「落ち着けえ!護衛隊は盾を展開しながら前に出る!他はこやし玉の準備だ!死にたくなけりや死ぬ気で動け!わかったな!?!行動開始!」

男の声で相手の動きが変わる。アロイ装備の人達は盾を構え固まり、後ろの人達は慌ただしく動き始める。

組織だった動きに関心しながら尻尾の鉾石を圧縮し、細く長くしていく。圧縮し終わった尻尾をこちらに近付いていた人達の一人に目掛け突き刺す。

盾を貫き尻尾が相手の胸に突き刺さる。そのまま貫いた盾ごと持ち上げ周りに盾など無意味と知らしめるように見せつける。

尻尾を背口に持っていき、そのまま食らう。一人食べた事でアロイ装備の人達に視線

を戻すとかかなり動揺しているようだ。

および腰になっている人達をまた一人貫き食らう。それをみた数人は盾を捨て逃げ出すそうとするが鉾石槍で逃げ出した一人を撃ち抜くと逃げ出そうとした人達は動きを止めた。

次はどいつを食べようかと考えていると後ろで何かをしていた人達がこちらにくる。その手には玉を持っており、それをこちらへと投げてくる。

閃光玉だと思い、目を瞑る。しかしいつまで経っても閃光が来ることはなく、瞑っていた目を開ける。

相手はこちらの様子を伺うように見つめている。

——何投げて来たんだ？閃光玉じゃないなら他に何だっけ？音は鳴らなかつたから音爆弾でも無いし、ペイントもこんな時に投げるものじゃ無いし、あとはこやし玉か、こやし玉かあ……

この状況で心当たりがありません。玉の名前を繰り返して呟き、顔を青褪める。恐る恐る自分の身体の匂いを嗅いでみる。

——くつつつつせえ!!!何だこの匂い!!あいつら俺に糞投げて来やがった!!

あまりの臭さに頭を地面に叩きつける。そのまま地面に頭を擦り付け、匂いをとろうとするがとれる気配がない。

相手はその様子を見て更にこやし玉をこちらに投げってくるからたまったものではない。

後ろへとジャンプしこやし玉から逃げる。相手の様子を見てみるとこちらから目を離さずこやし玉を握りしめている。

——確かにこの匂いならどのモンスターでも逃げるわ。割に合わない、こんな匂いを身体につけられながら狩った獲物がこんな小さきさなんて絶対嫌だもん。襲ってきたのを振り返りするならまだしも、狩りでこれは逃げる。

幸いこちらにはこの匂いを取る方法があるのでさっさと行動する。

鎧を破壊し、本来の姿を現す。その状態で匂いを嗅いでみるが匂ってくるのは鎧からなので問題はなさそうだ。

人間達を見るとこちらの姿を見て狼狽しているようだ。だがこやし玉を離していないことから近づけばまた投げってくるだろう。

——方針を変える。一人ずつじゃなくて一気にやる。あのアロイ装備の人達もハンターじゃ無いみたいだし問題はない。

空気を吸引、溜まった空気を保ちながら力を込めて跳躍。着地点は人間達の密集しているところ。

数人を踏み潰しながら着地、こちらにこやし玉を投げってくる前に大咆哮を行う。



## 1 1 話

少し腹を満たしてから数時間。徐々に木などが見えるようになってきて更に少し走ると森にたどり着いた。

——また森かあ……探索してみても良さげならここにするか。

流石にそろそろ決めたいなと思いつつ森の中に入る。辺りを見渡しながら歩いていると小動物や草食竜などを発見できた。

草食竜などがあるということとは少なくともここは定住して生きていける程度の水や食料があるということ。後は寝床と主食かなあと考えつつも歩を止めない。

歩くこと暫く、木々の密集地帯を抜けて川を見つけた。覗き込んでみると透き通っており意外と水深は深そうだ。魚も泳いでおり行き先を目で辿ってみるとその先には湖がある。

——水の心配は無さそうかな？まだ寝床や鉱石は見つけられてないけど向こうの方に小山もあるし期待値高いな。

水の場所は覚えたので小山を目指して歩いていく。群れで歩く草食竜達とすれ違いながらも進み、小山の麓にまでたどり着いた。

周囲を回るように歩いていくとちょうど良さげな洞穴を見つけたので中に入ってみる。辺りを見渡し、生物が住んでいる形跡などは無かったのでここを仮の寝床にする。

洞穴から外へと出てすぐ近くの地面を爪で引つ掻き跡を残す。

「マーキングってこんな感じでいいのかな？ やったことないから分からないんだけど多分これでいいってことにしておこう。もし帰ってきた時に何か居ついてたら追いついたらいいや。ヨシ！」

寝床の確保は出来たので主食探しと周囲の探索に戻る。川にまで戻ってきて水分補給をしてから今度は湖方面に行ってみる。

「マーこうやって湖とか見るのは初めてだけどこれは広い方なのかな？」

少し遠くから湖を見てみるが前世では湖なんてテレビ越しでしか見たことがないの大きいのがいまいまいちよく分からない。

「マーどうせなら少し休憩するかあ。思えば走ってばっかだったし……」

念の為、擬態形態に移行してから地面に座る。小休憩なので関節部などの硬化は無しだ。

「ポーとしながら少しの休憩をする。天気は良く、ついウトウトしてしまう。」

「マーうーん、少し寝るか？ 周りは草食竜が少数いるだけだし、大型が出てても近付いてくる前に流石に気付けるだろ。気づけるかな？」

攻撃されるまで眠りこけてる自分を簡単に想像でき、寝るか迷うが数時間も走つていた疲労感はずかにあり、それが眠気となつてやつて来る。

——駄目だ、やつぱり少しだけ寝よう。攻撃が来ても鎧が守つてくれるだろ多分。

さあ寝るぞと体勢を変えている最中にふと湖近くにいたアプトノスに視線が向く。正しくはその少し先の湖に。

——？何か湖が波立つてないか？けどテレビで見た湖もそんな感じだったと思うし気のせいかな？

急に発生した異変に意識を向ける。波立ちは徐々に激しくなりながら水を飲んでいくアプトノスに近づいており、アプトノスは水を飲むために下を向いていて気づく様子はない。

やがて波立ちから魚の姿に似ている竜が現れ、水を飲んでいたアプトノスの首に噛みつきそのまま湖の中に引き摺り込まうとする。

アプトノスも噛みつかれたら流石に気づき、引き摺り込まれるのを耐えるために脚に力を込めて耐えようとしていたが大型の力には敵わずそのまま湖に引き摺り込まれた。

暫く尻尾が見えていたが水深が深いところまで行ったのか何も見えなくなつた。

——いるじゃん大型!! あつぶねえ! 寝るところだった!

先程の光景を目にし眠気が吹き飛んだ。命を張つて大型の存在を覚えてくれたアプ

トノス君には感謝を……完全にとぼちりだと思っただけ。あ、出てきた。

湖に沈んでいた筈のアプトノスが姿を現す。しかし動きは明らかに溺れているような感じで呼吸をするのも精一杯のようだ。

それも何かに引き摺り込まれる様な動きで湖に再び沈み今度こそ姿を現すことは無かった。最初辺りにみたアプトノスって食われる決まりでもあるのかな？

——湖はガノトトスの縄張りかあ。水分補給は湖じゃなくて川でしろってことだね。けどガノトトスって美味しいらしいんだよなあ。

ゲームで散々見たテキストの一文を思い出し食欲が湧き上がる。その食欲を一旦鎮めるためにガノトトスから逃げてきていたアプトノスの一頭に狙いを定め鉱石弾を発射する。鉱石弾はアプトノスの頭を綺麗に撃ち抜き絶命させる。

仕留めたアプトノスを食べ切ると食欲は落ち着いたので探索を再開する。

暫く探索していると漸く鉱石塊が剥き出しになっていてところを見つけた。喜びながら顔口で鉱石を噛み砕き咀嚼するが、自分の顔が咀嚼する度に真顔に戻るのかわかる。

——何というか、うん。味が薄いというか……石っぽいというか……

転生してから何日かは知らないがほぼ毎日鉱石を食べていると鉱石ごとに味が違うのがわかって来る。味覚があるのは顔口限定だが質がいいものほど味が良いというか

美味しいのだ。

流石にゲームの時のアイコンだと鉱石の種類は分からないが、鉄の塊っぽい物より青色の鉱石の方が美味しく感じたことからレアリティが高い方が美味しく感じるのかも知れない。因みに自分で生成した鉱石は無味だ。

——いや、まだこの鉱石塊だけ味が薄いという可能性がある。希望を捨てちゃいけない。

再び探索に戻り、所々で見つけた鉱石塊を食べてみるがどれもこれも味が薄くとても美味しいとはいえない。

——グウ……まさかの主食がこんなに薄味とは……ここら一带は鉱石の質が悪いのか。

一瞬またここも候補に入れて移動するか？と考えたが今のところ問題は味の薄さだけなので考えを撤回する。

それでも自分の主食ということもありつい溜息が漏れてしまう。

——少しシヨックだけど今までが良かったんだと思おう。はあ……

気分はしわくちやピカ○ユウだ。トボトボと歩きながら探索を進めていき、少しすると奥の方で何か青いものが見えた。

距離を詰めていくと向こうもこちらに気付いたのか前脚で持っていた蜂の巣からハ

チミツを舐めながらもこちらを見つめて来る。

「アオアシラかあ。今は戦う気が起きないからそのまま大人しくハチミツを舐めておいてね……」

今は主食の味の薄さにショックを受けてる最中なのでそのまま通り過ぎようとするのが向こうにその気は無いらしく、蜂の巣をおき、こちらの前に立ち塞がる様に移動する。

「やるんだ……いつそ鎧を脱いで逃すか？確かジンオウガから逃げてたよな？」

対処法を考えているとアオアシラが雄叫びを上げてこちらに突進して来る。よくよく考えると向こうから喧嘩を売ってきたのにこちらが鎧を脱いでまた生成するため、エネルギーを使ってやる道理もないのでそのまま迎え撃つ。

向こうの突進に合わせ、右前脚を振り下ろす。振り下ろしはアオアシラの背中にあたり地面に叩きつける。

次に左前脚を横から振り切る。アオアシラは地面を転がりながら木に激突し木を折りながらもそこで止まり、フラフラしながらも立ち上がる。

「次はどんな手で来るかなあ……って、ん？」

今の動きでこちらよりは弱いと分かったので次はどう動くかと観察していたが起き上がったアオアシラの様子がおかしい。

こちらに身体を向けてはいるがチラチラと後ろを見ており少しずつ後退している。

もしやと思い尻尾に鉍石塊を生成し、槌の様にしてから身体を横に向け吼えると同時に槌状になった尻尾を地面に叩きつける。

「グルウオオオオオオ!!」

「!?!」

この威嚇が効いたのか反転し逃走、そのまま森の中へと消えていった。

ーおお、初めて逃げていったなあ。獲物横取りレウスは目的が違うみたいだったから除外したけど、リアルだと死ぬまでお互い殺し合うと思ってたよ……

まだ大型とは二回しかまともに戦っていないけど二度あることは三度あるともいうし次の大型戦で大体わかるかなあ……

どうせ殺し合うんだろうなあと薄らと予感できてるのが悲しい。けどアオアシラぐらいだと逃げるのが分かっただけ良しとしよう。

落ちていた蜂の巣を顔口に放り込み探索を再開する。やっぱりハチミツ美味しい。

また暫く歩いていると森を抜けた。そこから草原が続いているが徐々に草が少なくなっていく、やがて草一本生えていない地になりその先には薄らと山が見え頂上からは白煙が見える。

ーこの感じだとこの先は火山か？良質な鉍石に興味はあるけどこの身体は暑さに耐性あるか分からないし行くにはリスクが高いかな？それにまだ探索が終わってない

からもし行くとしてもこの地形を把握してある程度時間が経つてからだな。

自分の考えを纏めてから反転し森に戻る。探索頑張るかあ……

あれから数日かけて色々探索し、得た情報をまとめていく。

——えーと、この森……どちらかと言うと森丘に近いかな？けどゲームでみたエリアと似ているところは全然ないから多分違うかな？それで森から少ししたところに大きな川があつて、その先には湖がある。そこからもう少し先に自分の寢床になつてる小山がある感じかな？

湖はガノトトスの縄張りになつていて、不用意に近づくと襲いかかってくると……川付近もたまに移動して来るから油断は禁物だな。

森の中は特に危険な大型はいないけど時々獲物を探しに近くに生息してるリオレイアが飛んで来る可能性がある。多分森のすぐ近くにある高地に巣があるな。それだとリオレイウスもいるか？気を付けないとね。

アオアシラは特に気にしなくていいかな？川であつた時も自分に何もしないで獲った魚食つただけだし。食い意地張つてるだけか？

取り敢えず気になつた項目はこの程度か？

寢床で自分が得た情報で気になった項目を纏めながら持ってきていた鉞石塊を食べる。味薄い……

——他にも気になることがあったら追加していこう。そういえば小型の肉食竜がいなかったな？偶然会ってなかっただけかな？数カ所行ってないとこもある筈だし気が向いたらそこにも行ってみるか。

少し入りづらいくけど壁砕きながら入れればいけるだろ！明日も頑張って生きて行こう！お休みなさい！！

## 12話

目を覚まし、ある程度身体をほぐしてから行動を開始する。持ち込んだ味の薄い鉱石を食べてから寝床となった洞穴を出て湖に向かう。

——今日は後回しにしていた所の搜索だな。その前にもう少し何か食べようか。

自分の主食となる鉱石だけでは空腹が少しマシになる程度でとても今日一日動き回れるとはいえない。

なら沢山持ち込めば良いんじゃない？と思ったこともあったが運ぶために往復するのも嫌だし何より味が薄いから大量に食べると飽きる。

——鉱石よりアプトノスの方が美味いっていうのが大量に運ぶ気力を無くす要因にもなってるんだけどね。お、見えてきた。

湖が見えてきたので思考を切り替える。辺りを見渡し、適当なアプトノスに狙いを定め鉱石弾を生成、発射する。

仕留めたアプトノスを食べながら脚の部分だけ引きちぎり、それを湖にぶん投げる。脚が落ちた所を暫く眺めているが特に反応が無いのでそのまま湖に向かい水を補給する。

——脚を落としてから数分でガノトトスが今日は川か湖かが分かる様になったのは発見だったなあ。

数日前にアプトノスを食べている最中にクシヤミをしてしまい、湖に口の中を色々ぶち撒けてしまった時にいつまで経ってもガノトトスが現れないことから気づいたことだ。

最初は血や肉片程度じゃ反応しないんだなと考えていたが、次の日にそれならと湖付近のアプトノスを鉱石弾で仕留めた時は飛び散った肉片に反応したのかすぐに姿を現しアプトノスを横取りしていった。

それから色々試してみた所、川にいる時は湖に何かあっても反応が鈍いというのが分かったので今の確認方法を取り、反応があれば川で、なければ湖で水を補給することにした。

——よし、補給も完了したし、搜索に行きますか！

水の飲むために屈んでいた身体を持ち上げ森へと向かう。森の中に入り、暫くすると岩があり、その下には小さな穴がある。

——まずは一つ目、明らかに感じるには見えないけど一応確認。

尻尾に槌の形をした鉱石を生成する。そしてそれを横振りで思いつきり岩に振り抜いた。

邪魔な岩が砕けたので穴を掘り返していくが途中で止める。穴の中から蟻の様な姿をした虫がワラワラと姿を現す。

——オルタロスの巣だったかあ。オルタロスって美味しいのかな？いや、そんなことより次に行こう。

一瞬、オルタロスの味に興味が向きかけたが気にしていたらキリがないと身体に纏わりついてきたオルタロスを地面に転がるなどして潰していく。全匹潰したのを確認してから次へと進む。

次は壁の下の方にある穴だ、大きさも少し大きく小型適度なら通れるぐらいにはある。それを前脚を振り下ろし穴を砕いて進む。暫く進むと少し広めの空間へと出た。

——これはアイルーとかの巣？家？だったっけ？けど住民は居ないみたいだな

広めの空間には土で出来た独特な形状の家が数件建っていた。周りを見渡してみてもアイルー達の姿が見えないし隠れている気配も無いのでここにはいないと判断する。

——何もいらないなら特に居座る意味も無いかなあ。次に行くか

無理矢理砕きながら入ったせいで塞がってしまった入り口を再び砕きながら外に出る。

——これはもう小型肉食じゃないんじやないか？けど環境的にはいてもおかしくないんだけどな？

疑問を持ちながらも進み、最後の穴へと到着した。穴はさつきのものよりか少し小さく、小型が入るには少し無理があると思う。

「ーいとは思えないけどここまで来たら最後までいってしまおう。」

さつきと同じ方法で穴を砕き掘り進める、ある程度進んでも全然先が見えないのでもしかして途中で道が曲がったりして、それに気付かず直進しているのでは？と疑問に思ったがそれは杞憂だった様で広い空間に出た。

「ーさつきと同じアイルー達の巣か……それに今度は住民もいると。」

突如現れたこちらに対し向こうは騒然としている様だ。暫く様子を見ていると奥の方より一匹のアイルーを連れて老猫のアイルーが現れた。

「ー多分この老猫アイルーが村長的な感じか？」

こちらに向かい何やら言っているがこちらからするとニヤーニヤーとしか聞こえない。

「ンゴニヤア、ンニヤア」

「村長、どうですか？」

「駄目みたいニヤ、初めて見るから見た目から牙竜種に通じる言語で話しかけても反応しないニヤ」

「「こう見えて飛竜種なのでは？」」

「試してみるかニャ」

ニャーニャー言っていた老猫アイルーが横のアイルーと何かを話したあとに今度はニャーニャーと少し話し方を変えてきた。何か意味があるのか？

ーそれにしてもアイルーか……うーん、どうしようか？

こちらに何かを話しかけて来るアイルーを無視して思考を巡らせる。このまま無視して出て行つても良いがアイルーは人間社会にかなり浸透している獣人種だった筈、つまりここで何もせず立ち去ったとしても自分の姿を他の群れに話し、それが噂話として広がり最終的にギルドにまで届いたら困る、すつごく困る。

ーそれはこの老猫アイルー、さつきから数回話し方を変えてこちらに何かを話しかけているけどもしかしてコイツ、竜達に話をする事が出来るんじゃないか？

未だにニャゴニャゴ言っている老猫アイルーに視線を向ける、こちらを向いたことで今の話し方だと思つたのかそのままこちらに話しかけて来る

ーここでコイツらを見つけたのは幸運だった。先にコイツらに見つかつて何処かに話されたら後手に回る所だった。自分が生きることの方が大切だから何もしてないコイツらには悪いけど死んでもらう。じゃあ、潰すか。

また固まったこちらに痺れを切らしたのか離れたところからこちらの様子を見ていたアイルーの一匹がこちらに近づき、先端に竜の爪を取り付けたピッケルみたいな武器

でこちらの前脚を叩く。

「ー丁度よく近づいてきてくれたね。んじやあ、死ね。」

こちらを見上げニャーニャー叫んでいる勇敢なのか無謀なのか分からないアイルー目掛け前脚を振り下ろす。

突然の攻撃にアイルーは反応出来なかつたのか地面のシミになる。

暫しの静寂、向こうは何が起こつたのか理解に時間が掛かっている様だ。そのうちに前脚を振り下ろした体勢から元の体勢に戻す。

前脚を退かしたことで見える様になったアイルーだったものを見て事態を把握したのか場は騒然となる。数匹のアイルーが自分より小さなアイルーを連れて逃げ出し、それ以外は武器を持ちこちらを威嚇する。

「ま、待つニャみんな！」

「ここは危険です村長！早く逃げますよ！」

老猫アイルーが何かを叫んでいたが隣にいたアイルーが抱えながら逃げていく。それらを見ながら逃げたアイルー達の数を覚えておく。

「ー残つたコイツらは群れを逃がす為の囀か？死ぬ可能性があるのによく出来るよ、自分なら絶対逃げるのにね。その覚悟に敬意を表して、痛みも感じずに殺す。出来るか知らないけど。」

鉦玉に力を込め活性化させる。更に鎧に意識を向け全体的にゴツク大きくする。アイルー達はこちらの變化に驚いた顔をしていたが覚悟が決まっていたのか直ぐに顔を引き締めてコチラに走り寄って来る。

それに向かつて前脚を横に振り抜くがアイルーは当たる直前で後ろにジャンプし、手に持っていた武器をこちらに投げつけて来る。

飛んできた武器を無視してアイルーに視線を向けるとこちらの攻撃を回避しきれなかったのか腹から血を流している。

これ以上の戦闘続行は不可能だと思ったのか周りに何かを叫んだ後、地面に潜ったがこちらは逃がす気はない。

地面に向かつて全力で前脚を振り下ろし、地面を破壊する。まだ浅いところにいたのか潜っていたアイルーは割れた地面から姿を現した。

地上に引き摺り出され、戸惑うアイルーに駆け寄る。アイルーはこちらに気付き逃げようとしたが脚が何かに挟まったのか動くことが出来ないようだ。

顔口で動けないアイルーの頭部目掛け噛み付く、最後まで目を大きく開いていたアイルーの頭部は簡単に噛みちぎれた。

咀嚼はせずに噛みちぎった頭部を飲み込み、他のアイルー達に目を向ける。アイルー達の反応は逃げられないことを悟ったのか大半が恐怖に染まっていたが数匹のアイ

ルーは覚悟を決めた表情のままだ。

「お前らニヤー！この足止め隊に志望した動機を思い出すニヤー！家族、群れを守るためニヤろ！？少しでも時間を稼ぐニヤー！その自分分達の家族が生き残れる可能性が上がるニヤー！コイツの目的は分からないけど、わざわざここまで来たことから、少なくとも自分達の群れが危ないことは分かるニヤー！！」

「でもどうやって時間を稼ぐニヤ？攻撃なんて効いてる様には見えないけどニヤ？」

「村にあるものは何でも使うニヤー！この緊急事態、村長も許してくれるニヤー！許してくれなくてもボクが責任を取るから安心して使うニヤー！分かったら行動ニヤー！」

アイルーの一匹が叫ぶと恐怖に染まっていたアイルー達も元の覚悟を決めた顔に戻り、家に入っていった。一度恐怖に染まっていたことから逃げるのかと思ひ攻撃しようとしたが目の前にアイルー達が立ち塞がったことからそちらの対処に移る。

前脚の振り下ろしで再びシミにしようとするが当たると死ぬと理解しているのか動作に移るとすぐに回避行動を取るため当たらない。

ならばと鉋石弾を生成し発射するとこちらは初見だったのか対処出来ずに一匹のアイルーの頭部を撃ち抜き、絶命させる。

それを見て止まっているのは危険と判断し、こちらの周りを走り回り狙いを定めさせない様に行動しだした。

ーむ、厄介だな。大咆哮で仕留めたいけどこんな所じゃ使えないし、尻尾で薙ぎ払うか。

尻尾の先端から真ん中辺りまで鉱石を薄く圧縮していくが家の中に入っていたアイルー達が出て来たので一旦中断し、様子を見る。

ー縄、ノコギリ、ピッケル、盾、それと後ろに置いてあるのは爆弾か。縄は何かついているな、何だあれ？

それぞれの道具を走りながら手に取りアイルー達が反撃の機会を窺っているがさせるつもりは無い。

隠すつもりは無いので胸口に鉱石砲を生成、狙いは盾持ちアイルー、胸口を開き盾持ちアイルーに狙いを定める。

少し驚愕していたが直ぐに盾を持ち直し耐える構えを取る。他のアイルーも後ろに隠れてくれたらそのまま撃ち抜くと考えていたが隠れる気配が無かったので一度胸口を閉じ、鉱石砲に自壊能力を付与、再び胸口を開き撃ち出す直前に向きを変更、アイルー達が一番密集している所に発射する。

胸口がこちらに向いた時点で回避行動に入りかけていたが飛んできた鉱石砲が自壊し、散弾となって飛んできたのをみた体格の大きなアイルーは他の逃げようとしたアイルーを掴み自身が壁となり庇った。

散弾が通り過ぎた後はサボテンみたいになったアイルーと無事なアイルーが数匹。

ー！庇ったところ申し訳ないが追撃の準備は出来ている。

サボテンみたいになったアイルーが倒れると同時に顔口から自壊能力を付与した鉞石槍を発射、庇われたアイルー達もサボテンみたいになり絶命した。

その結果を見ると背中中に違和感、後頭部の眼で見ると背中中の突起部分に縄がかかっておりアイルーが腕に付けた装置で縄を巻き取りこちらに飛び移ろうとしていた。

ー！他のモンスターの中は安置が多いかもしれないけど自分相手にそれは悪手だな。

ある程度こちらに近づいて来たところで背中中の突起を自壊させる。縄がかかっていた部分が無くなったことでアイルーが落下を始める。その先はこちらの背中、ならやることは決まっている。

ガパアと背口を開く、アイルーはそれを見て恐怖に染まったがすぐに表情を戻し、何かを叫ぶ

「みんな！背中にも口があるニヤ！気をつく

背口に全身が入ったので背口を閉じ、中にいるアイルーを噛み砕き、絶命させる。これで残り数匹。そろそろ逃げたアイルー達も追いたいで次で決めたい。

途中で中断した尻尾の鉞石生成を再開させる。薄く長く圧縮生成し、巣の半分に届く

かどうかの長さで止める。少し後ろに下がり壁に尻尾を突き刺してみるが問題なく突き刺さり、横に振っても壁を斬り裂きながら動くことから問題は無し。

アイルー達に意識を向けると盾持ちを前にし後ろに全匹固まっている。

ならこれで仕留める。前脚を思い切り踏み込み反転、勢いに任せて尻尾を振り抜く、瞬間的に接近し、盾を斬り裂きながら迫る尻尾にアイルーの二匹が反応し、地面に伏せるがそれ以外は盾が何とかすると思つたのか反応出来なかつたのかは知らないが全匹の首が飛んだ。

振り切つた尻尾はその勢いのまま壁を大きく斬り裂きそこで止まる。

生き残つたアイルーは周りの状況に少し目を閉じていたが直ぐに開け、お互いに何かを話し合つた後に小樽爆弾を腰に巻きつけ始めた。

——自爆か？その程度なら多分効かないと思うからこのまま行くぞ。

大樽爆弾を担いでいるアイルー達に走り寄るが少し奥から爆発音がしたのでそちらに視線を向けると大樽爆弾が曲線を描きながらこちらへ飛んできていた。

——まだ生き残りがいるのか？けど残つたやつのは数は数えてたぞ?!逃げたやつが戻ってきた？可能性はあるけど逃げたのは恐らく非戦闘員だぞ?!村長の護衛の可能性もあるけど村長を残してこつちに来る訳がわからん!とにかく迎撃!

まだこの世界の大樽爆弾の威力は知らないため鉱石弾で迎撃する。命中した大樽爆

弾は爆発が想像より小さい代わりに大量の煙を噴き出した。

「ーそんな爆弾見たことないんだけど!?!リアル限定か!それとあの二匹はどこ行った!?!」

煙幕のせいで二匹のアイルーを見失ってしまう。もしかして逃げたのか?と勘繰っている。と下からニャーと声が出た。

「恐らくこれでもお前には効かないと思うけどニャ、足止め隊長としての最後の足掻きをくらつてもらおうニャ」

「最後の策も完成してるニャ、どうせ死ぬなら最後に嫌がらせしてやるニャ」  
自分の下にいるのは理解したので押し潰そうとした。が下からの爆風に少したたらを踏む。爆風が収まり下を見るとアイルーの爆死体がある。自爆したようだが自分の鎧にヒビなどは無かった。

「ーこれで全匹かな?すぐに逃げたアイルー達も追いかけないとね」

外に出ようと崩落した入り口に向かい歩いてみると遠くから爆発音、警戒体勢をと、周りを見渡すが特に何も無い、一応確認のために爆発音がしたところに向かおうとするが今度は少し違うところで爆発音がする。

「ー何だ?仮に生き残りがいたとしても何がしたいんだ?」

相手の行動を理解出来ずに考えている間にも爆発音はどんどん激しくなっている。

そのどれもが遠くからで位置的には多分巢の端。

——何で端の方ばかりで爆発音がするんだ？他の入り口でも崩落させて塞いでるのか？ん？崩落？

自分で言った崩落の言葉にハツとして遠くの壁を見る。壁にはヒビが入っておりそれは爆発音と共に徐々に大きく天井にまで伸びていく。

——あいつらまさか!?いつの間にも点火したんだ!?それ以前にいつの間にも爆弾を置いた!!いや、その前に対処を！

アイルーの決死の置き土産に驚き急いで出ようとすが恐らく間に合わない。なので自分の鎧を圧縮し、その上から更に鉱石を纏って巨大な岩の様な姿になる。

そんなことをしている間にも爆発音は更に増えていき壁からも恐らく埋め込まれた爆弾が起爆しヒビを大きくしていく。

——壁に埋め込んでいるのは前からって流石に分かるけど本当にいつ巢の端に爆弾を置いたんだよ、自分が入ってきた所からも爆発音が聞こえてくるから前もって置いてた線は無いだろ！

爆発音は止んだが代わりに石などが落ちてくる。周りも少し振動しており崩落寸前だ。

——今出来る対処はこれぐらい！他にもいい手があるかもしれないけどこれしか思

いつかん！耐えてくれよお！！  
振動が大きくなり崩落が始まった。

## 13話

崩落が始まり、上から大量の岩が降って来るがこちらの動きを制限する代わりに今出来る限りの防御形態に入ったこちらにダメージが来ることはなかった。

「よく考えたならこの岩達よりか威力が上の攻撃をバンバンくらってるのにヒビしか入らなかつたんだからそこまで心配すること無かつたかな。」

「いやいや、この油断が致命傷になるかも知れないんだからこれでいいんだ。」

少し身構えすぎたか？と考えたがこちらの鎧にヒビを入れた者達を思い出し、この考えを改める。

今思えば結構この鎧ヒビを入れられてるなあ……

「――流石にアイルーなら大丈夫だと思つてただけど、巢を丸ごと潰してでもこちらを殺しに来るとは思いたく無かつたなあ。」

「この世界覚悟決めるヤツ多くない？」

ゲームでは決して瀕死になるまで戦わずに地面に潜つたりして逃げるはずなのにこの世界では道連れにこちらを殺しに来るほど覚悟があると……

「そういえば最初の方、地面に潜つたやつを引き摺り出して殺したような……それで逃

げられないって考えたのでは？逃げれないなら道連れにしようってなったのでは？

……これ以上は考えないでおこう

——どうせ逃げてでも追いかけて殺すしかないんだけどね。お、終わったか？

鎧越しに感じていた衝撃が止み、崩落が終わったことを知らせる。鎧全体を砕かずに自身の身に付いている部分だけを砕き、身体を動かせる様にする。

——早く地上に出てアイルー達を追いかけないと。まだ近くに来てくれたらいいんだけど。

地面を脚で掘りながら徐々に潜っていく。身体全体が地面に入ると横に掘り続けながら進み、ある程度までいくと今度は上を目指し掘り進める。

暫くすると土の感触が変わり、更に進むと光が差し込み地上へと到達した。

辺りを見渡し、周りの状況を確認する。周りは森だが一部分だけ大きく陥没しているので恐らくそこがアイルー達の巣だった場所だろう。

——こうしてみれば怖い攻撃を貰ったなあ、他の大型だと生き残っても岩や土の重量で身動きが取れずにそのまま酸欠とかになる可能性があったのか。

陥没した部分を見つめながら今回の戦闘を振り返っていると後ろの茂みから少し音がした。振り返らずに後頭部の眼でそちらを見ると逃げたはずのアイルーがこちらを見ている。

自分達の巢の様子が気になったのだろうか？こちらの姿を目にすると目を見開きながら少しずつ後退りし、ここから逃げようとするがこちらはもう視認してしまつてるので逃がす気はない。

尻尾の先端から鉱石を生成、尻尾の先を延長するように生える鉱石がある程度の大きさになると尻尾を振り切りその途中で尻尾の先端部分の鉱石だけを自壊させる。

すると残つた鉱石は尻尾と繋がっていた部分が砕けたため飛んでいき、逃げようとしていたアイルーの右肩を貫きながら通り過ぎる。

——初めてやったけど少しそれたかな？後で練習して命中率を上げておこう。

地面に転がり無くなつた右肩を抑えながら呻くアイルーを見ながら要練習だなど思考する。自分の前で未だに呻いているアイルーに前脚を振り下ろし、トドメを刺してからアイルーが来た方向へと脚を進める。

そのまま進んでいると左から微かに音がした。普段なら木の葉などが揺れる音かとか気にもしない程度の音だが今はアイルー達を仕留めるために動いているため少しの音でも反応してしまう。

音がした部分を見てみるとそれはパツと見ただの茂みであつたが注意深くみるとそれは茂みに見せかけた何かだ。

もしかしてと思い、尻尾を振り切り茂みに見せかけた何かの上部を斬り裂く、その後

に中を覗き込むと中には逃げたアイルー達が隠れていた。

「ーみーつけたー。仲間が自分をどうにかしてくれと思うてここで待つてたのかな？自分からしたら逃げないでいてくれたから助かったんだけどな。」

老猫とその護衛のアイルーはいないがあの老猫を抱えて逃げるとしたらそこまで遠く逃げられないだろう。多分。まずはこのアイルー達を仕留めていこう。

眼下のアイルー達はこちらを見上げているだけなので早く仕留めようと脚を振り下ろそうとするが奥にいたアイルーが地面に何かを叩きつける。

辺りが煙幕で包まれ、アイルー達を覆い隠すがそこに居たのは間違いないのでそのまま脚を振り下ろす。何かを潰す感触がしたのでちゃんと仕留められただろう。

煙が晴れ、辺りが見えるようになったので潰したアイルーを数えてみるが数が合わない。煙幕の間に逃げたのだろう。

地面をみると足跡が四方に散っている。バラバラに逃げて少しでも生存率を上げるためだろう。一つの足跡を狙い、走り出す。そんなに煙幕がはられていた時間は長くないのであまり遠くには逃げられないだろう。

走り始めてすぐに一匹目を見つけたので飛び掛かり、そのまま踏み潰す。すぐさま最初の位置に戻り、二匹目を追いかけ始める。二匹目は少しさつきより走った位置で見つけた。子供のアイルーを抱えたまま逃げていたが構わず踏み潰す。子供くらいならと

思うが下手に復讐とか誓われても嫌なので気にせず潰す。

三匹目は木の下で見つけた。何かを掘っていたので尻尾で貫く。絶命したアイルーを背口に放り込み、アイルーが掘っていた穴に目を向けるがそこには穴など空いてなかった。

——潜つて逃げようとしたんじゃないのか？何をしていたんだ？

そのまま掘っていた部分を見つめるとすこし土が動く。これは掘っていたのではなく埋めていたんじゃないか？

疑問を確かめるべく動いた土の部分に尻尾を突き刺し、引き抜く。尻尾の先端には血が付いていたので恐らくアイルーが隠れていたのだろう。地面を掘り隠れていたアイルーを掘り出す。出てきたアイルーは子供だったのでさっきのアイルーは親だったのだろうか？

——子供だけでも隠そうとしたのかな？まあ、食ってしまったから確かめようがないんだけどね。

子供アイルーを胸口に放り込み、四匹目を追いかけるがなかなか見つからない。流石に最初の足跡を追いかけるだけでは見つけることは難しくなってきた。森の中を走り回って探すが見つかる気配が無いので一旦諦めて森の外に逃げたアイルーを追いかけることにした。

森を飛び出て追いかけてるとアイルーはすぐに見つかった。何処から持ってきたが分からないがアイルーからしたら巨大な葉に乗って川を渡っている最中だったので銃石弾で仕留めようとするがすぐにやめる。

ーそういえば今日のアイツは川に移動してたんだったな。

川の向こうからアイルーに近づく影を見つめながら森へと戻る。水飛沫とアイルーの悲鳴が後ろから聞こえるが気にしない。

再び森に入りアイルー達を見つけた者から仕留めていく。大半がこちらに見つかったら逃げるのだが数匹は一か八かでこちらに向かって来る者もいた。

ーみんな森の中にいるな。てつきり数匹ぐらいは森を出て遠く離れた所まで逃げると思ってたのにやっぱ数匹で遠い土地に移動するにはリスクが高いのか？それとも巢に残ったアイルー達の強さを信用していたのか？

何故か森の中で隠れているアイルー達を疑問に思いつつ更に一匹を踏み潰す。これで残りは三匹、老猫と護衛と子供のアイルーだな。老猫と護衛は多分一緒だと思うし、あまり動き回れるとは思えないので隠れやすそうな所をしらみ潰しに探せば見つかるだろう。子供のアイルーは相当隠れるのが上手いらしくここまで動き回っているのに全然見つからないがそのうち見つかるだろう。先に老猫達を探そう。

子供アイルーがこの土地から逃げる可能性も考えたが他のアイルーがここに残って

いたのと子供一匹で違う土地まで逃げれるとは思えないという理由で一旦探すのを中断する。

さて、ここにいるわけないだろと思えば後回しにしていた場所を今度は重点的に探していこう。出来れば早く見つけたいたい所だな……

「村長、やはり別のアイルー達のところへ逃げるべきですニヤ、移動ならボクが背負います。さあ、お早くニヤ」

「無茶をいうニヤ、ここから他のアイルー達が村を作っているところまでどれだけ距離があると思ってるニヤ？それにこの脚ニヤ、動くに動けないニヤ」

逃げてる最中に挫いてしまった脚を触る、他の者達は逃げ切れたのか？村に襲来したモンスターから逃げるために散々になった仲間達を思う。みんな村が好きでアイルーだらけだ、村を捨て遠くまで逃げる事は無いだろう。恐らく森の中にいくつか作っていた隠れ蓑に隠れて事を見守っているはずだ。

だから恐ろしい。逃げてる最中の轟音、村の方から聞こえてきたそれは一部の者達し

か知らない最終手段だ。村と引き換えに襲来してきたモンスターを生き埋めにする。そうする事で村の者達を生存させる。念の為と自分の代で仕掛けた無用の代物だと思っていたが、まさか使うことになるとは思わなかった。

(これで仕留められたらいいのだが……恐らく落石とその後の生き埋めで死ぬはずニヤ。けどもしあのモンスターが地中を潜ったり出来た个体だったら……)

村は地下にあった。そこに辿り着いたという事は相手は少なくとも地面を潜ることが出来るはずだ。もし崩落までの間に地中に潜り逃げられたりしたら……嫌な予感が止まらない。そしてそれは現実となった。

足音と同時にパキ……パキ……と独特な何かが砕ける音がする。これはついさつき聞いたばかりの音だ。

護衛のアイルーに目配せをする。彼はこちらの思いを理解したのか首を振っていたがそのままじつと見つめると少し躊躇う様子を見せたがすぐに頷き、地中に潜っていた。

段々と音が近づいてくる。脚がかなり痛むが無理して立ち上がり、音の方を見据える。

音の正体が姿を現したが記憶していた姿と少し違う。身体は少し大きくなり、無いと

思っていた口が開いていてそこから白い粒子が吐き出されている。傷一つないその姿だが前脚と口周り、そして尻尾に付いている赤い液体が村で行われた出来事を物語っている。

(そうか……みんなはダメだったかニヤ……)

村に残ったアイルー達の末路に少し目を瞑るがすぐに目を開き、自分がするべきことを考える。

(このモンスターの情報を伝えなければ。村に来てまで私達を殺そうとし、逃げた私達を追いかけてくる執着性。これは危険ニヤ、この執着性が他の生物全体に向いているならまだしも、一定の種族に対して働くならもつと危険ニヤ)

一定の種族にだけ向く執着性は種族を絞る分、更に危険だ。最悪の場合、残り香やそこにいた痕跡でターゲットにされる恐れがあるのだ

(なんとか隙を作るニヤ、その間に情報を残すしかないニヤ)

全神経をモンスターに向ける。相手は周りをキョロキョロしていたが急にやめ、こちらに爪を振りかざす。

(一撃、それさえ躲せれば!!)

こちらに迫る爪を全力で後ろにジャンプして躲そうとする。脚に激痛が走るが気にしない、爪はこちらの腹を掠り、通り過ぎるが腹からかなりの血が出始める。





「ねえねえ隊長。これから行くところって隊長の故郷なんだよね？どんな所なのニヤ？」

「そうだにやあ……村のみんなはとってもいいアイルー達で尊敬出来るアイルー達ニヤ！しかも隊長は凄い特技を持つてるニヤ！」

「そうなんだ、それなら行くのが楽しみになるニヤ」

「楽しみにしておくニヤ！きつとビックリするニヤ！……早くみんなに会いたいニヤ！」

## 14話

「ここまででいいんだな？」

「そうニヤ！ありがとうございますニヤ！ほらお前達もお礼するニヤ」

「「ありがとうございますニヤ！」」

「おう、またいつでも声をかけてこい。急ぎじゃないなら乗せてやるからよ」

竜車から降り、ここまで乗せてくれた商人にお礼をする。竜車は再び走り出し、暫くすると見えなくなつた。

「さて、目的地までもう少しニヤ。付き合わせてしまつて申し訳ないけどもう少しだけ頑張つて欲しいニヤ」

「問題ないですニヤ、ボク達も隊長の今回のことを聞いた上でついて来ているからニヤ」

三匹の内の一匹がそう言つてくれて、後ろの二匹も頷く。このチームになつてから数年が経つが皆、気の良い者ばかりだ。

「そう言つてくれると助かるニヤ、村に着いたらゆつくりしていつてくれニヤ」

「今回はそこまで大変じゃなかつたし、まだまだ大丈夫ニヤよ？何だつたら村の困り

事を解決しても良いぐらいニヤ！」

「なら村で何かあつたらバンバン働いて貰うとするニヤ」

「ええ〜！」

「何ニヤお前ニヤ!?!困っている者を助けるのはボクらモンニャン隊の誇りじゃないのかニヤ!?!」

元氣いっぱいのアイルーが声を上げてそれならと返事を返すと他の二匹が不満の声を出す。そんなアイルー達の不満が気に入らなかつたのか最初の一匹が怒り出した。

後ろの騒動を聞きながら村のことを考える。長らく帰つてこなかつたから色々と変わっているだろう。それにこちらでも報告したい事がいっぱいある。何から報告しようかと考えながらここまでの経緯を思い返す。

ハンターとそのオトモというものに憧れて村を出て数年、様々な出来事があり今自分はモンニャン隊の隊長という立場にいる。

本当は今自分を雇ってくれているハンターさん：旦那さんのオトモとして行動を共にしたいが彼の横には既に相棒というべきアイルーがいるし、案外今の立ち位置も悪くない。それでも最初の方は大変だった。

オトモアイルーとして教訓を受けてから暫く、旦那さんに雇われて最初の仕事が今の仕事でもあるモンニャン隊のメンバーとして活動してくれというものだった。

モンニャン隊はオトモアイルーになる前から旅先のアイルーから聞いており、何でもオトモアイルー達だけでガーグアが引く竜車に乗り込み、各地を移動してさまざまな素材を集める仕事だそうだ。

他にも各地に異常がないかの調査も兼ねているらしい。その話を前もって聞いていたので躊躇いもなく頷いた。

旦那さんに「頼もしい！」と声をかけられて誇らしい気分になっていたがその後小声で呟かれた「嫌がる子も多いのに」という言葉にみんなやつぱりオトモアイルーとして仕事をしたのかなと思っていたのだ。

それが違うと確信したのはモンニャン隊として働く時だ。旦那さんが自分と同じチームのアイルー達と自分を引き連れ気球に乗り込んだ時に疑問が生じた。最初はこれで竜舎にでも行くのかなと思っていたのだが明らかに高度が高い。

一定の高度に達したら他のアイルー達が準備を始め、完了した者から置物と想っていた大砲に入り込み始めたのだ。え？と疑問に思う間もなく旦那さんが大砲の紐を思いつき引つ張りアイルーを発射した。

ポカンとしている間にもドンドンアイルーは発射されていき残りは自分だけになった。そこで悟ったのだ。前に言っていた頼もしいはこれに対する恐怖心が無いことに対して言っていたのだと。

旦那さんがこちらに向き、「そういえば初めてだからやり方が分からないか……」と言っているがそうじゃない、そうじゃないんだ。

そう言えたら楽だったのだが、既に領いてしまっているので湧き上がる恐怖心を押し殺し、旦那さんの説明通りにパラシュートを身につけて発射された。死ぬかと思った。

少しの空の旅を楽しむ間も無くパラシュートが開き着地する。既に集まっていた他のアイルー達の生暖かい目は未だに忘れられない。

そんな目にあつた経験から戻つて来てからは自分でしっかりと情報を集めることにした。まず、自分が経験したから知っているがこの地方のモンニャン隊は予め集めていた情報から素材が多く獲得できる地にアイルー達を文字通り飛ばすらしい。そこで素材を集めギルドから派遣されている配達員に渡す、それから帰還といった流れだ。ちなみに帰りは徒歩である。初めて聞いた時は思わず聞き返した。

そんなに過酷なのかと戦慄したがそんな事は余程運が無ければの話で大抵は途中で商人の竜車に乗せてもらえるらしい。

その時にオトモアイルーになつた時に貰つた紙が必要らしくそれが無ければ商人によつては乗せてくれないこともあるらしい。

それからはずっとモンニャン隊として働いた。出発、帰還、少しの休息、それからまた出発。何度も繰り返していると慣れてくるもので最初は怖かつた大砲出発も今じゃ

鼻歌混じりに乗れるほどだ。

そんなある時に自分の今の立場を動かす出来事が起きた。いつも通りに素材を集め帰還している最中の森の中、突然森全体に轟く咆哮に驚き、何か異変が起きたのではと様子を見に行つた時だ。

そこにいたのは血塗れのハンター達と全身に電気を纏いそれらを見下ろす竜、ジンオウガがいた。

戦闘してすぐだったからだろうか？ジンオウガは酷く気が立つておりこちらにも襲いかかつて来た。仲間が次々と蹴散らされていきこちらも死にたくない一心で抵抗を続ける。こちらが苦し紛れに投げたブーメランがジンオウガの眼を切り裂いたと同時に木へと叩きつけられ意識を失った。

次に意識を取り戻した時はベツトの上で、訳も分からずぼんやりとしていたら様子を見到来た旦那さんに抱き締められて。それから自分が意識を失った後を教えられた。

自分が意識を失ったと同時に前のハンター達が出していた救援要請を見て駆けつけて来たらしい旦那さんがジンオウガと戦闘を開始、腹に大怪我を負うも討伐出来たらしい。ほらつと自分に大きな爪痕が残った腹を見せて来た。それから他のアイルー達はダメだったらしい。悲しげな旦那さんを見てもいまいち実感が湧かなかつた

身体が良くなり、動けるようになってから自分達のチームがよく集まる所へ向かつた

がそこには誰も居らず、数日間はその何もせずただ座っているだけだった。

その日も何もせず座っているだけだったが自分の前を他のハンターのモンニャン隊だろうアイルー達を通つた時にふと、「ああ、もう戻つてこないんだ」と考えてしまった。そう考えると急に胸がキュツとする感じがして涙が止まらなくなった。そこでやつと自分は実感が湧いたのだろう。それと同時にハンターとそのオトモというものに夢を見過ぎていたのも理解した。

仲間や旦那さんと共にモンスターを狩る。そこに犠牲は無く、ただただ栄光だけを手にして周りに持て囃される。そんな夢だ。

泣くだけ泣いた後、旦那さんの所へ行き、自分の覚悟を告げた。それを聞いた旦那さんは嬉しそうな顔をしてBOXから何かを取り出し自分へと渡してきた。それはジンオウガのオトモ装備だった。

話を聞くとそれはあの時のジンオウガから作った装備だという。最初は仲間の仇で作つた装備なんて嫌だろうかと思つたが自分の覚悟を聞いて大丈夫だと判断したらいい。

装備を受け取り、旦那さんから自分の今後の方針を聞く。自分が立ち直つたのでまたアイルーを雇い、モンニャン隊を再開させるようだ。

そこで自分に隊長をして欲しいらしい。仲間を失つた自分にだから頼みたいとも。

それを聞いてすぐに承諾した。

新たに加入するアイルー達にこの辛さは味わって欲しくないな。自然とそう思えた。

「ふふっ」

「んにや!?!隊長も笑うかニヤ?!」

「いや、シールのことを笑った訳じゃ無いニヤ、ルクユとアムタもそろそろ笑うのを辞めてあげるニヤ」

「分かったニヤ」「はーいニヤ」

「それにそろそろ着くニヤよ」

既に森の中に入って結構な距離を歩いている。自分の記憶が正しければこの茂みを抜ければ村への入り口が見えてくるはずだ。

茂みを抜け、視界が開けるがそこには崩れた入り口があるだけだった。

「ニヤ? 岩で塞がってるニヤ、どういふことかニヤ?」

「数年も経ったから崩れたのかも知れないニヤ、他の入り口も見てみるニヤ」

シールの疑問に答えつつ、自分の内心でそれは違うと言う。入り口はどれも頑丈に補強しており崩れるなんて有り得ないし仮に崩れても村のみんなが撤去作業をしている

筈だ。

嫌な予感がしてくるがそれはまだ早計だと振り払い早足で次の入り口へと向かう。

「ここも崩れてるニヤ……つて隊長!？」

二つ目の入り口が崩れてるのを見てすぐに村のある所を目指して駆け出す。明らかに異常だ。こんなことあり得ない、みんなは無事なのか？

茂みを抜けて村のある所に飛び出る。そこには大きく陥没した穴がありその下には自分の村があつた筈だ。

思わず膝から崩れ落ちる。何があつた？ どうしてこうなっている？

「やっと追いついたニヤ！ 隊長いきなり走り出すなんてどうした……ん……ニヤ？」

後ろから追いついてきたシール達が声をかけてくるが途中でこの陥没を目にしたのか途切れ途切れになる。

「追いかけてさせて悪いけどニヤ、周りの搜索をお願いしてもいいかニヤ？ 何かあれば大声で知らせること。分かつたかニヤ？」

「それは分かつたニヤ、隊長はどうするニヤ？」

「ボクも探すニヤ、きつとみんな何処かに隠れてるはずニヤ」

自分の発言からこの場所に何があつたのか理解したのだろう。顔を引き締めて自分の指示を受諾し行動を開始する。

それを見送つてから自分も何とか立ち上がり動き出す。村の周りには何かあった時に隠れられる場所が数個ある。きつとみんなはそこに逃げているだろう。

順に隠れ場所を確認していくが誰もいない、そのうちの一つは破壊されている跡があり嫌な予感が止まらない。

「みんな何処に行ったニヤ？頼むから出てきて欲しいニヤ……ん？これは？」

ドンドン膨れ上がってくる嫌な予感を振り払いながら搜索を進めているとあるものが目に入る。それに走り寄り確認するが間違いない。

「やっぱり、これはミシヤさんの武器ニヤ！」

持ち手が粉々になっており、武器も赤黒くなっているがこれは間違いなくミシヤさんが愛用していた武器だ。他にも痕跡がないか探してみると少し開けた広場に大きな引つ掻き後が目についた。

それに近づき確認してみると何か書いてある。

「これは……村長の字!?ニヤんで……やっぱり村で何かあったニヤ……」

必死に何かを残そうとしたのだろう。分かりにくいのが所々で赤黒くなっている場所があり、土に欠けた爪が落ちていいるのも確認した。

「村……壊滅……モンスター……情報……」

残された文字を必死に読み込む、文字は途中で途切れているものや何かの足跡で先が

読めないのもあり上手く読めない。

「新種……身体が……くっ、読めないニヤ。こっちの文字も口から先が読めないニヤ……」

分かったのは村を襲ったのは村長が見たことがないモンスターで身体と口に何かがあることしか分からない。

「隊長……つちにきて欲しいニヤ!!」

これだけしか読み取れない自分に無力感を感じているのをアムタの声が遮る。何かを見つけたのだと急いでそこに向かい、アムタと合流する。そこにいたのは何かに怯えている痩せこけた子供のアイルーだった。

「この子は何処で？」

「この木の穴に隠れてたニヤ、けど何かに怯えていて話しかけても反応しないニヤ」

視線を子供のアイルーに向ける、地面に座り込みこちらには視線を向けずにつとキョロキョロと辺りに視線を向けている。

自分が見たことがない子なので恐らく自分が村を出てから生まれた子だろう。何とか話をしたいと考えていると子供の首から何かがぶら下がっているのに気付き、そういえばと自分も持っているそれを取り出す。

「隊長、それは何ニヤ？」

「ボクの村にある一族の証明みたいなもんニヤ、他の村だと見たことがないからボクの村だけかも知れないニヤね。」

戦闘の邪魔になるからとポーチに仕舞っていたそれを取り出し子供アイルーの前に出す。この間にもずつと辺りをキョロキョロしていた子供アイルーの視線が初めて固定される。

「安心するニヤ、ボクも君の村の一員ニヤ！村に何があつたか教えてつてうお！」

「……………!!」

視線がこちらに向いたので村で起きた出来事を聞こうとするがいきなり抱きつかれた。子供にしてはかなり強い力で抱きつかれ少し戸惑うが子供アイルーの背中に手を回す。すると声を殺しながらも泣き始めた。

「落ち着いたかニヤ？」

「……………うん。」

「無理しなくていいからニヤ、村で何があつたか教えて欲しいニヤ」

子供アイルーが泣き止んでから暫く、落ち着いたと判断し、再び村のことを聞こうとすると子供アイルーの身体が震え始めた。

やつぱり聞くのが早かったか？それとも一族の証を見せてもこちらは知らないアイ

ルー、落ち着いたからそのことに気づいて怯えているのか？自分の失敗だと思ひ子供アイルーを下ろそうとしたら強く抱きつかれる。それから少しずつ話し始めた。

家で寝ていると段々と騒がしくなってきたて見たことのない顔をした母が入ってきて急に抱えられたこと。村から出る途中に急に地面が揺れたこと。隠れんぼの場所に入られて絶対にここから出てはいけなと言われたこと。何かを見に行つた母が帰つて来なくなつたこと。急に大きな何かが隠れんぼの場所を壊して来たこと。母の友達に手を引かれこの木の穴に押し込まれたこと。その間に友達が母親と一緒に大きな何かに潰されたこと。それから時々何かの足音が聞こえてきて怖くてずっとここにいたこと。

それを聞いて村は壊滅したんだと確信してしまった。この子供アイルーが言つていた大きな何かというのが村を壊滅させたモンスターだろう。

今すぐにでも仇をとりたいがぐつと堪える。まずはこの子を安全な場所に送らなければ……それからそのモンスターの情報を集めて討伐はそこからだ。

今後の行動をまとめ立ち上がる。まずはみんなを集めないで。

「撤退するニャ、みんなを集めるニャ。」

「了解ニャ」

短く指示を出し、ポーチから笛を出す。つとその前に

「そういえばお名前を聞いてなかったニヤ！なんていうお名前ニヤ？」

「……ルウ。」

「いい名前ニヤ！これからこの笛を吹くからちよつと大きい音が出るニヤ、だから少し降りて耳を塞いで欲しいニヤ。」

「や!!」

「……仕方ないニヤ、悪いけどアムタが吹いて欲しいニヤ」

「これボクが吹くと変な音が鳴るから嫌なんだけど、今回は仕方ないニヤね。」

降りるといふ言葉に強い抵抗を見せるルウを見て諦めたようにアムタが笛を受け取る。息を吸い込み、思いっきり笛を吹く。

ピユイ〜〜ピヨロロ〜パイー!!

辺り一帯を力が抜けるような音が駆け抜ける。間抜けな音のお陰かルウが目目をパチクリとして力が弱まったのである程度リラックス出来たようだ。良くやったとアムタの方を見ると俯きながら小声で「だから嫌なんだニヤ」と言っていたので聞こえないふりをした。

「何ニヤ何ニヤ〜、この間抜けな招集音はニヤ〜！何処の誰が吹いたかニヤ〜？」

暫くするとニヤニヤ顔をしながらシールが姿を現した。アムタが笛を吹く時は大した事が無い場合が多いので大抵こういう風におちよくりながら出て来るが今回は叱るべきか？

そう考えているとこちらの姿を見ていつもとは違うと気づいたのだろう顔を引き締めすぐに指示を聞いてくる。

「今回は違みたいニヤね、指示は？」

「ルクユが合流次第撤退するニヤ、それまで警戒」

「了解ニヤ」

それから更に時間が経つがルクユが来ない、流石にすぐに動けないと困るのでルウには背中に移ってもらった。いっそのこと二匹に残って貰って自分だけルウを連れて森の外に出た方がいいのでは無いか？そんなことを考えているとパキッと音がした。

大きくジャンプし音から距離を取る。周りを見るとシールとアムタも距離を取ったようだ。

ルウに捕まっているように声をかけ腰の剣を抜く、警戒は最大に、何がきても対処が出来る様に、茂みが揺れる。そこから音の主が姿を現す。

「遅れてしまつてごめんニヤ〜！ちよつと遠くまで行つて…危な〜！」

姿を現したルクユに反射的にシールがブーメランを投げる。直前でルクユがしゃが

んだので回避出来たようだ。

「何するニヤ! シール!! 当たってたら大怪我ニヤよ!」

「牽制用ニヤ、打撲で済むから回復薬で治せるニヤ」

ニヤーニヤーと二匹が喧嘩をし出す、そんな二匹に呆れながらもルクユが無事だったことに安堵して指示を出す。

「揉めてる場合じゃ無いニヤ、揃ったならすぐに撤退ニヤ! ルウももう少し捕まる力を強くしても……ルウ?」

二匹に軽く叱りつけ、ルウに声をかけるが何やら様子がおかしい。最初に出会った時のように辺りをキョロキョロし出した。そんなルウの様子に喧嘩をしていた二匹もこちらを見る。

「ニヤ……来るにや……、嫌ニヤ……死にたくない……死にたくないニヤ!!」

「あー! ルウ! 待つニヤ!」

背中から飛び降り木の穴に戻ろうとするが直線上にアムタがいたせいか反転しそのまま森の中に入っていく。何で急に錯乱した!?

「急いで追いかけるニヤ!」

「何で急に様子がおかしくなったニヤ!」

「知らないニヤ! 何かトラウマを刺激する事があつたかも知れないニヤ!」

「あつ！隊長！待つて欲しいニヤ！伝えないといけない事があるニヤ〜！」  
後ろからルクユが何かを叫んでいるがそんな事より先にルウだ、彼女を落ち着かせてから聞けばいい。

森を出て湖の方にルウが走っていく。その走りは今の状態だとあり得ないほど速く、なかなか追いつけない。湖の方に走っていたルウだが突然方向を変えた。その先には大きな岩があり、そこに空いている穴に飛び込んだ。

岩の前まで走り寄り、息を整える。そうしているうちにシール達も追いついたようだ。

「何かあつたんニヤね？」

「分からないニヤ、取り敢えず落ち着かせるから周りの警戒をお願いするニヤ」

シール達に指示を出す、ルクユが何かを言いたげにこちらを見ていたが後で聞くからといい、穴を覗き込む。

穴の入り口は棘がビツシリと生えていて飛び込まないと怪我をしそうだ。ランタンを取り出し奥を見ると奥の方にルウが頭を抱えながらうづくまっていた。

これは近づいて落ち着かせるしかないな。そう判断し、穴に飛び込もうとするが突然の咆哮に動きを止める。

「ギイギヤアアアアアアアアアア!!」



相手は激怒しているため中々退いたりしてくれないだろう。

長期戦になりそうだと冷や汗が垂れ、それを拭おうとするがリオレイアが撃ち出した火球に回避を余儀なくされる。

「!!岩から離れるニヤ、中にはルウがいるニヤよ!」

「そうは言っても離れるに離れられないニヤ!」

リオレイアはこちらを焼き殺す気らしくこちらの逃げ場を潰すように火球を撃ち出してくる。何とか躲すが躲した火球が岩に直撃していく。

岩が壊れると中にいるルウも岩に押し潰されるため何とか射線を逸らしたい。しかし逃げ場を潰されているためそれも出来ない。

こうなればあまりやりたくないがシル達に囀を頼み、自分がその間に岩の中のルウを抱えてここから逃げるしか……

そこまで考えたところでアムタからの声にハツとする。

「隊長!デカいのが来るニヤ!気を付けてニヤ!」

慌ててリオレイアに意識を戻すと炎を溜めるような仕草をした後、さつきよりも大きな火球を撃ち出す。

なりふり構わず地面に飛び込むようにジャンプし、その攻撃を躲す。火球は岩に直撃し、爆音と爆炎を辺りに散らす。

「ルウ！ルウは無事かニヤ!!」

「隊長！落ち着くニヤ！岩は壊れてないからルウも無事……」

途中で途切れたシールの言葉を疑問に思いシールの方を向くが彼の目線は自分の後ろの岩に向いている。リオレイアも火球攻撃をやめて岩の方を警戒しているようだ。

疑問を解消するべく岩の方を見ると岩が徐々に大きく……いや、立ち上がるようにしている。

辺りからパキパキと音が鳴り岩が剥がれていく。そしてどんどん岩が竜の形へと変化していく。

更に今度は竜の一部が刺々しく変化していくがそれよりもポツカリと空いた竜の胸にあたる部分に視線が向く。

「いけない！ルウ!!急いで出てくるニヤ！早く!!」

急に穴が動き出したことと自分の大声に流石のルウも出て来ようとするが入り口近くにある棘……牙によってこちらに出てくる事が出来ないようだ。そうこうしている間に竜が徐々に立ち上がり地上が遠くなる。

「牙を飛び越えて飛び降りるニヤ！大丈夫!!必ず受け止めるニヤ!!」

必死にルウへと声をかける。そんな思いが届いたのかルウが頷き顔を引っ込める。その間にこちらも受け止める体制になる。

ルウが目を瞑りながら思いっきり飛び出し、上半身が竜から飛び出した時、入り口が……閉じた。

## 15話

「ルウ!!」

血飛沫と共にルウの身体が地面に落ちるが、それを何とか抱える。下半身を噛みちぎられ、軽くなった体重がルウの現状を伝えてくる。

「ルウー!ルウー!しつかりするニヤ!」

「ニ……ニヤ……」

必死に声をかけるが返ってくる声は弱々しく、今にも消えそうだ。何とかルウを助ける方法は無いのかと頭を回転させる。

「隊長!危ないニヤ!!」

「……!?!」

そんな時にシールの声が届き、ハツとする。自分とルウの周りを影が覆っており、上を向くと竜が脚を振り下ろそうとしていた。

反射的にルウに覆い被さるように地面に伏せる。こんな事をしても意味は無いのだがこれしか思いつかなかった。

しかし攻撃が来ることはなかった。竜が攻撃する直前にその顔が爆炎で覆われたか

らだ。リオレイアが自らの目的を果たすためには目の前にいる竜は邪魔だと判断し、排除しようとしているようだ。

火球攻撃をもらい先程までの事を思い出したのだろう。竜の顔がリオレイアの方へ向き、こちらの上を通り過ぎリオレイアに飛び掛かる。

大型同士の戦いがすぐ近くで始まったがそんなことより先ずはルウだ。血が絶えず流れ出ている、その命は長くない。しかし助けられるアイテムを自分は持っている。

「ルウ、聞こえてるかニヤ？これを食べるニヤ、それで助かるはずニヤ」

ポーチから取り出したのは大きなドングリだ。モウイチドングリと呼ばれるこれはハンター達が使う秘薬などのアイテムを参考にして作られたがこちらの方が遥かに効果が高い。例え腕を食い千切られようが脚が潰されようが動けないほどの重症を負ったとしてもこれを食べれば直ぐに回復するのだ。

しかしその回復力の代わりに身体にかかる負担は大きく、一気に使用できるのは二つまで、三つ目はしっかりと休息をとってからだ。

これがあればルウが助かる。そんな思いで差し出そうとするがその腕を誰かに掴まれる。

「何するニヤ、アムタ？その手を離すニヤ」

「……隊長、それは駄目ニヤ」

「そんな訳ないニヤ、これを食べればルウは助かるニヤ」

「ルウはもう手遅れニヤ。例えモウイチドングリの力でも助かりはしないニヤ」  
アムタの淡々とした返しにこちらも熱くなってしまう。

「何故ニヤ!!そんなもの試してみないと分からないニヤ!!」

「それでルウを苦しめるのかニヤ!!隊長だつて分かっているはずニヤ!!」

分かっている。ルウがモウイチドングリの回復力に耐えられない事は。ただでさえ瘦せかけていたのだ。耐えられる程の体力なんて残っている訳がない。それでも「はい、そうですか」と諦められるはずなんてない。

「でも、でも!!」

「隊長の思いは分かるニヤ、けど無理なものは無理なのニヤ」

モウイチドングリの回復力に耐え切れなかった者の末路は知っている。不完全に腕や脚が生え、血反吐を吐きながら苦しむのだ。数分苦しんだ後、息を引き取る。そんな目にルウを合わせたくはないがもしかしたらと思ってしまうのだ。

何とかアムタの手を振り払おうとするがシル達も加勢し完全に動けなくなる。そんな自分の反対の手を自分達よりも小さな手が掴んだ。

「ルウ……」

「ボク……死ぬ……ニヤ?」

短く問いかけられたその言葉にそんな事は無いと叫びたいがルウの胴体から流れる血がそれを否定する。

死に行くルウを前にしてもうアムタ達を振り払う気は無くなってしまった。そんな事よりも目の前の死に怯えるルウを少しでも安心させたい。

「大丈夫ニヤ、ルウは今夢を見ているだけニヤ」

「ゆ……………め……………?」 「隊長?」

「そうニヤ、長い、長い、長い悪夢ニヤ。最近何か悪い事をしたかニヤ?」

アムタ達の戸惑う声が聞こえてくるが無視する。モウイチドングリを手放すとアムタ達も手を離したのでルウをしつかりと抱き抱える。

「お魚……………つまみ……………食い……………した。」

「きつとそれで今バチが当たつてるニヤ、起きたらいつもの家で布団の中にいるはずだからしつかりとお母さんに謝るニヤよ?」

少しでも死に行く恐怖を和らげられるように赤子をあやすようにリズム良く背中を叩きながらこれは夢なのだどルウに語りかける。

「う……………ん……………マ……………マ……………ごめ……………んな……………さ」

夢だと信じたのか少し安堵の表情を見せながら言葉の途中でだらりと腕が垂れ下がりに、ルウは動かなくなつた。

ルウの亡骸を地面へとそつと置く。何が悪夢だ。もつとマシな事を言えなかったのか。自分の不甲斐無さで手が強く握りしめられているのが分かるが意識してそれを和らげる。

「シール、アムタ、ルクユ。悪いけど覚悟はいいかニヤ？逃げてても文句は言わないニヤ。」

「隊長……、うん、オトモするニヤ」「隣に同じくニヤ」

立ち上がり、後ろへと振り返る。そこには決着がついたのだろう、森へと飛んでいくリオレイアとそれを見送る竜がいた。

きつとこれは無謀だと誰もが言うだろう。けど目の前で仲間を殺されて黙って逃げる程、自分は強くない。

（最低でも一発はその面に攻撃を入れてやらないと気が済まないニヤ！覚悟するニヤ！！）

ーせつかく二匹同時に仕留められるチャンスだったのにバカスカ火球撃ち込んできやがって、痛くは無いけど熱いんだぞ!?

森へと飛んでいくリオレイアを見つめながら先程までの出来事を思い返す。洞窟の

真似事みたいな感じで胸口を開けて擬態している時に探していた子供アイルーが胸口に飛び込んで来たのだ。ラッキーと思いすぐに噛み殺そうとしたが他のアイルーが四匹も近づいて来たので少し待つことにした。

そうしていると一匹が中に入る素振りを見せたので後三匹をどう始末しようかと考えていた時にリオレイアが飛来した。

リオレイアの攻撃にもかかわらずしたら全匹が逃げる為に胸口に入るのでは無いかと火球を受けながらも待ち続けたのだが、いつまで経っても入ってくる気配はなく、リオレイアの拡散ブレスが直撃した時に流石に我慢の限界が来た。

擬態を辞め、中にいた子供アイルーが飛び出ようとしたので噛み千切り、トドメを刺そうとしたらリオレイアに邪魔をされて、ならお前からじゃあ！とリオレイアに飛び掛かり、そして今に至る。

リオレイアの火球を無視して突撃し、向こうのサマーソルトに合わせる形で尻尾に噛みつき地面へと叩きつける。これが決め手となったのかりオレイアは飛び去って行ったが、何か目的があるのだろうか。途中で止まり森の中に降下していった。

ー邪魔者は居なくなつたし、これで集中出来るな。

視線をアイルー達の方へと向けるとアイルー達もこちらを見ていてそれぞれの武器を構えている。

——ジャギイ装備とバギイ装備とクルペッコ装備。んで最後がジンオウガ装備か。そういうえば自分に睡眠は効くのか？

バギイ装備のアイルーを見つめながら状態異常の事を考える。恐らく鎧がある限り効くことは無いと思うが生身なら効く可能性が高い。

——ハンターやアイルーの武器なら大丈夫だと思っただけ他の大型モンスターの時は気を付けた方がいいかもしれないな。お、来るか

こちらが状態異常の事を考えている間に向こうも準備が出来たようだ。ジャギイ装備とバギイ装備のアイルーがブーメランを投げ、その間に残った二匹がこちらに走ってくる。

片方のブーメランはこちらの鎧に弾かれる事なく突き刺さるが身体にまで届くことは無いので無視して走り寄ってくる二匹に向けて飛び掛かる。しかし距離があったからなのか余裕をもって回避された。その隙にジンオウガ装備のアイルーがこちらに取り付くが無視してクルペッコ装備のアイルーを潰そうとするがクルペッコ装備のアイルーは回避に専念しておりなかなかこちらの攻撃が当たらない。

——すばしっこいなあ！あのアイルー達みたい簡単に潰れて欲しいんだけどなあ。あとなんか肩あたりがチクチクする。

一撃さえ当たれば向こうが死ぬのは分かっているため集中して潰そうとするがさっ

きからチクチクと身体の一部が痛む。ブーメランかと思ったがずっと飛んできているブーメランは全部弾いているし突き刺さる方はもう無くなったのか飛んで来なくなつたので恐らく別のものだ。視線を痛む場所へと向けるとそこにはジンオウガ装備のアイルーがいた。武器を振る度に電気が走り、そのタイミングで痛みも来る。

——アイルーの武器でこちらにダメージが来るとは思えない。ってことはこの鎧、電氣通すのかよ!?

弱点属性の判明に思わず狼狽える。その間にもジンオウガ装備のアイルーは攻撃を続けており、チクチクと痛みがくる。

——ああ、もう!取り敢えず降りろ!!

地面を転がりアイルーを振り払う。ついでに尻尾を振りジンオウガ装備のアイルーに攻撃したが大変な体勢だからか、あまり力が入らなかつたので他のアイルー達の方へと吹き飛ばすだけになった。

——これ鎧を介して電気が来てるのにそれでも痛いってことはこの肉体も雷属性に弱いのか?せめて鎧と肉体で弱点違つたら良かったのに……

一貫する弱点の判明にゲンナリとする。その間にもアイルー達に攻撃を仕掛けているが全然当たる気配が無い。

——鉱石槍などの遠距離攻撃は確定であたる時に使いたい。けどこのまま攻撃して

いても向こうが疲れてくるまで当たらないだろうなあ。

自分から見ると一番前にいるアイルーを優先的に狙っているのだが全て回避される。ならばと後ろのアイルーを気にしていないふりをしながら狙ってみるが普通に回避される。

ーうーん、当たらん！一匹ずつ狙うから駄目なのか？ならいつそのことシンプルに  
いこう。

ゲームでも数多のモンスターが使ってくる攻撃……突進。それだけの数が使うってことはそれだけ有効打になりやすいということだ。

頭を下げて地面につける。本来の視線は地面に向くが頭頂部の眼はアイルー達を捉えている。ついでに前脚と胴体の鎧を大きくして自分の下を潜り抜けられないようにする。

ー自分の巨体はアイルー達からしたら数十歩ぐらい走らないと逃げれないからこれは回避し辛いでしょ。では、突撃!!

脚に力を込めて突進する。地面を削りながら突撃する自分にアイルー達は各々に回避行動をとるがかなりギリギリみたいだ。

アイルー達を通り過ぎて暫く進んだところで片脚を地面に突っ込んで固定する。そしてその脚を軸にして反転、再び突進する。片脚に自分の運動エネルギーなどが一気に

かかり骨が折れる可能性があるが自分の頑強な肉体と鎧がその問題を解決する。

二回目の突進はさつきよりかは危なげなく躲される。そのまま三回目と行きたいが回避されるのは明白なので違う手段で攻撃する。

ある程度突進するがアイルー達が回避行動に入る前に停止する。それと同時に前脚を地面に叩きつけてアイルー達に土と礫を飛ばし、更に顔口から自壊能力をつけた鉤石槍を飛ばす。

急な遠距離攻撃にジンオウガ装備とクルペッコ装備のアイルーは反応し回避をしたがジャギイ装備とバギイ装備のアイルーは反応は出来たが回避は間に合わなかったようだ。

土煙が晴れるとアイルー達の様子が見える。そこには二匹のアイルーが防具を貫かれて鉤石槍の破片が突き刺さっているのが見える。

ー頭と胸はなんとか庇ったって感じかな？他の部位は破片が身体を突き破って刺さってるし明らかに重傷だな。ほつといても死ぬだろ。

そう考えて残った二匹のアイルーに視線を向けるが二匹のアイルーは貫かれた仲間を一目見ただけですぐに視線をこちらに戻す。

その姿に疑問を覚えて視線を貫かれたアイルー達に戻す。そこには震える手でドングリのような物を取り出し食べているアイルーがいた。

ドングリを食い終わるとアイルーの身体から破片が抜ける。中の肉が再生して破片を押し出したようだ。

ーええ……、お前らもそんなアイテム持つてるの？これまた即死を狙わないといけないやつじゃん。

ただでさえ攻撃が当たりづらいのに一撃で仕留めないと意味がないとかとても面倒くさいがやるしか無いので再び突進を開始する。

アイルー達は再び回避行動に入るが今度はすぐに回避行動に入る。

ー前脚の鎧を大きくしたのは間違いだっただけかな？無理矢理反転しないと方向転換出来ない。

回避するアイルー達を追尾したくても潜り抜け対策で大きくした鎧に脚がぶつかって上手くいかない。一度作り直そうかと考えたが一つ妙案が浮かんだのでそれが失敗してからでもいいだろう。

アイルー達に突進して通り過ぎたら反転してまた突進。これを数回繰り返す。何回も同じ動きをしているとアイルー達も慣れてきたのか時々反撃を入れてくるようになったのでこちらも行動する。

反転して突進、ここまでは同じだが途中で加速する。慣れていた速度とは違う速度で突っ込んできた自分にジンオウガ装備のアイルー以外は反応が少し遅れて回避が間に

合っていない。

纏めて轢き潰せると思ったがジャギイ装備のアイルーが残りの二匹を突き飛ばす事で安全圏へ移動させた。

ーならまず一匹、轢き潰す！

今の自分に巻き込まれたらミンチは確定するだろうからそのまま突っ込む。しかしジャギイ装備のアイルーは轢き潰される直前でジャンプしてこちらの頭部に張りつこうとする。

ーむ、張り付いて轢き潰されるのを回避するか、なら吹っ飛ばす！

張りつかれる直前で頭部を振り上げてジャギイ装備のアイルーを森の方へと吹き飛ばす。そのまま追撃する為に再び突進する。

ーせつかく潰せるチャンスなんだ、これを逃す気は……って、およ？

突進の向きを決めるべくジャギイ装備のアイルーに目を向けるが、その奥の森の木が揺れている。ジャギイ装備のアイルーはこちらの突進に備えている為、気付いていないようだ。

「ギイギヤアアアアアアアア!!」

「ニヤ!?!ニヤアアアアアアア!!」

「ルクユ!!?」

森から姿を現したりオレイアが強襲しジャギイ装備のアイルーを掴んで空へと飛翔する。流石にこれは想定外だったからか後ろのアイルー達も驚愕の声を漏らしている。

「ーリオレイアが狙ってたのってあのアイルーだったのかな？なら任せてもいいや、こつちの時間が減るし。けど逃がさないかは監視しとかないとね。てかこれ攻撃チャンスじゃない？」

後頭部の眼で残ったアイルー達を見ると全匹が空へと顔を向けているのでチャンスと思ひ攻撃の準備をする。尻尾に鉋石を纏わせて剣にすると同時に後ろへとバックステップ。攻撃範囲内にアイルー達を入れて尻尾を横に振り払う。

「みんな危ない！ギイ！」

「隊長！」

この奇襲もジンオウガ装備のアイルーが気付いて他のアイルーを伏せさせるが自分には間に合わなかったようだ。腰から下を両断出来た。

バギイ装備のアイルーがジンオウガ装備を担ぎ距離を取ろうとするが逃がす気は無い。再び近づき伏せても跳んでも回避出来ない高さで尻尾を振り払う。回避は無理だと思つたのかバギイ装備のアイルーがジンオウガ装備のアイルーを投げる。いつの間にか距離をとっていたクルペッコ装備のアイルーがそれを受け取りそのまま逃げる。

「ー纏めては無理かあ、けどこれで一匹！」

バギイ装備のアイルーは剣でこちらの攻撃を防ごうとしていたがそのまま両断する。地面に倒れたバギイ装備のアイルーを更に縦に斬り裂いて完全に絶命させる。

「シール!!? ツ!! お前ええええええ!!」

「待つニャー! アムター!」

絶命した仲間を見て激昂したのかクルペッコ装備のアイルーがこちらへと向かってくる。ドングリを食べたジンオウガ装備のアイルーがそれを止めようとしているが耳に入っていないようだ。

ーこつちに向かってくるならさつきよりかやり易いな。

脚を振り下ろして攻撃する。クルペッコ装備のアイルーは避けながら攻撃してくるが痛くはないし攻撃に意識がいつてるのかさつきまでの余裕を持った回避ではなく当たるか当たらないかのギリギリの回避を繰り返している。

なので相手がこちらのタイミングを掴み始めてきたところで更に脚に力を込める。

さつきまでの攻撃とは違う地面を砕く一撃に向こうは体勢を崩したのでそのまま潰そうとするが上手いこと回避されてしまい腕一本しか持っていけなかった。

腕を抑えて地面に倒れたアイルーに追撃をする為に前脚を振り上げようとするがここで邪魔が入る。

スコツという音とともに左目の景色が少し変わり痛みがくる。初めての事態に驚き

後ろに下がり何が起きたか確認する。

恐る恐る前脚で左目に刺さっている何かを引き抜く。ある程度予想出来ていたが刺さっていたのはブーメランだった。この状況で投げられるやつは一匹しかいないのでそちらを睨み付ける。

そこにはブーメランを構えたジンオウガ装備のアイルーがこちらを睨みつけていた。その少し前にはドングリを食べたのかさつきまでの怪我が一つもないクルペッコ装備のアイルーが合流しようとしている。

そつちに顔を向けるとまたブーメランが飛んでくるが敢えて受ける。ブーメランは胸辺りに刺さり放電するがすぐに止まった。

ブーメランの放電はすぐに止まったな、刺さってる限り放電し続けるとかじやなくて良かった。あと左目に刺さったのはただの偶然かな？運良く眼までは届いてなかったから良かった。意識が逸れてなかったから敢えて胴体を狙ったって可能性もあるから注意しとかないと。

次はどう攻めようかと考えていると上から何か落ちてくる。上空での出来事はずっと見ていたので落ちてくる何かに視線を移す。

暫くすると上から落ちてきていた何かが地面にぶつかりバラバラになる。全体的に黒ずんでおり残り火が所々に残っている。

ーうわあ、コゲ肉ならぬ、コゲアイルーってか？このアイルー本当にリオレイアに何をしたんだ？

上空には気が済んだのかりオレイアが今度こそ巢の方へ飛んでいくのが見える。狙いはこのアイルーだけだったらしい。

アイルー達も暫くこの黒い何かを警戒して見ていたが一緒に落ちてきた物や身につけている煤けた防具に見覚えがあつたのだろう。急に騒がしくなった。

それを隙とみて飛び掛かるが流石に二回目はないのかしつかりと回避される。

そのまま脚を振り下ろして攻撃するも余裕を持つて回避される。

ーうーん、また振り出しか……また突進するか？

今までで一番手応えのあつた攻撃をまた行おうと考えたがその前に何かを話していたのかクルペッコ装備のアイルーがこちらへ走り出した。後ろにはポーチにぶら下げている刃を繋ぎ合わせて巨大なブーメランを手にするジンオウガ装備のアイルーがいる。

ー確かに今のところの有効打は貫通ブーメランと電撃だけでもんなあ。両方もつてるジンオウガ装備のアイルーが隙を見て攻撃つて感じか？

クルペッコ装備のアイルーがこちらの攻撃範囲に入ったので脚を振り下ろす。さっきのような回避ではなく一定の範囲内で回避を行なっているようだ。ならばと先程と

同じように力を込めて脚を振り下ろす。地面を砕いて隙を作り出そうとしたがクルペッコ装備のアイルーはこれを待っていたようだ。

「ンニャー！くらうニアアアアアア！！」

地面が碎ける反動を利用して武器を構えこちらに突っ込んでくる。先を辿ると恐らく胸に刺さっているブーメラン。

「ー更に衝撃を与えて奥へと突き刺そうとしているのか？それともまだこのブーメランには何かがあるのか？それは兎も角、お前、忘れてるな？」

このアイルー達には一度見せているので引つかかるとは思ってたが恐らく忘れていたので遠慮なく使わせてもらおう。

ガパアと胸口を全開で開ける。そこでクルペッコ装備のアイルーはこの存在を思い出したのか体勢を崩して回避しようとするが、既にジャンプしてしまっているのでもならないようだ。ジンオウガ装備のアイルーが巨大ブーメランを投げて援護しようとするが焦っていたのか狙いが逸れて拡張していた鎧部分に刺さる。こちらには実害はないので無視する。

そのままアイルーに噛み付く。すぐに噛みちぎってもいいがまだ使い道がある。

ジンオウガ装備のアイルーが焦っているのが見える。それはそうだろう。向こうから見たら仲間が噛みつかれて下半身しか見えていないのだから。

クルペッコ装備のアイルーも必死に脚をバタつかせて脱出しようとしている。胸口の中からも小さな衝撃がある事から武器を出鱈目に振っているようだ。

少しずつ胸口に力を込める。それと比例して脚のバタつきが激しくなる。

「アムタ!!」

ジンオウガ装備のアイルーが焦りながらこちらへ走ってくる。やっと隙を見せたな？

ずっと顔口に入れていた鉈石槍を発射する。少し間を開けて二発目、ほぼ連続発射の為、いつものものに比べると小さいがアイルー相手には大丈夫だろう。

飛んできた鉈石槍をジンオウガ装備のアイルーは身体を捻りギリギリ躲すが二発目が片脚に当たり太ももから先を吹き飛ばす。

更に追撃を、と思ったが素早くドングリを食べて後ろに下がったので諦める。

——これでまた迂闊に近づいてくるってことは無さそうかな？ んじゃ、こいつはもう要らないか。

人質ならぬ猫質はまだ効果はありそうだがさつきより薄そうだし、残り一匹なら自分が行って攻撃した方が早い。

胸口に更に力を込めて未だにバタついているアイルーを噛み千切る。下半身は地面に落ちて上半身はとつとと食べる。ついでに落ちた下半身を踏み潰してポーチに入っ

ているアイテムを使えないようにしておく。

ー落ちてたアイテムで逆転とか結構ありそうな展開だからな、念の為潰しておこう。

あ、それなら両断したアイルーの方も潰しておいた方が良かったかも。

まあいいか、有効打のあるアイテムがあるならもう使ってるだろ。

そんな思考をしつつゾンオウガ装備のアイルーに視線を向ける、相手はぶつぶつと何かを呟いており少し不気味だ。

ー仲間が全滅しているのに怒ったりしないのかな？さっきのアイルーは動きが単調になったりしてくれたからやり易かったんだけどなあ。

「口が二つ？部位が大きくなったから身体の大きさを変えられる？……ってことはこいつが村を？それにアムタやシールも？」

……お前!!お前えええええええ!!」

ーうわ、急にキレた。このアイルーさっきからぶつぶつ呟いてると思ったら急にキレるし情緒不安定か？

虚無顔でぶつぶつ呟いてると思ったら何かに気付いてしまったみたいな顔をして最後に凄顔で叫び出した。表情は明らかに怒っておりさっきより明らかに感じる気迫が違う。

ーまあ複数でチヨロチヨロされるのが鬱陶しいのであつて一匹だと全然楽なんだけどね。

力が怒りによつて上がつてもこの鎧を砕くには至らない、武器の電撃も確かに痛いが感覚的には少し強めのデコピンをされてる程度であり何度繰り返されようが致命傷になることは無い。不安要素は胸に刺さつているブーメランだが近づいて来れば胸口で噛み千切ればいい。

こちらに走つてくるアイルーをそんな思考で迎え撃つ、前脚を振り下ろし踏み潰そうとするのに対してアイルーはそれを躲してその前脚に飛びつく。そのまま出鱈目に武器を叩きつけてすぐさま距離をとる。

本来の姿より鎧を大きくしているため肩を攻撃された時よりかは痛みは軽いがそれでも鬱陶しいことに変わりはない。とつとと仕留めたいが指示を出す必要が無くなつたからか先程よりかすばしっこくなつてゐる。

ーさつきより面倒になつてんじゃん！大咆哮で吹き飛ばすか？けど今日はガノトスが湖にいたはずだしリオレイアが来てからちよつと水面が騒がしいから下手に刺激を与えたくないな。

きつと大咆哮を行えばこの状況はすぐに打開出来るだろうが下手を打てば次はそのままガノトトス戦が始まる。今それは流石に勘弁して欲しい。

いっそのこと尻尾の剣を巨大化させて強引にいくか?と考えるとところで今回二回目のひらめきが浮かんだ。これならいけるかもしれない。

アイルーの相手をしながら尻尾の剣をそのままに更に鉱石を生成、横に広がる様子里出し、扇のような形にする。勿論、端の部分は鋭利にしており、こちらの目論見が外れてアイルーに直撃しても両断出来る様になっている。

準備が出来たので足元にいるアイルーを無視してバックステップ、着地と同時に足を踏み込み反転、アイルーの脚を斬り飛ばすように尻尾を振る。

アイルーはジャンプして回避するがこちらもアイルーの真下あたりで尻尾を止めるとアイルーは扇状になった尻尾の上に着地する。

次にアイルーが乗った状態の尻尾の上に振り上げ、アイルーを空へと飛ばす。

――流石に空中にいたら身動きは取れないよね。

アイルーが飛んだのを確認したと同時に尻尾の扇を破壊する。そのまま地面へと落ちるアイルーへ尻尾を全力で振り下ろした。

アイルーはそれを見て回避は出来ないと判断したのか武器を構えて受け身をとる。尻尾が武器に当たる直前に直感が働いたのか腰につけていた魚の形をした剥ぎ取りナイフを取り出し武器に重ねて防御する。

尻尾が武器に当たり武器が放電するがお構いなしに尻尾は進み武器を破壊する。そ

のまま剥ぎ取りナイフに接触するがそこで火花を散らし剥ぎ取りナイフを破壊することは出来なかった。しかし剥ぎ取りナイフの破壊は出来ずとも尻尾の威力はアイルーの力で耐え切れるものではない。剥ぎ取りナイフを破壊出来なかったので少し逸れたがアイルーの右腕を切断することは出来た。

地面に叩きつけられたアイルーに更に尻尾で追撃をしたがこれも剥ぎ取りナイフで防がれ吹っ飛ばすだけとなった。

ーあ、両断したアイルーのところに飛ばしてしまった。道具を補給される前に殺さなきゃ。

この距離なら鉋石槍とかより飛びかかった方が速いのでそのまま飛び掛かる。アイルーは少し躊躇う動きをしたが亡骸のポーチを漁りドングリを口にしてこちらの飛びかかりを躲す。

視線をアイルーに向けると先程までの傷は無くなっており五体満足に戻っていた。

ーええ、また最初からかよ、流星にさっきの打ち上げももうくらわないだろうし次はどうしようか？

ドングリの万能性とアイルーの不死身さにゲンナリしながらアイルーを見つめる。当アイルーは自身の手を見つめながら何か喜んでた。

「やったニャー！耐えれたニャー!!これでまだお前と戦えゴポオー！」

アイルーが口から血の塊を吐き出す、更に鼻と目からも血が流れそのまま地面に倒れる。倒れるまでの表情は笑顔のままだった。

「ええ……、笑顔で血を吐くって、なんかこのアイルー怖いんだけど……血塗れになつてるし。」

少し距離をとってアイルーを見つめる。笑顔のまま倒れたアイルーは今度は訳が分からない様な顔になり次に怒りの表情に戻った。

更に様子を見ると血塗れになつてもお構いなしに暴れ始め、ひたすらニャーニャーと喚きまくる。そこまでしていても立つことは出来ない様だ。

「もう何もないかな？ならとつととドドメを刺してしまおう。」

アイルーに向かって歩き出す。向こうもこちらに目を向けてひたすらに何かを叫んでいる。

「毒物でも入れられたのかな？それで渡してきた奴に暴言を吐いてるとか？まあ長く苦しむよりか早く殺してあげた方がいいでしょ。」

ドドメを刺すべく、アイルーの近くに寄り

「お前さえ！お前さえ居なければ！！村のみんなも！シール達も！ルウも！！みんな死ぬことなく生きていたはずニャー！！」

前脚を

「許さない！絶対に許さないニヤ！お前を必ず殺してやるニヤ！！絶対ニヤ！！」  
振り下ろした。

## 16話

振り下ろした脚を上げて踏み潰したアイルーの様子を見る。そこには予想通りに潰れているアイルーがいる筈だが、防具のお陰なのかギリギリペチャンコにはならなかったようだ。

その防具も全体的にヒビが入っており、もう役割を果たせるとは思えないほどに破損して、今にも壊れそうだ。

「ー完全に死んでると思っただけど、こいつら息さえしてたら生き返る可能性があるからなあ……」

念入りにもう一度潰すか。

上げていた脚をもう一度アイルー目掛け振り下ろす。辺りに振動がはしり、脚と地面の間から血が出てくる。再度脚を上げて確認すると今度は防具ごと潰れたアイルーがいた。

「ーこれでよし、と。後は全部食べて証拠隠滅だな。」

潰れたアイルーを血がついた地面ごと胸口で掬い上げる様に食べる。その後には食べたお陰で抉れた地面を埋めておく。食べてしまったため完全に埋めることは出来ない

が戦闘があつた様には見えないぐらいにはしたので良いだろう。ヨシ！

次に他のアイルーの処分を開始する。食い殺したアイルーの残りどと斬り殺したアイルーは先程と同じように処分する。

ー問題はいいつか、流石にこれは食べたくないなあ。

下にある身体の大半分が燃やされて真つ黒になつてゐるアイルーを見下ろしながら処分法を考えるが、良いのが出てこない。食べた物を全て鉋石に変換する性質上、食べても問題は無いと思うが心象的に食べたくない。コゲは体に悪いのだ。知らんけど。

なら埋めてはどうか、と考えたが大体そういう処分の仕方は何やかんやあつてこの死体が地表に出てきてタイミング良くハンター側に見つかるのだ。よつてボツ。

ーやつぱり食べるしかないのかな？あ、そうだ。別に自分が食わなくてもいいや。諦めて食べる方向に考えが向いていたのだがここでふと思いついたことを実行する。コゲアイルーの防具を中身ごと啜えて湖の方へと投げる。防具は放物線を描きながら綺麗に湖の方に落ちた。

ーうん、多分湖の生物が食つてくれるだろう、多分。

そのまま落ちた衝撃でバラバラになつてゐる他の部位も啜えて次々と湖に投げる。

ーほら、魚達、餌だぞ、中に火が通り過ぎてゐるから苦いと思うけどな。

投げ終わった後で気づいたが別にあのアイルーに限つては処分しなくてもよかつた

のでは無いか？殺したのは自分じゃなくてリオレイアだし、もしかしたらアイルールの雇い主があいつらを探しに来た時にあのコゲアイルーを見れば他の消えたアイルー達はリオレイアに食われたと勘違いするかもしれない。

そう考えたが死体は全部湖に投げてしまっているためどうしようもない。なので諦めて次に行こう。

大きくしていた鎧の部分を砕いて元の姿に戻り、その後ブーメランが刺さっている部分を身体側から鉋石を生成していくことで押し出して抜く。

全てのブーメランを抜き終えたので処分するために食い砕いていくがジンオウガ素材で出来たブーメランで手が止まる。

ーこれ大丈夫だよな？電気出たりしないよな？

恐る恐るブーメランを触るが電気が出ることはなかった。何回か触っても出てこないため意を決して掴む。それでも電気が出ないので安心して顔口に放り込み噛んだ。電気が出た。

ー痛つてえ！出るじゃん電気!!何で!?触った時は何も無かったのに。

思わず口からブーメランの残骸を吐き出す。血は出なかったが少し弱い部分なのか他の部位よりか少し痛む。

顔口がヒリヒリするのを感じながら砕けたブーメランをまた触るが何とも無い。

——触っても問題ないのに何で噛んだら電気が出たんだ？何か電気が出るには条件があるのか？

ブーメランを見つめながら思考する。触った時と噛んだ時の違い……衝撃か？

確かめるべくブーメランを前脚で叩き潰すと一瞬だけ電気を撒き散らして沈黙した。

——うん、一定以上の衝撃が来ると武器の電気ついていうか属性が出るって仕組みかな、それとある程度潰れるとその機能も失うと。

潰れたブーメランをもう一回叩いてみるが電気が出る気配はない。恐る恐る顔口に入れて噛んでみるが電気が出ることは無かったのでそのまま食べる。

先程の経験を活かして他のブーメランも潰していく。潰すたびにチクツと痛むので少し躊躇してしまうが何とか全て処分することができた。

——これで全部の処分は完了だな。次は反省会。取り敢えずこれからはハンターとアイルーは出来る限り即死の攻撃を狙うべきだな。部位欠損を狙う攻撃をする場合も基本コンボ的な感じにして最後はトドメを刺すって感じにしないと一度逃すと回復されて帰ってくる可能性の方が高いよなあ。

後は広範囲攻撃も考えないと。今回は逃げなかったけどバラバラに逃げられると追いきれないかも知れないし足止めとかされると確実に逃げられそう。それと突進も見直さないとハンターなら普通に対処しそうだし、モンスターなら逆にカウンターを貰い

そう。

最後はこれからの敵は絶対に絶命するって状態になっても動けなくなったら追撃入られて殺した方がいいのかな？ ブラキディオスみたいな感じで……こう、ズガンと。モンスターはともかくハンターとアイルーはそうした方がいいかも知れないな。死んだと思つて目を離れたら実は生きてて超回復アイテム使った後に逃げましたとかあり得そうだし。ひとまずはこれくらいかな？ ヨシ！

今回の戦闘の反省を纏めてから動き出す。適当に飯を食べたら今日は寢床でゆっくりしよう。

——そういえば何か忘れてるような……？ まあいいか、そのうち思い出すでしょ。

あれから恐らく数週間、特に何か大きな出来事はなく強いて言うならこの世界に来てから数回あった雨の中でも一番の大雨で湖が増水してガノトトスが喜んでいただけだろう。

日差しの良いなか、最早お気に入りといえる場所になりつつある所でいつものように擬態している。

さて、雨が止んでから更に数日で色々と変化したことを纏めようか、といっても二つしか無いのだが。数週間は平和だったのになあ。

まず一つ、リオレイアが狩場を変えた。

これは恐らく自分に負けたからだろう。リオレイアは自分の擬態姿も見ているので前まではこの湖地帯に住んでいるアプトノス達を狩っていたのだが近くに自分がいると気付いてからは近づかなくなった。別に攻撃してこなければこちらから襲うことは無いのだがそんなこと向こうは分からないだろうから仕方ない。問題はリオレイアが狩ってくる新たな獲物だ。

人です。思いつきり人です。なんならアプトノスやガーグアを竜車ごと運んでるところも見ました。近くに街道があることは確定だがリオレイアが狩ってくる人の頻度からよく使用されているのだろう。そのうちハンターが来るのは確定したのが一つ目。

二つ目は一つ目を裏付けるように飛行船がこの辺りに飛来するようになったことだ。下の部分辺りに望遠鏡が付いており、その方角的にリオレイアの様子を見に来ているようだ。時折他の場所も観測しているのでこちらとしては行動制限が課せられていないイラつく。

救いは連日来るような物ではなく、更にリオレイアとガノトトス以外は見どころもないため数時間程度で退散することだろう。一度アオアシラも見えていたようだがすぐに見るのを辞めたためそんなに興味は無かったのかな。

そんな感じで数日に数時間は拘束されることが確定している現在で自分が何をして

いるかといえよ。

——いる？いないよね？多分ヨシ！んじゃあ、お邪魔します。

リオレイアと飛行船がない時を見計らってリオレイアの巢に侵入しています。巢の中には意外と広く、奥の方には孵って数日は経ったであろう雛達が眠っているが自分の目的の物は雛ではないため無視して巢の端の方にあるガラクタに歩み寄る。

——今日はご馳走はあるかなと。……あつた！

リオレイアは恐らく人を雛の餌とし、竜車を牽いているアプトノスなどは自身が食べているのだろう。それ以外の食べれない物はこのように巢の端に捨てていることが多い、自分にとつてそれはご馳走なのだ。

——これはマカライト鉱石かな？最近は味が薄いものしか食べていないから余計に美味しく感じるな。他にも何かあるかな？

商人が乗っていたであろう竜車からマカライト鉱石の積荷を見つけて丸ごと顔口に放り込み味わう。しっかりと味がする鉱石に感動しながら一発目にこれを見つけたことから次の物にも期待が高まる。

——これはハンターのポーチかな？中身は……、しけてんな、鉱石を入れとけよ鉱石を。回復薬とか別に要らない。次はくと、これは骨かな？なんの骨だろこれ？色々と混ぜてて分かんないや。最後は……武器だね、鉱石派生の武器は大歓迎。

適当に漁りながら自分の食べ物を探していく。暫く漁ると見覚えのある物しか出てこなくなつたので今回の分はこれぐらいだろう。

——うん、今回は結構当たりかな。リオレイアが人を狩り始めたのにこんなメリットがあるのは嬉しいな。

見つけた武器を食べながら巢を出る。あまりのんびりしているとリオレイアが帰ってくるし、飛行船も来ると下手に身動きが出来なくなるからだ。

因みにこの巢漁りを行つてから数日はリオレイアが巢の近くから離れなくなる。まあ雛を守るため当たり前なのだが。肝心の雛は最初の頃はこちらの姿を見て母に助けを求める声を出していたのだが五回目あたりからは慣れたのか警戒は続けるものの声を上げることはなくなった。それでも一定の距離まで近づくと声を出すので注意が必要だ。

——好奇心で近づいてみた時は凄かつたなあ。

ギリギリ認識外に逃げたがああ雛の形相と叫び声、その後口から炎を漏らしながら巢へと帰還するリオレイアの姿は迫力があり、子を守る母はやっぱり凄いなと思いつつ巢があつた高台から飛び降りた。

翌日、いつもの時間から数時間経つてもリオレイアが空を飛んで狩りに行っていないことから、やはりというか巢の侵入はバレたようだ。漁った跡を隠そうともしていない

ので当たり前といえれば当たり前なのだが。

いつものように犯人……犯竜は自分だとは気付かれないみたいだが、今頃かなり気が立っているだろう。

ーふう、そろそろ昨日のことより今起こった現象を認識しようか。

飛行船がいることによる行動制限からのストレスでどうやって墜とそうかと真剣に考え始めた時にそれは飛んできた。

自分の真横に落ちてきて勢いそのまま湖に突っ込んでいった者に視線を向ける。ちようどその者も湖から出て来たようだ。

「ハア、ハア、あいつ……帰ったら絶対しばく！」

声からして若い男性、武器は双剣、防具はリオレウス。だけどそれより突っ込みたいたいことがある。

ーハンターって空からも来るんだなあ、しかも無傷。ゲームならまだしも現実でこれはやっぱりこいつらも普通にモンスターだろ。流石に引くわあ……

## 17話

「畜生、落ちた先が湖なんてついてないぞ……、嫌がってるのに無理矢理撃ち出しやがって。」

緊急クエストだからと問答無用で撃ち出した受付嬢に思わず文句が口に出るがそんなことをしても水浸しになったこの状態が改善される訳ではないので思考を切り替えて今回のクエストを受注するまでの経緯を思い返した。

いつものようにクエストの達成報告をギルドに伝えた時にいつも世話になっている受付嬢からの発言が始まりだった。

「あ、ガルドギアルさん。今回のクエストでランクが上がりますね、おめでとうございます。」

そう受付嬢が言うとなりの空気がざわつき始めた。それもそうだろう。何故なら今のランクから上がるとなると俺のランクはG級になるのだから。

「これでガルドギアルさんも人外の仲間入りになるのですね、といってもG級相当のクエストを達成しないと上がらないんですがね。」

周りには当然のことだという顔をしていたが内心は浮ついていた心はその発言で一気に落ちた。それを気配から察したのか受付嬢が説明を始める。

「まあ、一種の試金石ってことですよ、上位のクエストでも難易度はかなり高低がありますからね。低いものだけを数重ねてG級に上がっても、すぐに死ぬ人が一時期増えたことがあります。それから上位からG級に上がる際にはG級相当のクエストを達成して貰うようにしてありますよ。」

その説明にそれもそうかと納得する。ギルドだってハンターを殺したい訳ではないのでその対応は当たり前だろう。

「という訳で、今回はこれでお終いです。G級相当のクエストが来た場合は連絡をさせて頂きますので、準備だけは済ませておいてください。」

「俺はいつでも大丈夫だが……そうだな、そうさせて貰うよ。俺の今の位置付けはどうなるんだ？クエストはいつも通りに受けていいの？」

昇格待機状態なら無闇にクエストに出ない方がいいのだろうか？そんな思いで受付嬢に質問をする。

「大体の人は万全を期すためにクエストには出ないで休息に当てるのですが……。そうですね、クエストは受けて頂いて構いません。その間にG級相当のクエストが来た場合は緊急でない限りこちらで保留しておきますのでご安心ください。」

クエストには大まかに分けて二種類ある。通常と緊急だ。通常クエストは主に危険ではあるけれど人間の生活圏にはあまり出現せず、しかし行商などの道に出てくる可能性があるため安全のために狩ってほしい。というものが多い。たまにどつかの王族がぶつ飛んだ依頼を出してくることもあるがそれもこの管轄だ。

もう一つの緊急は文字通り緊急性が高いクエストだ。人の生活圏に頻繁に出現し、人や村を襲うなどのこのままだと被害が拡大する場合や壊滅の恐れがあり、速やかな討伐を求められるものがここにあたる。

緊急クエストの討伐対象は経験を積んでいる個体も多くかなり手強いのでギルドも人を選んで依頼するらしい。その基準は分からないが多分実力ともう一つ別の基準で判断されていそうだ。

他にも常時討伐対象というのがある。大型モンスターには生息している環境で何らかの役割を持つている場合があるため、発見した際には調査を行い、討伐に問題がないかを確認してから討伐、またはクエストとして貼り出すのだが、この常時討伐対象というのは、狩場に乱入または発見をした場合、ギルドの許可を取らなくても討伐しても良い個体のことを指す。

主な対象はイビルジョーやバゼルギウスなどの周りの生態系を破壊する可能性が高い種族が指定されている。

長々と語ったが要するに今は特に何もすることがないということだな。ならアイテムの整理でもするか。

そう思考してギルドから出ようとするが届いた依頼を読んでいた受付嬢から声をかけられる。

「ガルドギアルさん、確かいつでも大丈夫と言ってましたよね？」

「ああ、言ったな。クエストがあつたのか？」

「はい、たつた今、クエストが発生しました。難易度はG級相当、更に緊急に分類されます。いいですか？」

「分かった受けよう。場所は何処だ？」

ここで場所を聞いておかないと狩猟地が火山や雪山だと流石に準備が必要だからな。

「場所は火の国に近い火山近くの森林地帯です。なのでクーラードリンクなどは必要無いですね。他に何かありますか？」

「いや、特に無いな。ドリンクが必要無いならいつでも行ける。」

「分かりました。G級で更に緊急に分類されているので移動手段はこちらで既に準備しております。クエストの詳細は移動しながら話します。こちらへどうぞ。」

「あ、あの！少しいいですか？」

受付嬢の説明に従い移動をしようとした時に後ろから若いハンターに声をかけられ

た。

「何だ？出来るだけ手短にな。」

受付嬢に視線を向けると待つ体勢を取ったので立ち止まりそのまま要件を聞く。

「ありがとうございます！火山近くの森林にいくと聞いたんですが少しお願いがあります。お礼も払いますので聞いてくれないでしょうか？」

声から必死さが感じられて思わず振り返る。そこで若いハンターの容姿を確認した。

男性、防具はタマミツネ、武器は片手剣を持ったハンターで足元には同じタマミツネ装備のアイルーがいる。恐らくこのハンターのオトモなのだろう。青年の顔を見ると酷いクマが出来ており、かなり疲れてるように見える。

「それで？お願いとは何だ？」

「僕のモンニャン隊が帰還日を過ぎても帰って来ないんです。目的地は故郷と聞いていて他には寄り道もしないって言うていたので心配で……」

「それなら迎えにいつてはどうだ？何か出来ない理由があるのか？」

青年の装備から実力はあるように見えるのでそこらのモンスターに負けることはないだろうから迎えに行くことは可能なはずだ。

「実は……火山近くの森林地帯とは聞いていたんですが正確な場所が分からなくて、何箇所かは既に探したのですがどれも違っていました。なのでお願いです。狩猟つい

「でいいので彼らを探して貰えませんか？」

「そういつて頭を下げる青年ハンター、声からしても心底アイルー達を心配しているのが分かる。狩猟のついででいいのであれば受けてもいいか。」

「分かった、受けよう。しかしあくまでも狩猟のついでだ。見つからなかったとしても文句は言わなくてくれよ?」

「ありがとうございます!文句なんて言う訳ないですよ!ジルク……僕のモンニャン隊の隊長です。その子が言うには故郷の近くには大きな湖があるらしいです。お願いします。」

再び頭を下げた青年ハンターを背にして受付嬢の元に歩く。聞くことは聞いたのでこれ以上、話すことはないだろう。

「向こうもそう思ったのか頭を下げたままこちらを呼び止めようとしな。」

「すまない、待たせたか?」

「いえ、大丈夫です。あのハンターの様子を見る限り、そのアイルー達はもう……いえ、やめておきましょう」

受付嬢が気の毒そうに言葉を発する。あの青年ハンターの目のクマを見るに寝らずに探し回っているのだろう。過ぎた期日は分からないがあそこまで酷いとかかなり過ぎているのだろう。

青年ハンターに迎えにいったらどうだなんて言わなかったほうがよかったかもしれないと少し後悔しながら歩いていると気持ちを切り替えたのだろう受付嬢が話しました。

「それでは今回の詳細を話しますがいいですか？」

「ああ、構わない。頼んだ」

「では、今回のクエストの討伐対象はリオレイアです。街までつなぐ街道で商人やハンターを襲撃しており現時点でかなりの被害が出ています。

また、殺されたハンターのうち数人が上位ハンター、それもかなりの実力者だったことからG級相当の実力があるとギルドは判断しました。

更に獲物を食べずに巢へと持ち帰っていることから雛がいる可能性が高いと思われます。人間を餌と認識しているはずなのでこれも討伐して下さい。質問はありますか？」

「狩猟エリアから逃げた場合の追撃は？」

「許可されています。これ以上実力をつける前に討伐せよとのことです。」

「了解だ。なら乱入の心配は無いんだな？」

「無い……と言いたいところなんですけどガノトトスの目撃情報があります。水辺には近づかないでください。……後はこれもある意味本題ですね」

水辺には近づかないと脳内の注意事項に書き込んでる間に受付嬢がまた話し出した。

「これはあくまでもサブクエストです、聞いていきますか？」

「ああ、頼む。どんなのだ？」

「ガルドギアルさんはここから南東のギルドが管轄する森林地帯の大火災を知っていますか？」

知っている。かなり広大な森林が丸ごと一つ燃え尽きた大火災のことだろう。ギルドも消火に尽力したが力及ばず全て焼失した火災だ。それと数日前にその森林近くのクエストに赴いていたハンター三名が失踪していた筈だ。

「あの大火災の原因を探っていたギルドの調査隊があるものを見つけたんです。その見つけたものが問題でして……」

受付嬢が言い淀むと言うことはかなり問題のものだろうと少し身構える

「一つは変質した鱗、これはリオレウスのもので火災もリオレウスが起こしたものとギルドは判断しています。問題はもう一つの見つかった足跡です。」

「足跡？それがどんな問題になるんだ？」

「どの生物とも一致しません。今ギルドが過去の文献を漁っていますが恐らく新種だと思われませぬ。」

それは……確かに問題だろう。ギルドが把握していない生物が存在しているという

ことになる。それがどんな生態でどんな行動をするかも分からない。もしイビルジョーなどの周囲の生態系を破壊する生物ならかなり不味い状況だろう。

「ギルドはこの生物の追跡を行いましたでしたが痕跡が不自然なほど少なく、更に数週間前の雨で痕跡が完全に消えてしまい追跡を断念しました。しかしこの追跡中に分かったことと問題が見つかっています。

一つはその生物の移動ルートから恐らく森林地帯を好んで生息地に行っていること。これは調査が進んだといつてもいいです。問題は追跡中に判明した……というかまだ不確定な情報ですがこちらが確定してしまった方が大問題です。」

受付嬢が困ったような声と表情をする。まるで当たってほしく無いというような雰囲気だ。

「ここ数ヶ月前の大嵐、それによる損害で村に派遣される筈の救援隊とそれについていった有志の人がなんの痕跡もなく失踪……消失した事件。知ってますか？」

「それは知らないな。しかしそれとその新種が何の関係があるんだ？」

「カチ合うんです。その救援隊が問題なく進んでいると仮定した移動ルートと新種が移動していると仮定したルートが……」

「それは……確かにカチ合ったと仮定すれば新種はこちらに攻撃してくることが判明したな」

「違うんです。攻撃してくるならまだマシンなんです。問題は何もかも消失した所です。分かりませんか？」

そう受付嬢に問いかけられて考え込む。消失つてことは救援隊を仕留めた後に竜車ごと全て持ち運んだのか？それなら何か痕跡が残る筈、なら他には何が？考え込んでも答えが出ないので諦めて受付嬢の方へ向く。

「分からないみたいです、私だつて気付きたくなかつたですよ。だつてこの予想が当たっていたのなら新種はイビルジョー以上に悪辣な捕食者になります。」

その言葉に思わず息を呑む。あのイビルジョーを超えるとはどういうことだ？

「救援隊の物資が丸ごと無くなつたんですよ？中に入つては食料は兎も角、武器などのイビルジョーでさえ食べないものがいっぱいあつたんです。それがゼーンぶですよ？なんならそれらを運んでいた竜車も食べていることになるんですよ？どれだけヤバイか分かるでしょう？」

そこまで言われるとその新種のヤバさを理解してしまう。要するに何でも食べれるということだろう。これにイビルジョー並みの食欲が備わっているのなら見つけ次第すぐに討伐しなければならぬ。

「ならサブクエストはその新種に関わるものなんだな？」

「はい、調査隊が最後の痕跡からの移動ルートと新種の好む生息地から新種が通過、ま

たは滞在している可能性があるのがガルドギアルさん、あなたが行くことになる狩猟エリア内の森林地帯になります。」

「つてことは、その新種の痕跡を探せばいいんだな?」

「その認識で問題ありません。仮に新種を発見した場合、交戦はせずに観察に留めてください。」

受付嬢の発言にこちらの腕が信用されていない気がして少しムツとしてしまう。

「結構腕に自信はあるんだが、ダメか?」

「ダメです。何をしてくるか分からない相手にこちらの有能なハンターさんを出す訳にはいきません。」

これは……もしかしなくてもこちらを心配してくれているのか?それが分かった途端ニヤニヤが止まらなくなる。

「何をニヤけてるんですか!!心配してるわけでは無いんですよ!!ほら!目的地に着きましたから話はお終いです!」

こちらがニヤけてるのが気付いたのだろう。受付嬢が顔を赤くして抗議してくる。そのまま目的地に着いたのかドアを開けて逃げるように中に入っていった。

彼女にも可愛いところがあるんだなと未だにニヤける顔をしながら中に入り、そこにある物に絶句する。

大砲だ。何処からどう見ても大きな大砲である。周りを見てもその大砲以外何もなく、途端に嫌な予感が湧いてくる。その間に落ち着いたのだろう。澄まし顔をしながら受付嬢が説明を始める。

「G級……それも緊急とくればハンターが辿り着くまでに発生する被害はかなりの物になります。そこで！我がギルドは迅速にハンターさんを狩猟地に送り込む装置を開発しました。それがこれになります。」

受付嬢が大砲に指を指す。嫌な予感の中したようだ。

「まさかこれで撃ち出すとか言わないよな？」

「撃ち出します。それ以外何があるんですか？」

お前は何を言っているんだ？という顔をしながら受付嬢は答えてくる。それを言いたいのはこちらである。

「一応聞くけどこれってちゃんと狩猟地に着くんだよな？着かないとか無いよな？」

「走ってください……え？」

「ですから走ってください。大丈夫です。どれだけ離れていてもあなた達なら一時間も走れば到着する所までは飛びます。」

受付嬢の言葉に手が震えてくる。嫌な予感が既に止まらないが一番気になることを聞くことにした。

「ところで天井の屋根の無い部分はいいんだがその周りの屋根つて何でこんなに変な穴があるんだ？そんなデザインなのか？」

「それは過去にハンターさんを送り出す時に射角を間違えん、っん、……いえ、そういうデザインですね。」

こいつ今明らかに間違えたつて言おうとしたぞ！流石にそんな物に撃ち出されると死ぬ未来が見えるので踵を返して部屋から出ようとする。

「うーん、何で皆さん初見だと逃げようとするんですかね？というわけでいつも通りお願いします。」

受付嬢が指を鳴らすと俺たちが入ってきたドアから屈強な男たちが現れてこちらの四肢を掴み持ち上げられる。抵抗するが四人がかりで掴まれるとどうしようもない。

「安心してください。仮に天井にぶつかっても秘薬があります。」

「安心できるかあ！何処に安心できる要素がある!？」

「因みに同じ人で連続でミスした回数はいくらです。」

「今言う必要あったのかそれ!?絶対ないよな!？」

無駄だと分かっているながら必死に抵抗を続けるがそのまま運ばれて大砲に装填される。出ようとするが内部はツルツルしており自力では出れそうにない。そんな時に受付嬢が砲口から何かを入れてくる。

「支給用秘薬です。到着したら使ってください。」

「やっぱり怪我前提じゃないか！頼む、出してくれ！」

「高所からの着地術は訓練所で吐くほどやっていないはずですよ。ではいつてらっしゃいませ、(一)武運を。」

「確かにやったけど！ただの着地と撃ち出されての着地は全然違うし(二)武運をつてどっち?!狩猟?それとも着地いいいいいい!!」

出来るハンターという皮を引つ剥がしてツツコンでいたが重厚な音がすると同時に身体に圧を感じ、あつという間に上空を飛んでいた。下を見ると受付嬢が紐を引つ張っている姿が見えたのであれで射出したのだろう。

そんな姿もすぐに見えなくなり景色はぐんぐんと変わっていく。確かに速いわあと考えているうちにあつという間に目的地が見えてきた。

(このまま上手く着地をつて岩！)

上手いこと着地をしようと着地点を見るとそこにあつたのは地面ではなく大きな岩であった。更に自分がこのまま突つ込めば岩の尖っている部分に刺さるおまけ付きである。

(うおおおお!!なんとか回避いいいい!!)

流石に岩に突き刺さるなんてごめん被るので全力で身体を捻り着地点を逸らそう

とする。何とか刺さるのは回避できたがそのお陰で上手く着地は出来ずに地面に叩きつけられる。肺から空気が無理矢理吐き出されるが勢いは止まらずそのまま湖へと突っ込んだ。

「改めて思い返すと酷いなこれ、湖にガノトトスがいなくて本当によかったよ。それに青年ハンターから詳細を聞いた方がよかったな。」

右手に掴んでいる防具に目を移す。湖から出る前に底で沈んでいたのを見つけたものだ。アイルー装備の胴体部分だが青年ハンターのアイルーなのかは分からない。しかし大きな湖と言っていたので間違い無いだろう。

「中身は……酷いな、焼かれてるってことはリオレイアか？」

故郷に向かっていている時にリオレイアに遭遇、戦闘するが負けたってことか？仲間の亡骸がないことから食われたか？持っていきたいところだが今から狩猟に向かうのにこれは邪魔になりかねないので分かりやすいところに置いておく。

「さて、リオレイアは何処にいるのだろうか」

上を向き空を飛んでいる飛行船に手を振る。彼らにも連絡が入っているはずなのでこちらの目的も分かるはず。

暫く手を振っていると飛行船から光が点滅する。内容は『討伐対象は高台の巢にい

る』か。リオレイアで間違い無いだろう。飛行船に向かってお礼のモーションをしてから高台を目指して走り出した。

高台に到着したのでそのまま高台を登り、巢に入る。中にはギルドの予想通りに雛がおり、その前には雛を守るようにリオレイアがこちらを睨んでいた。

「お前達には悪いがここで死んでもらう。」

愛剣の二振りを引き抜き、構える。こちらが戦う体勢に入ったのを見てリオレイアが咆哮を上げる。

「さて、G級の実力。しっかり見させてもらおうぞー！」

こちらへと撃ち出された火球を躲しつっりオレイアに飛びかかった。

「グウウウ」

弱々しい唸り声を上げてリオレイアが倒れる。何とか立とうとしていたがそのまま絶命した。

「ふう、強敵だった。これがG級の実力か……」

アイテムポーチの回復薬は半分まで減っており、秘薬に関しては全滅。初戦として

はまずまずだろう。

「次はこいつらか」

身体を雛へと向けて歩き寄る。雛達は近づいてくるこちらを見て親に助けを求めるが親が立ち上がることは無い。

「すまないが、お前達を生かしておくわけにはいかないんだ。」

せめてもの情けで一息で首を刈り取っていく。一匹仕留めていくごとに雛達の声が大きくなり何処かに逃げようとするが淡々と処理していく。

やがて静かになった巣から出て空へと依頼完了の意味を込めた銃弾を腰に下げてある特殊な銃に込めて空へと撃ち出す。今回は飛行船が来ているのでこれでしばらくすると回収班が来てくれるはずだ。

後は帰るだけなのだがどうせならサブクエストもやっと思ひ立ち辺りを歩き回るが陥没したような場所があっただけでそれ以外には気になる痕跡が何も無い。前の大雨で消されたかそれともここには寄っていないかのどちらかだろう。もうアイルーの防具を回収して帰ろうかと考えてた時にそれを見つけた。

「これは……アイルーの剣か？」

見つけたそれは刀身だけのアイルーの武器であった。見た目から恐らくジンオウガから作った物だろう。

「この刀身、切断されたのか？しかしリオレイアにそんなことが出来るわけがない。」  
ここまでの自分が考えていたリオレイアに出会って全滅の考えをこの武器の破壊跡が否定する。もしかして例の新種か？と考えてみたがわからん。

「こういうのは他の奴が考えてくれるか。さて、帰るか。」

新種の痕跡も見つかる気配が無いので帰ることにした。青年ハンターにも確認を取らないといけないからな。

湖まで戻り防具をポーチに入れようとしたがここで問題が起きた。

「むう……入らん。」

防具が大きくて中に入らない。持ったまま帰ろうかと考えたが使う武器の都合上、出来れば両手を開けておきたい。

何とか入らないか試行錯誤してみたが入る気配がないので中のアイテムを捨てることにした。

「彼からお礼は払うって聞いてるし、これは捨ててもいいか。」

ポーチからそこそこ大きな鉱石塊を取り出す。これは金策として前のクエストの時に掘り出した物だ。戻ってから売ろうとしたがその前にこのクエストが来たので売れなかったのだ。

地面へと鉱石塊を捨て、代わりにアイルーの防具を入れる。動きに支障がないことを

確認した後、ギルドに向かって歩き出した。

「取り敢えず帰ったら青年ハンターに確認してもらって、その後に受付嬢をしばく。」

「……!!この鉱石美味しい!!」

## 18話

美味しいものが食べたい。最近の自分が考えていることは基本こればかりである。

ことの発端は空から飛んできながら無傷なキチガイハンターが捨てていった鉱石を口にしたことだった。緑色のした鉱石だったので恐らくドラグライト鉱石だろう。今までそれは食べたことが無かったので楽しみにしながら口にしたら今まで食べてきた鉱石よりも一段上という感じがする美味しさはかなり驚いたものだ。ドラグライト鉱石でこの美味しさならこれ以上のレアリティの鉱石はどんなものだろうとワクワクしていたのだ。

そんなワクワクが止まったのは次の日の朝、飛行船が来ていなかったのびのびと最近の楽しみであるリオレイアの巣の中にあるガラクタを求めに行った時だ。中に入るといつもの雛の声はなくそういえば昨日ハンターに狩られてたなと思いついたのだ。ならガラクタも全部食べるかいつものガラクタ置き場に向かったらそこには何も無かった。

恐らくリオレイアを回収してきたギルドの人間が一緒に持っていったのだろう。そこで漸くご馳走が置かれることはなくなると気付いたのだ。そこから更にご馳走が

なくなったら自分の食べ物が増えた味の薄い鉱石とアプトノスしかなくなってしまったことに気付いてしまった。最後に食ったのがドラグライト鉱石ということもあってこの数週間、ずっと美味しいものに飢えているのが現状だ。

——こんなことならあのハンターを攻撃したらよかったかな？けどそれをしたら確実にバレルしなあ。

飛行船が飛んでいたので攻撃するのをグツと我慢していた後悔が今になってやってくる。

——だあああ!! 決めた! 移動する! 美味しいのが食べたい!!

いつものように味の薄い鉱石を食べてる時に我慢の限界が来た。とはいえまた適当な方角を決めて移動するのでは美味しいものに出会えるのか分からないが今回はキチンと行くべき箇所は決めてある。

——目指すはあの薄ら見えてた火山! 鉱石の宝庫なんだから美味しいものもいっぱいあるはず!

善は急げとばかりに口の中に入れていた鉱石を噛み砕き水分を補給してから火山に向けて走り出す。

走り出すこと数十時間、予想よりも遠かったことからかなり時間をかけてしまったが何とかたどり着くことが出来た。時刻はすっかり夜で空には綺麗な満月が辺りを照ら

している。

——着いたぞ火山！何か近くで見ると見たことある感じがするけどそんなことより  
鉱石だ！待つてろ美味しい鉱石達!!

見覚えのある火山だが美味しいものに飢えている現状ではそんなことより美味しい  
ものが食べたいという気持ちの方が大きいので後で考えたらいいやと疑問を投げ捨て  
て火山へと突入した。

数時間後、火山の麓でへばっている竜が一匹。というか自分のことなんだがな。

——まさか火山がこんなにも暑いとは思わなかった。ドリンク抜きだとあのハン  
ターでさえダメージを受けるって時点で気付くべきだったな。

意気揚々と火山に突入したところまではよかったのだ。しかし入って数歩であまり  
の熱に脚を止めてしまった。だがこの身は竜であり、この気温の中でも行けると根拠の  
ない自信で再び脚を進めて探索を始めた。

そんな自信もある程度奥まで進むとなくなってしまった。気温は更に上がり、歩くの  
が辛くなってきたのだ。人間時代の経験からこれ以上は危ないと分かっていたのでか  
なり惜しいがその場を後にして火山から出てきたのだ。その後には火山近くの水辺でへ  
ばっている。

——火球とかは大丈夫なのに暑さはダメとか、属性の耐性と環境の耐性は別ってことか。

このままでは当初の目的である鉱石探しがやりづらくなる。それはとても困る。しかし自分にはこの暑さに対する克服手段を持っている。

——ここまで使い道は無かったが今こそ出番だぞ、適応能力さん！これさえあれば暑さなんて何のそのつてやつだな。ははは、勝ったわ寝床探してこよう。

すぐに鉱石探しが出来ないのは悔しいが数日後には火山で鉱石を貪っている自分の姿を思い描きながら気分良く寝床とついでに食料を探しにいった。

——進歩ダメです!!!あの、適応能力さん。まーだ時間かかりそうですか？

あの日から数週間、近場に何も無い洞窟を見つけそこを寝床にしながら毎日火山に突入しているが一向に暑さを克服する様子がみれない。

入ってから数日で前までと違う感じがした時は克服出来たと思いき気が良くなって

いたが数時間後にへばってしまつて、ただ慣れてただけと気付いた時のショックは凄かつた。

それでも諦めずに火山に突入する日々を続けたがここまで続けても克服する様子が見れないと流石に諦めた。

——このまま続けても流石に無理だよなあ……となるとどうやつて探索しようか……

自分が火山の中で動けるのは大体六時間、探索するには十分だと思ふが帰りの時間も考えなければならず、更にこの火山は思ったより広いので目的のものを決めておかないと間に合わない可能性が高い。

——っていうかこの火山って3シリーズの時の火山だよな、見覚えあると思つたよ。中身はゲーム通りって訳じゃないけど。

見覚えのある火山だが中は違つた。思つたよりも入り組んでおり、見たことある場所もあれば全く見覚えのない場所もある。

——ゲームだとハンターが通れる場所だけがエリアって感じで表示されてたのかな？見たことない場所はハンターだと通れなさそうな道の先にあつたしな。

見たことのない場所の道は溶岩に沈んでいる場所が多く、ハンターだとまず通れないだろう。自分は溶岩を飛び越えられるので問題はなかつた。

「取り敢えずこの火山での行動方針を決めないと。」

火山の中で生活するのは確実に無理だ。かといってのんびり探索して鉱石を探すことも出来ない。ならどうするか？

「火山に突入した後、鉱石を食うだけ食ってすぐに出る。これかな？」

好きな鉱石を選んで食べることが出来ないのは惜しいが文句を言っても仕方ない。火山に入れるだけの耐久力があるだけマシな方だ。

「心の中のティガレックスが言っている。環境適応外でも食欲があれば何とでもなる……と。てなわけでイクゾー!!」

気を取り直して火山へと突入する。熱波が襲いかかるが足を止めていては行動可能時間が勿体無いのでそのまま突っ込む。

「鉱石、鉱石、鉱石、鉱石どこ!？」

火山の中を走り回りながら、地面から飛び出るウロコトルを踏み潰し、全ての眼で辺りを見渡すが鉱石が見つからない。

「ゲームではあった所にも無いし、何処にいったんだ？」

ゲームでは存在しない所にも入って見たがやはり鉱石は見つからない。やがて行動限界時間がきてこの日の探索は終了した。

次の日も昨日と同じで火山の中を走り回っていたがウラガンキンを見つけただけで

特に何の成果もなかった。

——このまま闇雲に探しても意味ないな。何日かに分けて何かがあるかを探した方が良さそうだ。

流石に森林地帯のようにゆっくり探索することは出来ないがそれは仕方ない。そんな訳で数日をかけてゆっくり探索した結果で分かったことが一つ。

——何で火山なのに鉱石が一つもないんだ……。おかしい、絶対におかしい。

どれだけ探しても鉱石が一つも見つからないのだ。まだ奥の方はそこまで探索出来ないのもまだ希望はあるが、どうなんだろう。何か今までの経験上、無いような気がしない。

いつかのように顔が皺くちやピカ○ユウになっていている気がする。そんな感じで諦めきれずに探索していると坂路から赤い玉がこちらに転がってくる。

——何かデジャブ感がするなあ、まあいいか。タイミングを合わせて、

尻尾の鉱石をハンマーのように変形させてタイミングを計って反転し、尻尾を薙ぎ払う。赤い玉は打ち返されて、運悪く崖下へと転がり落ちていった。

——何か落ちていった玉から叫び声が聞こえたけど気のせいだろ。あれはただの赤い玉、ラングロトラでは無いはず、うん。

驚愕といった感じの叫び声を無視して探索へと戻る。この日もいつも通り鉱石が見

つかることはなく、このまま帰るかと思った時にふと真横を流れる溶岩に目が移る。

——そういうえば人間の感覚で溶岩は触れたら不味いつて思ってたけど今の姿ならどうなんだろう？

一度疑問が湧いたら検証したくなるのが自分というものだ。恐る恐る溶岩に脚を入れようとすが直前で脚を引っ込める。

——大丈夫、大丈夫。ちよつとだけだから。ちよつと溶岩に耐性があるか確かめるだけだから……鎧もあるしいけるはず。

意を決して前脚を溶岩へと沈める。少し熱いが耐えられないほどではない。

——うーん、感覚的に耐えられないことはないってだけで大丈夫って感じではないな。あくまで我慢できるってだけかあ。これが分かったただけでも収穫だな。ところで段々脚が熱くなってきたってアツツウ!!

急いで溶岩に沈めていた前脚を引っ張り出す。前脚の様子を見てみるといつもの薄暗い白色ではなく溶岩に沈めていた部分が真っ白に、その近くの部分が白から徐々に赤色に変色し、発光している。

——そういうえば自分の鎧って鉱石製なんだから溶岩に入れたらこうなるのも当たり前か。それでも暫くは耐えられるだけマシな方だな。

発光している部分をもう片方の前脚で触つてみるとかなり柔らかくなっており、攻撃

を防御出来るだけの性能は無くなっている。

——これも当たり前か。溶岩近くにはあまり近づかないでおこう、暑いし。

白熱と赤熱している部分を砕くが、どろりとした粘性のある液体になりこちらの脚に纏わりついてきたので脚を振って周りに飛ばす。完全に飛ばしきつたのを確認してから再度鎧を纏い直し火山を後にした。

今日も今日とて火山探索。地面からこちらを狙って飛び出してこようとするウロコトルを上から押し込み、丁重に地面へと送り返す。何かモグラ叩きをしている感じがして最近の探索中の楽しみにもなっている。

押し込んでるだけなのでウロコトルも諦めずにこちらに攻撃してくるし、自分もまた押し込むだけなので何度でも遊べる。仮にウロコトルが死んでしまってもその時は自分が食べるので問題ない。

火山探索といってる割にはこのモグラ叩きをしている比率の方が高いが楽しいのだから仕方ない。そのうち親玉が出てきそうだが探索中は見なかったのでこの付近にはいないのだろう。

並行して鉱石探しをしているが流石に剥き出しの鉱石はもう無いと理解している。ウラガンキンがいることからこの火山に鉱石があるのは分かるのだが何処にあるのか

は分からない。闇雲に壁を砕いて探してもいいがそれだと時間がかかりすぎる。

ー どうしよう？ ゲームの鉱石があったところあたりの壁を砕くか？ 他の部分を壊すよりかそこら辺から探した方が期待値が高いよなあ。よし、そうするか。

そうと決まればと早速火山へと入ってゲームの採掘ポイントへと向かおうとするが早速問題が出た。

ー あれ？ この道使えなくなってる。

いつもの奥の方に向かうための道が溶岩に沈んでいた。かなりの範囲が溶岩に沈んでおり、飛び越えられるか微妙な距離だ。

ー そこまで急ぎではないし、別のルートから向かうか……

来た道を引き返し、別の道から目的地へと向かう。この道は遠回りになるだけなので一度通つてからは使ったことがない道だ。

暫く歩き目的地手前まで来た時、ふと壁のヒビが目に入る。普段の道からだ壁の影で隠れており見つからなかつたのだろう。それより壁のヒビから微かに見える緑色の石に視線が固定される。

ー おお？ おおお!!? これはもしかしてもしかすると!?

ヒビへと駆け寄り慎重に壁を破壊していく。掘り出した緑色の石は間違いなくドラグライト鉱石だろう。そこから更に掘り進めていくとマカライト鉱石などもゴロゴロ

出てくる。

——うっひょう！ やつと見つけた!! しかも沢山！ それじゃあ！ いただきまーす!!

掘り出した鉱石を手当たり次第に顔口へと運ぶ。久しぶりの鉱石というのもありい  
つもよりかなり美味しく感じる。

——美味しいですわ！ モグモグですわ!! 止まりませんわ！

思わず謎のお嬢様みたいな語尾がつくが気にしない。地面に転がっている鉱石を食  
べ尽くしても壁を砕くとまだ出てくるため気分はフィーバータイムだ。

——本当に久しぶりの主食だから余計に美味しく感じる！ それに壁の中に鉱石があ  
るって分かったんだから、これからは食べ放題だな。まずはこの鉱石たちを食い尽く

「ゴオオオオオオオオオ!!!」

してって何の声？

思考の途中で割り込んできた咆哮に身体を動かさずに眼だけで周りを見渡すと自分  
の後方に鈍い金色の外殻と背中に無数の立ち並ぶ突起を持ち、特徴的な巨大な顎がある  
竜、ウラガンキンがおり、こちらを睨んでいた。

——こんな近くに來てるのに気付かないとか、何かに夢中になると周囲の警戒を疎  
かにする癖そろそろ直さない、いつか痛い目にあいそうだな。

自分の悪い癖を反省しているとウラガンキンが自身の顎を地面に叩きつける。あま

り敵意を感じないことから戦うというよりかこの場から去れという威嚇行為という感じがするので無視して鉱石を食べ続ける。

数度顎を地面に叩きつけても自分のことを見ようともしせずに鉱石を貪っているこちらに痺れを切らしたのかウラガンキンがこちらに近づいてくる。

顎を上げていることから今度はこちらに攻撃してくるつもりなのだろう。こちらも攻撃されるのはごめん被るので尻尾の鎧を硬化させ反撃の準備をする。

ウラガンキンが更に顎を上げると同時にこちらの尻尾の範囲に入ったのでウラガンキンの顔を目掛けて尻尾を薙ぎ払う。

相手も急に反撃されると思つてなかつたのか躲す素振りを見せずに顔に尻尾があたり、倒れた。暫く呆然として地面に倒れていたが自分が何をされたかを思い出したのか、急いで立ち上がった。

「ゴオオオオオオオオオオ!!!」

先程よりも大きな咆哮を上げて顎を地面に叩きつける。感じる気配から完全に思考が排除に移つたようなので、こちらにも鉱石を食べるのをやめて振り返り、戦闘態勢に入る。

ーウラガンキンって確か鉱石が取れたはず。俄然やる気が出てきたぞ。

尻尾を地面に叩きつけ、ウラガンキンを威嚇する。こちらがやる気を見せたからか相

手も再度顎を地面に叩きつける。

「グオオオオオオオオオ!!!」

「ゴオオオオオオオオオ!!!」

お互いに咆哮を上げて、相手の出方を窺う。すぐに突撃してくると思ったが相手は冷静にこちらを見ている。

「ーそういえば自分から大型に攻撃するのって初めてじゃないかな？相手からは来ないようだし、こちらから行くぞ!!」

地面に跡が残るほど強く踏み締め、ウラガンキンに飛びかかった。

## 19話

こちらの飛びかかりに對する相手の対応は迎撃。身体を素早く横に向け、体勢を低くして少し溜めた後に勢いよく押し出す。

こちらの鎧と相手の重厚な外殻がぶつかり合うが素早く相手の身体に前脚をまわして相手の上に乗る。相手から驚愕の聲が聞こえるが気にせず前脚を相手の頭部に振り下ろし地面へと叩きつける。このまま更に追撃をと思ったが相手の下腹部あたりから水色のガスが噴出してきてるのを目にしたので追撃はやめて距離を取る。

ー多分吸うと効果が出るって感じだと思っけど無難に下がる方がいいよな。

こちらが飛び退いても一度出しかけたガスは止まらないのかそのまま噴出される。ゲームの時みたいに頭と尻尾が範囲外になるのなら攻撃するつもりでいたが予想は外れ、相手の身体全体が容易に隠れる量が噴出される。

暫く待つとガスが晴れて相手の姿が見える様になる。結構な力で地面に叩きつけた筈だがその身に傷は無く、まだまだ戦えるところを見据えている。

ーダメージがある様には見えないな。叩きつけた衝撃で歯ぐらひは砕けるかと思っただけだ。

次はどうするかと考えていると相手が動き出す。頭を下げて脚で勢いをつけると同時に身体を丸める。ウラガンキンといえばコレといわれるローリング攻撃だ。勢いよくこちらに転がってくるのをステップで躲し、通り抜け様に尻尾をお見舞いする。こちらの尻尾による攻撃で体勢を崩しかけるが直ぐに持ち直し、途中で曲がると再びこちらへと突撃してくる。

ローワールドだとハジケ結晶とか当てたら転倒するがリアルならどうだ？

転がってくる相手に鉱石弾を撃ち込むが、弾を轆き潰しながらこちらへと転がってくる。先程と同じようにステップで躲して今度は側面に鉱石弾を撃つが効果なし。

ローまあ、ゲームならまだしもリアルであるの巨体にハジケ結晶とか当てても転ける訳ないか。

鉱石槍なら有効打がありそうだが、正面から撃ち込むとさつきと同じように轆き潰されそうだし、効果がありそうな側面だと撃ち込む前に通り抜けられるだろう。しかしこちらには対策がある。

ロー似たような状況なら解決策を含めて見たことがあるんだよなあ！

思い出すのはアイスボーンのティガレックスの初クエストで流れる登場ムービー。ティガレックスの方へ転がってくるラドバルキンに対してティガレックスはそれを正面から受け止めて相手に噛みつきそのまま仕留めてみせた。

ーロードバルキンとウラガンキンで肉質とかいろいろ違いそうだけど姿勢はほぼ一緒だし対して変わらないだろ。多分。大丈夫だよな？

……っしやあ！来い！！

不安感が湧き上がるがそれを抑えて再び曲がつてこちらへと転がつてくる相手にタイミングを合わせて後脚だけで立ち上がり覆い被さるように受け止める。

こちらの鎧と相手の突起が擦れ合い、辺りに火花と音を撒き散らす。前脚で押さえ付けようとするがなかなか相手の回転が止まらない。

ーよし、このままムービーみたいに首筋に噛み付いて窒息死させればこちらの勝ちだ。このまま噛み……噛み……噛みつけねえ！そもそも口が届かねえ！

ティガレックスと自分では骨格も大きさも違うので当たり前なのだが、止めるまでの動きしか頭に無く、骨格とかの関係で無理だとは全く思っていないかった。

何とか噛みつけないかと頭を下げたり胸口を開けたりしてみるのが、頭はどうやっても首には届かないし、胸口は相手との接触面が胴体なのでこちらも意味がない。

そんな無駄な奮闘をしてる間にも徐々にだが押し込まれており、後ろの眼で後方を確認すると近くに溶岩が流れていて、このままだと相手ごと溶岩に突っ込んでしまう。相手は平気だろうし、こちらでも直ぐに出れば問題ないだろうが相手がそれを許すかはわからない。例え上手く出れてもこちらは鎧を一回解除しなければならず、一気に不利にな

る可能性が高いだろうし、出れなければ確実に死ぬ。

急いで後脚の鎧を変形させる。巨大な鉤爪のような形にして地面に食い込ませる。

それでも暫くは押されていたが徐々に相手の回転が遅くなり、やがて完全に止まった。

ーやつと止まった。前脚で押さえ付けてるのに全然止まる気配を見せないんだからかなり焦った。

久々に感じる命のやりとりに心臓がバクバクだがそれを抑えつけて自分が押さえ込んでいる相手を無理矢理地面へと仰向けに押し倒す。

相手が暴れ始めるので左前脚を相手の頭部に、右前脚を相手の胸辺りに置いてついでに爪を食い込ませる。外殻を貫き己の身に侵入する爪に相手が更に暴れるが許容範囲内。この拘束から逃れられることは無い。

ー後は首に噛み付いて相手が窒息死するのを待てばいい。

相手の無防備な首に噛み付く。鮮血が溢れてその痛みに相手が叫び必死に暴れ出す。がまだ大丈夫。これで勝ちだなと思っていると、また相手の下腹部あたりから水色のガスが漏れ出したため一度口を離し、息を止める。

ーこのガスが止まったらまた噛み付いて今度こそこちらの勝ちだな。

ガスを連続で出せる可能性を考えたが別にそれはそれでいい。何度出されようがそ

の度に息を止めて、止まったらまた噛み付けばいい。この体勢になった時点で相手にこちらを押し退ける力が無ければこちらの勝ちが決まったも同然だ。

——いつそのこと喉を噛み千切るか？少し時間がかかるかもしれないけど噛み千切れたら窒息死を待つ必要も無くなる。まあ実行するのはガスが終わってからだな。

相手を押さえつけながらガスが終わるのを待つ。その間にも相手が暴れ続けていて少し押さえつけるのがしんどくなってきた。

——これいつまで出るの？なんかさつきから徐々に力が強くなってきてるんだけど……

相手もここで拘束を解かないと死ぬと分かっているのか抵抗が激しくなる。それも徐々に力が強くなるおまけ付きだ。

——息を止めたまま噛み付くか？けどリスクが高いよなあ……

止めたまま噛みついてても無意識に息を吸ってしまう可能性もある。リアルだと眠ってしまった場合、ゲームと同じで一撃を貰うと起きれるのかどうか分からないため有利な今、そんな賭けに出る必要は無いだろう。

——そろそろ押さえつけるのもキツくなってきたし一度仕切り直すか……。ああ、勿体無い。

既に押さえつけていられるギリギリまで力が強くなってきたので一度拘束を解き、ガ

スの範囲外まで下がる。

拘束が無くなったからか相手はすぐに起き上がり、こちらの飛びかかりが届かない所まで下がった。

「――捕まったら死ぬって思われてるのかな？このまま走り寄って捕まえることは出来るけど、最後の力の強さ的にこいつリミッター外しかけてるんだよなあ。」

力が互角近くになっている為、さつきみたいに捕まえてから無理矢理押し倒すのは無理かもしれない。ならどうするか？

「――有効打を決めてから怯んだ隙に致命傷を入れる。これかな？」

ローリング攻撃はさつきと同じで受け止める方向で、地形の真ん中あたりで受け止めればまだいけそう。溶岩近くだと受け流す方向でいこう。

相手から目を離さずに少しずつエリアの真ん中に移動する。移動が終わると脚の鎧を変形させて掴みやすい形にする。

「――これでローリング攻撃が来てもさつきみたいに押し込まれるってことにはならないだろう。」

相手も身体を揺すって自身に付着している火薬岩を周りにばら撒いている。それを眺めていると相手は尻尾を勢いよく振ってこちらの近くまで火薬岩を飛ばしてくる。辺りを地雷原にしてこちらの動きを牽制しているのだろう。

近くの火薬岩に近づきそれをあえて踏み潰す。もちろん火薬岩は爆発するが鎧に守られてこちらにダメージは通らない。

踏み潰した方の前脚を相手に見せつけてダメージにならないことを知らしめる。相手は唸り声をあげて、こちらの近くに火薬岩をばら撒くのをやめた。

ローリング攻撃は受け止められる。ガスは注意しとけば効かないし、炎のガスになつたら攻撃チャンスでもある。火薬岩は鎧がある限り大丈夫。顎はまだ怖いけど、相手の動きなら見てからでも十分に躲せるしカウンターさえ入れれる。ほぼ勝つたようなもんだな。

相手の攻撃手段を思い出してみるがほぼ全部を回避、もしくは効かないと判断したので既に詰めの段階だ。

ー今回相性は良かったからな。相手からすれば力と巨体が武器なのに、どっちも上の奴が出て来たって感じだしな。

どうやって仕留めようかと考えていると相手が再び丸まりこちらへローリング攻撃を仕掛けてくる。受け止めようと体勢を整えるが相手の身体が突如炎上。驚いて躲してしまった。

ーあ、火薬岩を踏んだのか。急に炎上されたら流石にビビるって。

相手が炎上しながら再びこちらに突っ込んでくるが、炎上した理由も分かったので先

程と同じように受け止める。

——？思ったより力が無いな、死にかけじゃ無くなつたから馬鹿力が出なくなつたのか？

変形させた鎧のお陰で、今度は押し込まれることなく受け止めることが出来た。このままさつきと同じ流れで仕留めようとするが相手の動きが変わる。回転する身体を傾けてこちらの押さえつけから逃れた。

真正面からなら受け止められるが斜めに傾かれるとこちらも押さえきれない。こちらの身体を通り過ぎて暫く走ると停止、反転してまたこちらへと来る。前脚の鎧を更に変形。相手を掴み取ると同時に身体を傷つけられるように変える。

タイミングを見て立ちあがろうとした瞬間、相手がローリングを解除、勢いよく飛び上がりこちらへと顎を叩きつけようとする。

幸い立ち上がる直前だったのでバックステップで躲す。更に地面へと顎を叩きつけて隙だらけの相手に向かって勢いよく突進する。

ぶつけた衝撃で相手の顔が上を向き、首がガラ空きになる。明確な隙を見せたので前脚に力を込める

——このまま思いつきり首を切り裂いて終わり。例え生き延びても呼吸困難か血液が肺に入って息が出来ずに死亡。今度こそ自分の勝——

勝ちを確信したその時、横からドンッと衝撃が来る。

——……………あ？

素早く衝撃が来た方向に目を向ける。そこには前に崖下へと落とした赤い玉があった。

——はあ?! ランググロトラ?! なんでこんなところにな!? つて今はそれどころじゃ!

乱入者に向けていた視界からすぐさまトドメを刺そうとしていた獲物に視線を戻す。そこには上げられていた顎を更に上げて今にも振り下ろそうとしている相手がいた。

——あ……………やっば

本来ならこの程度の不意打ちでもそこまで効果がなかっただろう。四つ脚で直ぐに体勢を立て直し、反撃さえ出来た。

しかし今回は獲物を仕留める為に前脚を上げており、不安定な体勢になっていた。そこから崩れたバランスをとるために頭を下げているわけで……

頭頂部の眼が相手を見る。そして

溜めに溜めた顎の攻撃がこちらの頭部に振り下ろされた。

地面にめり込んでいる竜を見る。最後に赤いのが乱入に来なければ確実にこちらが死んでいた。

この火山に棲家を作ってからかなりの時間が経つ。ずっとこの火山の支配者だった溶岩を身に纏う竜は爆発する拳を持つ青い竜に殺された。その青い竜もそこらにいたニャーニャーうるさい奴らを追い出した後にこの地を去っていった。

そうなれば天敵のいないこの地は天国となった。こちらを殺せる敵は居らず、食料を奪い合う敵もない。有頂天だった。

そんな生活も終わりを告げようとしている。今地面にめり込んで気絶しているこの竜のせいだ。

実力はこの竜が上、食べるものも同じ。自分の攻撃を受け止め、ガスは効かず、捕まったらほぼ終わり、そんな中でギリギリに舞い込んできた幸運によって今、俺は立っている。

俺の渾身の力を込めた最大の攻撃はこの竜の外殻にヒビを入れ、地面にめり込ませる程度でしかなかった。今までこの顎の攻撃をくらった竜は皆、等しく潰れていたのに……だ。

考えた結論は早かった。この地を捨てて逃げる。俺はこの竜に勝てない。次に会えば確実に殺されるだろう。多少の抵抗は効くかもしれないがどうやっても死ぬのはこちらだ。幸運は何度も起こらない。

今、気絶している竜に追撃をすれば殺せるのではと考えたがそれでトドメをさせなければ気絶から目覚めたこの竜に殺されるのは確定だ。

そんなリスクがあるのに攻撃するのは馬鹿のすることだ。俺は確実に生き延びれる逃亡を選ぶ。

火山の外に向けて身体を丸めて転がる。赤いのが未だに竜の近くに居たのが気にかかったが、気にしても意味がないと頭を振って新天地を目指して逃亡を開始した。

火山の麓まで転がってきた。近くの水が溜まっているところで一度立ち止まり火山に振り返る。長年ここで生きてきたこともあり感慨深い。新天地を目指す為にここらで一度、水を飲んで今度こそここからさよならだ。そんな思いで水に口をつけようとし





ガスをばら撒く。

これで竜は嘯むのをやめて離れる筈、そのうちに地面に潜り崖を越えて逃げる。

そう考えていたが竜が口を離さない、それどころか更に嘯む力が強くなる。なんで？ どうして？ 疑問が頭に浮かぶが、息が苦しくなりそんな疑問も飛んでいく。

脚をバタつかせるが竜には届かない、小さな腕で竜の前脚を退かそうとするがビクともしない。

「ゴッーコッ……コ」

視界が歪み、暗くなっていく。酸素が欲しい。頼む、離してくれ。そんな思いも竜には届かない。

次第に身体にも力が入らなくなる。ドンドン意識が遠のき、やがて何も見えなくなつた。

## 20話

噴出していたガスが止まり、こちらを押し退けようとしていた身体は徐々に力が弱くなっている、尻尾は力無く垂れ下がる。

暫く待っても抵抗する様子が見れない為、相手を噛みついたまま持ち上げ近くの崖に放り投げる。崖が崩れ相手が埋まるがお構いなく胸口を開けて生成しておいた鉾石砲を埋まつてる場所に目掛けて撃ち込む。

鉾石砲は相手の身体に突き刺さるがそれでも動く心配が無い。

——これは絶命したって事でいいな。ふう、流石に落ち着いた。

昂っていた気持ちを落ち着かせて、開けていた口を閉じる。ヒビ割れた頭部の鎧を纏い直し、深呼吸をする。

——ラングロトラのお陰ですぐに気絶から目覚めたけど、ラングロトラのお陰で気絶したんだよなあ。思い返してもあの乱入とそれに気付かなかった自分に腹が立つ。

それに逸れたから良かったけどあの顎が眼に直撃したら失明してた可能性があるぞ。現に鎧の中だとかかなり硬度が高いところが砕けてたし。

顎の反撃を貰ってから意識が途絶え、弱い衝撃で目覚めた時に最初に見たものはラン

グロトラの顔面だった。

目覚めてすぐは何故こいつがこんなに近くににいるんだと疑問だったのだが気絶する前の記憶を辿っていくと段々と怒りが込み上げてきた。

その間にもラングロトラはこちらに攻撃をしており、それが更に怒りを募らせる。全身に力が入り、四肢の口が無意識に開く。鎧が身体の筋肉の膨張に適應するようにミシミシと音が鳴る。

こちらの変化に気付いたラングロトラは流石に不味いと思つたのか逃亡を開始しようとしたが咆哮を上げて動きを止める。その間に距離を詰めて前脚で押さえつけてから頭部に噛みつき、力任せに引っこ抜いた。

それでも収まりがつかずに残った胴体部分を滅茶苦茶に踏み潰し、頭部を噛み砕こうとしたところでウラガンキンがいけないことに気付いた。

頭部を食つてる場合じゃねえ！となつて痕跡からなんとかウラガンキンに追い付き、今さつきドメを刺したつて所だな。

ーそれにしても怒り状態ってあんな感じなんだな。普段の思考にプラスで破壊衝動に近いものが湧いてくると。

こちらに害するもの、害したものを潰したい・壊したいという気持ちで怒り状態だと表に出て来やすくなるって感じなのだろう。だから普段なら逃してもいいやつて思う

ウラガンキンの逃亡にも追いかけてトドメを刺した。ラングロトラ？あれは許さん。

——無意識の力の上昇は魅力的だけど、なろうとしてなれるものじゃないしボーナスタイム的なものと思っておこう。

初めての怒り状態の考察をしつつウラガンキンを引つ張り出し、そのまま胸口で喰らっていく。

——巨体だから食い応えがあるな。それだけで仕留めた甲斐があったというものの。次の個体を見つけたら餌候補として有りだな。

ローリング攻撃を受け止めてから押し倒して首に噛み付けばいける筈。睡眠ガスの対処法も分かったからもう効かないしな。

睡眠ガスは吸えばアウトというのは分かっていたので胸口で噛み付いた時に前もって胸口の鉱石袋を鉱石でギッチギチに詰めておいた。それで胸口は呼吸をしない開閉する口になるし他の部位は吸い込む心配はない。

——とか噛み付いたならそのまま鉱石槍とかを撃ち込めたんじゃないか？……うん、次に試してみることにして帰ろうか。

ウラガンキンを食べ終えたので火山に戻ろうと身体の向きを変える。自分の来た道を見ればそこには怒りのままに走ったお陰で足跡がくつきりと残っていた。

——うわあ、これ全部消さないといけないの？けど消さないとハンターに見つかる可

性能が上がるしなあ。はあ……頑張るか。

ため息を吐きながらチマチマと自分の足跡を消しながら帰る。怒り状態の意外な弱点かもしれないなあ、これ。

次の日、いつもの様に火山に入り鉱石を探す。何回かスカがあるがゲームの採掘ポイント近くは比較的鉱石を見つけやすい。どうやらあのウラガンキンがこの支配者だったらしく、制限時間までゆつくりと探すことが出来た。

ー それにしても火山内ってウロコトルとリノプロスしか居ないな。てつきりアイルーもいると思ってたから前から考えてた広範囲攻撃を使えるかなって思ったんだけどなあ。まあ、居ないなら居ないでいいか、始末する手間が無くなるし。

リノプロスはこちらに向かって突進してきては勝手に気絶している。ゲームの時は肝心な時に突進してこちらを吹き飛ばす敵側からすればファインプレーを何度も繰り出してくる奴だが今となっては可愛いものだ。

近くを通れば必ず突っ込んでくるがこちらとしては犬がじゃれついて来ているように感じてほっこりする。鉱石が見つからなかった日は食料にもなるので助かる。

ー 後は一回ウロコトル達の巣にも行ってみたいんだけどあの細道はどう頑張っても無理だよなあ、リスクが高すぎる。

自分の記憶が正しければ確かあそこには二つほど採掘ポイントがあつた筈なのだがあの場所に行くには道中にある細い道を通らなければならない。下は勿論溶岩な為、少しでも足を滑らせると即座に死亡が確定する大変危険な場所だ。一度別のところからよじ登ることも考えてみたがそちらも上から溶岩が滝のように流れているので諦めた。

——奥に行くほど鉱石のランクが上がってくるのは分かつたから行きかけたんだけどなあ。上がダメなら下に行くしかないか。

ゲームだと存在しない地下は意外と道が続いており、しっかりと注意しながら進めばまだ深くまで行けそうだ。

——次は地下の探索だな。出来ればもっとレア度が高い鉱石も食べてみたいな。

次の目的が決まったので、火山を後にする。暑さの耐性が欲しいなあ。

あれからかなりの時間が経っているが地下の探索は意外と難航している。こちらに時間制限があるのも原因の一つだが、地下は落石などで道が塞がれたり、自分の身体が通り抜けられない道があるので壁を砕いて通れるように広げたりと進むのに一々手間がかかることが多いのだ。落石なんて砕いたらいいと最初は思ってたのだが、それが溶岩を堰き止めていたりする場面が時々あるので迂闊に破壊することは出来なくなっている。

——落石を潰した途端、溶岩が流れて来た時は死んだかと思つたよ。一気に胸辺りまで沈んだし、本当に都合良く近くに高台があつてよかつた……いやマジでほんとに。

ちなみにその溶岩は違う位置から落石を持ってきてキッチンと塞いでおきました。じやないと使える道がなくなるからな。

そんなヒヤツとすることもあつたが収穫もあつた。メランジエ鉱石などのレア度が高い鉱石を見つけたことだ。味についてはコメント出来ないくらい美味しかったし、ここまで来てよかつたと思えるぐらいの価値はあると思う。しかしメランジエ鉱石などのレア度だとなかなか見つからないので帰りを考えると一個食べたら十分というレベルだ。

——いやあ、ポポを食べに凍土に行くティガレックスの気持ち分かるわ。確かに美味しさを知つてたら自分に合つてない環境でも行こうとするわ。

そんなことを考えつつ道を作っていく。メランジエ鉱石などを効率良く食べる為に自分が通りやすいかつ使いやすい道を自作している最中なのだ。一から道を作つてると溶岩溜まりに注意して壁を砕かないといけないので時間がかかつたがその甲斐あつてかなり奥深くまで来ている。

——ここまで来たらもういいかな？後は横にも道を作つて他の場所に繋げたら完成だな。つてあれ？道が繋がつたか。

壁を砕いていると少し広めの場所に出た。周りを見渡してみるが目の前に落石があるだけで他には特に目ぼしいものはない。

——自分の作った道以外から入って来れるのは人間サイズって感じだな。自分の作った道があるから広げる必要もないし無視でいいや。それで次はこの落石だな。

目の前の落石を見る。横から押してみると問題なく動くし溶岩が漏れ出てくることもなかったので退かしてみると塞がれていた先から熱風が襲いかかる。

——道を塞いでるタイプか。んでこの先はつと……広い空間だな。意外と歩けるところもあるけどそれ以外は溶岩の海だなこれ。

顔だけで覗いてみるとかなりの広い空間が広がっており、所々に遺跡みたいなものがあるがそれ以外の周りは溶岩の海でそのお陰か更に気温が上がっている。下を見渡してから地面へと降り立つと更にその全貌が見える。

——凄いなここ。この場所と壁以外全部溶岩の海だ。それと自分が降りてきたところはおそこか、壁から登っていけば戻れるから問題なさそうだな。

帰り道と帰り方を確認してから歩き出す。こんな奥地なのでそれ相応のものがあるに違いない。そんな思いで辺りを探索するが目ぼしいものは見つからない。

——何もないな、時間を損したただけかあ。それにしてもこの場所も何か見覚えがあるんだよなあ……

頭を捻ってみるが思い出せない。多分ゲーム関係だと思っただがそれが出てこない。

ーうーん、何だろう？一つのフィールドで他に移動する場所が無い……あ！決戦場か！思い出せてスッキリしたわ、はっはっはっは

……これもしかしてかなり不味い状況？

嫌な予感とは当たるもので今の状況を理解するとほぼ同時に地面から溶岩が噴出する。辺りに地響きが起こり、目の前から溶岩を押し上げながら巨大な大牙と黒い外殻を持った巨竜が姿を現した。

ーあー、完全に思い出した。ここ溶岩峡谷かあ、んで目の前にいる巨竜さんはアカムトルムだなあ。どうしよこれ？

ゲームでは討伐のし易さの割に素材が高く売れるのでアカム銀行やらATMと呼ばれていたが目の前の巨竜は正しく別名である覇竜の名が相応しいと思う程の威圧感がある。

取り敢えず戦うのは論外、それに自分の制限時間がかなり迫ってきている。そんな状態で戦っても死ぬだけだ。

ーうーん、ダメだわ、逃げよう。

素早く決断し後ろに下がりながら脚の鉱石を変形させて壁を登りやすくする。その間にも相手は少しずつこちらに近づいてくる。

変形が完了したので後ろの壁に向かって全力疾走……と見せかけて相手の方へと走り出す。逃げると思っていたものが近づいて来るので相手は少し反応が遅れている。

——不意打ちで怯ませてから逃げる。じゃないと絶対に捕まる。

相手の実力を信用して前脚で頭部を叩き潰す振りをして後ろへ下がる。反応が遅れているのにも関わらず相手は見事にそのまま前脚を振り下ろしていた場合の場所に噛み付いている。

フェイントをしなかったら今頃自分の前脚は相手に噛み付かれている事実にはゾッとしつつ相手が見せた明確な隙に反転し全力で尻尾を薙ぎ払う。相手の頭部に当たり少しだけ体勢を崩したのを後頭部の眼で確認してからそのまま急いで壁に飛び移り自分が入ってきた場所を目指して登っていく。

——うおおおおお!! 全力で爪を食い込ませて壁を這い回るんだ!

初めての壁走りということもあり、なかなか進めない。それでも進まないと思死に死ぬので必死に登る。

自分の入ってきた場所に近づいたのでチラリと相手の様子を見てみると意外なことに最初にいたところから全く動いていない。

——壁に飛び移った時点で追いつけないって思ったのかな? けど何でこっちに軸合わせて踏ん張る体勢に入ってるのかなあ? ははは、全速前進だあ! 急げえ! 絶対これ



ー生きてるって素晴らしいな……いや、本当に。

ソニックブラストの直撃を受けて壁に叩きつけられた後、粉碎された壁の先が運良く自分が入ってきた場所に繋がっていたので溶岩に叩き落とされることはなく命拾いをした。

ー鎧を硬化させたのも良かったな。それでもボロボロだけど……

それにしてもリアル設定のアカムさんのソニックブラスト威力強すぎるよ……誰だよATMとか言ってた奴、一度このリアル産アカムとあってみろよ価値観変わるぞ。

地面に倒れたまま愚痴る、破壊された壁から向こうの様子が見えるがアカムトルムはこちらに興味を失ったのか溶岩へと潜っていった。

ー命拾いしただけ良かったと思う。制限時間もキツイし帰るか……

そういえばアカムって真紅蓮石とか獄炎石とか取れたっけ？それだと確かに奥地にお宝はあつたって事になるなあ、取得難易度はクツソ高いけど。

動いたびに全身が痛むが何とか立ち上がる。所々が砕けたりヒビが入ってる鎧を修復した後、身体を引き摺りながら歩き出し火山を後にした。

アカムトルムにぶつ飛ばされてから数日後、問題なく身体が動くようになったので再び火山にやってきた。最初はまたアカムトルムに遭遇するんじゃないかとビクビクしていたが少し奥まで来ても出てくる気配がないのでゲームの設定通りに火山奥地の溶

岩峡谷から動く気はないのだろう。

——それでも出てこないって決め付けはしないでおかないとな。あいつ生態ムービーで普通に奥地から出て来てるし。

周囲にアカムトルムの出現予兆がないかを確認しながら鉱石を掘る。見つけた鉱石は食べないで胸口に放り込む。

——順調に集まってるな。食べる時が楽しみだ。

寝床で休んでた時にあまりにやる事がなくて思い付いたことなのだが、自分の見つけた寝床は意外と奥行きに余裕があり、広い。そこでその場所を鉱石でいっぱいにしてから一気に食べるという贅沢喰いを試してみたいと思ってしまった。

それで今、その計画を実行するべく鉱石を食べないでこうして集めている訳である。

——取り敢えず、一週間ぐらいを目安に集めていこう。寝床いっぱい鉱石って迫力あるんだろうなあ。

そんなこんなで集め始めてはや一週間、自分の寝床ではいっぱい以上の成果があった。大半はドラグライト鉱石や紅蓮石だが、所々にメランジエ鉱石などのレア度が高い鉱石も入れている。

——ふふふ、この一週間、寝る前に何度喰おうと思ったことか……早速食べようって

言いたいところだけど、さつき火山で腹ごしらえしてきたところだし起きてからにしよう。どうせならお腹が空いている時に食べたい。では、お休みなさい！

気分的には明日が楽しみで寝れない子ども的な感じだが、時間ギリギリまで火山で行動してたこともあってすんなりと意識が落ちていった。

ーおはようございます！さあ、鉱石達！今から食べてやるか……ら？

次の日、鉱石を食べる自分の姿を思い描きながら起きると、あんなにいっぱいあった鉱石は少ししか残っておらず、代わりにその近くでメランジエ鉱石に頬擦りしている女性が一人、それを苦笑いで見ている男性が二人いた。

ー………はあ？

## 21話

ガタゴトと竜車が走る。デコボコとした悪路のせいで振動が尻にくるのを顔を顰めながらも我慢して武器の点検を行う。

「また武器の点検をしているの？昨日もやってなかったっけ？」

「またとは何だよ、こういう点検をこまめにする事で早めにガタがきているかどうか分かるって訓練所でも言ってただろ？」

振動で痛めたのか尻をさすりながら幼馴染で同じチームの女性ハンターであるサラヤが呆れながらこちらに話しかけてくる。いつものように返答をすると分かっていたかのように溜息を吐いた。

「こんな投げ売りされてた武器なんて点検しても変わらないでしょ。私達みたいな駆け出しはもつとランクを上げて、自分の武器を作ってからの方がいいんじゃない？」

「確かにそうだろうけど、ランクが上がらないからこうやって少しでも長く使えるように点検してるんだろ？」

普通ならハンターになったばかりの駆け出しは狩場に赴き、最初に簡単なクエストを行いなから草食竜を狩ったり、鉱石を採取したりして素材と金を貯め、武器と防具を造

る、又は強化する。

それと肉食竜を狩る事によって効率的な狩り方や自分にも出来るると自信を身につけ、次は肉食の小型モンスターに挑戦する。そこで狩る事が出来たのなら、狩人の駆け出しは終了だ。

そして再び武器と防具を強化するのだがこの頃は大半が金銭に余裕がない。なので推奨はされていないが小型肉食竜から剥ぎ取った牙や爪を自身の武器に巻き付けたりして少しでも強化をし、今度は小型肉食竜のリーダーに挑戦する。

それでも無事に狩れたのなら街ならまだ初心者と言われるが、村なら一人前のハンターとして名乗れるだろう。

ここまでが駆け出しから初心者までの道のりだ。なら自分達は何処にいるかという和一応、初心者にはなっているがそこから先に進めないと言った感じだ。

僕達はずっとチームで行動しており、そのお陰か他のハンター達よりか楽をできている。しかし他のハンター達が手に入れる報酬は分けなければならぬ。そうなれば必然的に何もかもが足りなくなる。

折角、肉食竜のリーダーを狩猟出来たのに武器や防具を強化するお金がない。貯めようとも狩りとは常に危険と隣り合わせ、ちよつとしたことで怪我をして、それを治すために購入する回復薬で少ないお金が更に少なくなる。その結果、誕生したのがいつまで

経ってもボロボロの装備を使っている僕達という訳だ。

「はあ、夢見たハンター生活がこんな貧乏になるなんて思ってもいなかっただわ。」

「それ言うの何回目？それを打破するためにこの儲け話に飛びついたんだろ？」

「だってそろそろ村のみんなの目もキツくなってきたんだもん！しょうがないじゃん！」

「あー、うるさい声で叫ぶな。目が覚めたじゃん。」

「お、ザフくん遅いお目覚めだね。悠長に寝やがってこの野郎！」

サラヤが騒ぐことで僕達の最後のメンバーのザフが起きる。寝起きということもあり、まだボケーとしていたザフにサラヤが飛びつく。

後ろで二人が騒がしくなるのを尻目に先程のサラヤの言った村のみんなのことを思い出す。今までは仲良く出来ていたのだがここ最近になって急に厳しい視線を向けてくるようになったのだ。

その原因である人物に目を移す。童車で見えないがこの列の一番前に座っていることだろう。

「なあ、実際今回の儲け話って本当だと思うか？」

「お前いい加減に……！あ？そうだな、俺はあんまり信用してない。態々別のクエストを受けてから合流しろとか言ってきたしな。分ける必要なんてないだろうって思う。」

「良いではないかあ。ん？私も信用して無いかなあ、こんなに竜車を用意してついでうのも変だし、狩猟エリアからとつくに離れてるよ？」

それだ、この竜車の数は四人だけなのに八台も使用している。更に狩猟エリアから離れており、許可もない狩猟などは禁止されているはずだ。

村へとやってきた彼は自身を上位ハンターでギルドの信頼も厚いと語っていたが、それが本当でもエリア外での狩猟は犯罪になる。

頭に密猟という文字がよぎる。僕は知らない間に犯罪の片棒を担がされてるのはないか？そんな不安が湧き上がり、今すぐにも引き返したいがそれは出来ない。

「上位ハンターのお誘いを蹴ったボロボロ駆け出しハンターなんて村のみんなに思われたら僕達は村に居られなくなるからなあ……」

村のみんなは変わった。それも仕方ないことだと思う。立派な防具と武器を持ったハンターとボロボロな防具と有り合わせの素材を武器に括り付けているハンターなら誰もが前者を選ぶだろう。

そんなハンターが上位のハンターの機嫌を損ねようとしていたら例え長年一緒に住んでいたとしても村から放り出すぐらいはしてもおかしくない。

いつそのこと村から出て町に行くか？村にいても今のままだとずつとこのままな気がする。この考えを二人に話そうとするが前の方から聞こえてきた声に遮られる。

「お前らー！そろそろ目的地だぞ！」

「……!!、そろそろ僕らも覚悟を決めないとな。危険じゃなければ良いけど。」

「藪をつついてガララアジャラが出るってこと?」

「本当に出て来たらあの人は兎も角、俺らは全滅だな。」

前の竜車がゆつくりと止まっていく、僕達の竜車が止まるのを確認してから降りて、先に準備していた彼の元へ向かう。

「それでボルペオさん。僕達は何をしたらいんですか?」

「それを今から説明するからついて来てくれ。」

そう言つて彼が近くにある洞窟の中に入っていく。お互いに顔を見合わせ、ここまで来たら行くしかないかと頷き合い、追うように洞窟に入る。

洞窟の中は思つてた以上に広く、明るい。辺りを見渡しながら奥へと進んでいくと、次第に奥にあるものが見えてくる。それが何かを理解すると僕達は知らずに走り寄つていった。

「これは……凄い。こんな山盛りの鉱石なんて初めて見た。」

そこにあつたのは煌びやかに光る鉱石の山だった。山の大半は緑色に光っており、こちら一帯の鉱脈から採れる物だとしたら恐らくドラグライト鉱石だろう。他にも紅蓮石やマカライト鉱石などの鉱石も顔を覗かせている。

「そうだ！ボルペオさんは？何処に行ったの？」

「ボルペオさんならあつちにいるよ？」

サラヤが指差す方を辿ると確かにいた。何やら大きな岩の前で首を傾げている。

「ボルペオさん！説明が欲しいんですけど〜!？」

「こんな岩あつたか？いや、持ち込んだのか？……分かつてる！ちよつと待つてろ、すぐに行くから！」

彼に声をかけると返事をしてすぐにこちらへと寄つてくる。

「まあ、見てわかるだろうが、クエストの帰りにこの鉱石の山を偶然見つけてなあ。持ち帰りたいが人手が足りねえ、だからお前らを呼んだつてわけだ。」

「と、いうことはこの山を竜車に積み込めばいいんですね？」

「そういうことだ。俺の竜車に積み込んで、余つたのをお前らにやる。どうだ？やるか？」

「分かりました、それでいいです。」

「手だけじゃあ、やり辛いだろうからこれを使い、だいぶ楽になる。」

ほれつと渡された大きな袋を受け取る。それを二人に渡してから鉱石を次々に詰め込み始めた。

詰め込み初めて数十分。詰め込んで、竜車で出す。これを繰り返す。鉱石の山は少し減って来た具合か？そんな時にある物を見つけた。

「なんの鉱石だろう？綺麗だな。」

手に持った白い鉱石を見つめる。角度を変えて見てみるが透き通っておりとても綺麗だ。

もつと見ていたかったが、横から伸びて来た手に中断される。手を辿ってみるとボルペオさんがジツとその鉱石を見つめていた。

「ボルペオさん？」

「……次からこの鉱石を見つけたら優先的に回収しろ、いいな？お前らもだぞ!!」

彼が大声で僕等に注文をつける。そこまで言うということはかなり価値のある物だと思うが、彼の様子を見る限り掠め取ることは出来ないだろう。すっぱりと諦めて次の鉱石を袋に詰め込んだ。

あれから数時間、特に話すこともなく黙々と作業を進め、鉱石の山がかなり少なくなつて来たあたりで竜車が満タンになった。

もう積み込めなくなったので洞窟から出る。彼もこの成果に満足そうにしている。

「これだけあればかなりの大金になるな。残りは約束通り、お前らにくれてやる。この後は何か予定でもあるのか?」

「これから貴方に言われて受けた別のクエストに行きます。簡単な物なので数時間もかからないでしょう。」

「おおう、確かに言ってたな。ならもう一つ、そのクエストが終わっても数日は村に帰って来ないでくれ。」

「それはどうしてですか?何か不都合な事でも?」

「こんなにも鉱石を持ち込むんだ。暫くは村もてんやわんやするだろう。それに更にお前らの鉱石を持ち込んだら鉱石の価値が下がるかも知れねえ。それはお互いにとつても都合が悪いだろう?」

彼の言い分に確かに一理ある。なので頷くと彼は笑顔で竜車に乗り込む。きつとこの鉱石で得られる金額を想像しているのだろう。

そのまま彼を見送ろうとするが途中で止まりこちらに振り返る。

「分かっていると今回事はギルドには言うなよ?バレたらお互いタダじゃ済まないし済まさないからな?」

こちらに凄んでから再び竜車が出発する。七台の竜車が完全に見えなくなつてから

張り詰めていた息を吐く。

「どう思う?」

「やっぱり何か胡散臭いよね、別のことを企んでそう。」

「本当に村に帰っていいのか不安になるな、説明があつたけど数日空ける意味がよく分からん。取つてつけたような理由にししか聞こえないな。」

二人に意見を聞くと二人とも彼に不信感を持っているようだ、なら考えていた町に行く話をしてもいいかも知れない。だが、その前に。

「僕にも考えがあるけど先にクエストを終わらせてしまおう。その後にもたここで話そう。」

「確かにそうね、意義なし!」 「同じく」

クエストが終わり、再び僕等は洞窟まで戻ってきた。中を慎重に見て回るが生物の気配はなく、静かなままだった。

「それで？ 考えつていふのは何だ？」

「ああ、二人とも彼に不信感があつて村に帰るのは嫌だろ？ なら村に帰らずにそのまま町に向かおうと思つたんだ。ちょうど向こうで活動できる資金も手に入ったし。」

「それは良い考えだと思ふが、こんな駆け出し用のポロポロ装備を着たハンター達が持つてきた鉱石をギルドが素直に買い取るか？ 普通に何処かの村から盗つてきた物だと怪しまれないか？」

「ドラグライト鉱石とか混ぜつてるから確かに怪しまれそうだな。けど売るのはギルドにじゃない。町のすぐそばにある屋敷の主人に売るんだ。サラヤも知ってるだろ？」

「確かに鉱石に目が無いのは知ってるけど、それと同じくらいあの人、私の胸にも視線を向けてくるんだよね……」

そう言いながら防具越しに自分の胸を隠す仕草をするサラヤに苦笑いをしてしまう。「売る時は僕が行くから安心して、サラヤが居れば売値が上がるって言われてもそんなことのために嫌な思ひをさせたく無いからね。」

「おう、ここぞとばかりに好感度を稼ぎに来たぞ。私の好感度を稼いでも添い寝ぐら

いしか出来ないよ?」

「それはいいけどその動きをやめろ、普通にキメエ。」

「何だとー、貴様ー!」「うわ、何するやめろ」

こちらの発言に頬を押さえてクネクネするサラヤにそれを引いた目で見つめるザフが苦言を漏らすとサラヤが怒りながらザフに飛び掛かる。

纏れ合いながら地面を転がっているがお互いに口角が上がっていることからいつものじゃれあいみたいなものだろう。

暫く見つめてから手を叩き、注目を集める。二人がこちらを向いたので今回の纏めを行う。

「それじゃあ、僕達はこの鉱石を竜車に積んだら、町外れの屋敷に売却に行く。それからそのお金を使って町の生活基盤を作りながらハンターとして活動しよう。二人ともそれでいいね?」

「意義なし。」「私も無いよ。」

「よし、それじゃあ、早速この鉱石達を積んでいこう。目ぼしいものは少ないけどしっかりとお金にはなるからね。」

今後の行動を纏めてから鉱石の方へと向かう僕達をサラヤが追い抜き、こちらに振り返る。

「サラヤ? どうしたの?」

「ふっふっふ、目ぼしいものがないと言いましたね? ファクシ君?」

「そうだけど、どうしたの? 急に変な言い方して?」

「そんな貴方に! これが目に入らぬ……あれ? 取れない……」

急に自身の胸に手をつ突っ込んだサラヤが何かを探しているようだが、こちらとしては目の毒だからやめて欲しい。

チラツとザフの方を見ると彼は手を頭の後ろに組んで上を見上げていた。

「むむっ、全っ然! 取れない! もういいや! 見てるの君達だけだし!」

サラヤが叫んだと思っただけならいきなり胴部分の防具を脱ぎ出した。突然の暴挙に止める暇すらない。

「ちよっ?! サラヤ! 何やってるの!!」

「別にインナー姿だからいいじゃん、それよりこれを見てよ!」

こちらの抗議を無視してサラヤが手に持っている物を突き出す。それはあの時、ボルペオさんが優先的に回収するように言っていた白い鉱石だった。

「これって……よくバレなかったね。」

「竜車に積み込む時にこっそりと胸に隠しといたの! あのボルペオって人も私の胸しか見ない奴だからバレるかも知れないってずっとヒヤヒヤしたわ。」

「確かにサラヤの無駄にデカイそれなら隠せるかもな、だからと言って実際にやるのは馬鹿だけど。」

「馬鹿とは何よ！馬鹿とは!!」

ザフの呟きにサラヤが詰め寄る。ニヤニヤと笑ってることから先程のじゃれあいの続きでもと思っているのだろう。

(サラヤ、気付くんだ。ザフは必死に目を逸らしてるんだぞ。)

二人を見ているから分かるがザフは今のサラヤを視界に入れまいとしていた。それをサラヤも理解したのか満面の笑みを浮かべている。

もう少し二人のじゃれあいを見たいが、不必要にここに滞在するのは良くないので止めようとするが分かっていたかのようにサラヤが距離を取る。

「まあ、私が言いたいのはあの変態男が優先的に狙ってたこの鉱石さえあれば、私達の資金にも余裕が出るってことよ!」

「きつとこれが私達の再スタートになるの!手に入れた場所は良くないけれど、きつとこれは今までボロボロ装備で頑張っていた私達に対するご褒美よ!」

そう言って彼女は白い鉱石に頬擦りをする。確かに僕達に足りない物は金だった。ならそれが満たされれば次のステージに行けるのは確定したようなものだろう。でも早く防具を着て欲しい。

ザフをチラツと見ると彼も同じ思いなのかこちらを見た。その偶然に思わず二人して苦笑いをしてしまう。

そんな時だった。それが起きたのは。

「あ?」

「え……?」

「は?」

ポシユ!と何か軽いものが撃ち出されたような音がしたとほぼ同時に左肩に衝撃が来た。飛び出る鮮血と左肩に突き刺さった石の針みたいな物を視認すると同時に激痛が来る。

あまりの激痛と動かなくなった左肩に混乱するが何とか状況を把握しようと辺りを見渡す。

サラヤには何も無い、しかし何かを呆然として見つめている。ザフは僕と同じように石の針が右脚に刺さっている。膝をついていることからいつものように歩けないかも知れない。

まずはサラヤにザフの回復を任せて、そのうちに僕はこの襲撃の相手をしなければ、そこまで思考した時だった。

パキツ……と音がした。

痛みで浮かぶ汗を拭いながら何とか音の方へと向く。そこには大きな岩と書いていたものが立ち上がるうとしていた。

「うう……っ、サラヤ！ザフの回復を！急いで!!」

「え？あつ、うん！分かった!」

針を抜かずに回復薬だけを飲んで血を止める。痛みが引いたので僕は動けるがザフは針を抜かないと動きに支障が出るだろう。

その間に岩が姿を変え終え、こちらを見る。その姿は凶鑑や訓練所の授業でも見たことがなく。分かることはこの竜は大型モンスターに分類されるということだ。

大型、いつかは挑むと思っていたが今になるとは思ってもいなかった。しかも見たことがない種、授業や凶鑑で覚えてたこのモンスターは〇〇が得意とするという情報が一切分らない。

「こやし玉があれば……!」

こやし玉は一つ前のクエストで使い切っており、今は手持ちにない。僕はこの竜を片腕だけで足止めをしなければならぬ。

竜はこちらを見つめて動かない。しかし竜からはギリギリ、ギリギリ、と齒軋りのような音を上げている。

覚悟を決め、竜を睨む。大丈夫、足止めなら僕でも出来る！根拠もない自信だけを持って竜に駆け寄ろうとした。

「グルウオオオオオオオオ!!!」

竜が吼える。それと同時にそれぞれの四つ脚の一部分が開き白い粒子を噴出する。胸が開き、涎がその中で糸を引いている。こちらを食らわんと牙がギラリと光った気がした。

あまりの変貌に足が止まる、必死に進もうとするが足が怯えて震えているのか進めない。い。

(違う！僕は怯えてなんていない！これは咆哮の衝撃で止まったただけだ！)

自分に言い聞かせる。片腕で脚を殴り、何とか震えを抑える。

(よし、これならいける！戦える！)

震えが収まったので竜を睨み、一步踏み出そうとした。しかしそれは余りにも遅すぎた。

「グルウオオオ!!」

「!?チィ！退け！サラヤ!!」

「え？きやあー！」

竜が治療しているザフ達に飛び掛かる。直前でザフが気付き、サラヤを突き飛ばしたがザフは間に合わなかった。

竜がザフを押さえつける。ザフも必死に逃げようとしているが臂力が違いすぎるため逃げれない。

「クソォー間に合ってくれ！」

全力でザフに駆け寄る、しかしそれよりも竜が脚を振り下ろす方が早かった。

「ザフ!!」

辺りに振動が走り、膝をつく、ザフの無事を信じ、砂埃が晴れるのを見つめる。やがて砂埃が晴れると見えてきたのは竜の脚とその下から漏れる赤い液体だった。

「ザ…………フ…………？」

思わず呟く、しかし竜は止まらない。

脚を上げ、また振り下ろす。また上げ、下ろす。何度も何度も何度も振り下ろす。もう死んでいるのに、何が気に入らないのか念入りに潰そうとする。

「グルウオオオオオオ!!」

竜が吼え、先程のより更に力を込めた一撃を振り下ろす。その一撃は洞窟中を揺らし亀裂を入れた。

「あ……あ、ザフが……ザフ……が」

「フアクシ！逃げるよ！あの竜がザフに気を取られてる間に!!」

こちらに走り寄ってきたサラヤが僕の肩を掴み出口に向かう。聞き方によつてはザフを見捨てたように聞こえるが、サラヤの顔を見ると涙で濡れていることからサラヤも辛いはずだ。

出口が近づいてきてこのまま逃げれると思つたが竜が追いつき先回りされる。先程と同じような姿で、しかし前脚だけはザフの血で真っ赤に染めている。

「うう、何か、何か無いの!？」

サラヤが必死にポーチを漁る。竜がゆっくりと近づいており、いつ飛び込んでくるかわからない。竜が体勢を低くし、飛び掛かろうとしている。

「あつた！これなら！フアクシ、目を閉じて！」

ポーチの中から閃光玉を取り出し、地面に叩き付ける。辺りに閃光が走り、竜が怯む。(閃光玉が効いた？ということは視力がある?)

再びサラヤと一緒に出口に向かう。竜の隣を通り抜け、あと少しというところでサラヤの手が肩から離れる。

「え？きやああああ!!」

「!!?、サラヤ!!」

振り返ると竜の尻尾に脚を貫かれ、持ち上げられているサラヤがいた。竜に滅茶苦茶に振り回されて、なすがままになっている。

「待ってて！今助ける！グウッ」

サラヤを助けようと竜に駆け寄るがサラヤが突き刺さったままの尻尾で殴打され、吹き飛ばす。地面を転がり、壁にぶつかって漸く止まる。壁にぶつかった時に肩の針が動き、再び出血する。衝撃で咳き込むが何とか息を整えようとする。

「やめて！離してよ！」

自身の脚を貫いている尻尾を何とか抜こうとしているサラヤだが上手くいっていない。竜はそんなサラヤの姿を見てから口から地面に先端が鋭利な細長い石を撃ち込む。

それで何をするつもりだと思ふ間も無くサラヤをそれに突き刺した。

「ギイ!? オゲエ、……………いや……………」

「サラヤ！クソ！そこを退けえ！」

サラヤを助けようとするが尻尾をサラヤから引き抜いた竜が立ち塞がる。武器で斬りかかっても、こちらを突き飛ばすだけで何もしない。

「ふう……………、ふう……………、抜け……………ない……………」

サラヤが必死に自身の胴体から背中を串刺しにしている石から抜けようとしているが自身の血で滑って上手く掴めていない。それどころか自重で更に深く刺さっていつ

ている。

「サラヤ！サラヤア！」

「ごめ……ん……、ファ……クシ……逃……げ……て」

最期にそう言い、サラヤは力尽きた。最期の抵抗なのか自身のポーチからありつたけの閃光玉を落として。辺りを光が満たし、竜の叫び声が聞こえる。光から目を庇い、サラヤを見ると腕がダラリと垂れ下がり、ピクリとも動かない。全体重がかかったせいか刺さるスピードが上がリ、針の下の部分まで下がっていった。

「う、うう……逃げなきや……」

前がボヤけて見辛い。それが涙だとは分かっているが、拭う時間すら惜しい。洞窟の出口に向かって走る。僕の後ろから竜の足音がする。きつと僕を追いかけているのだから。

「後、少し……もう、少し！」

洞窟の出口が近づき、光に目を細める。ここから出たらすぐに竜車に乗って逃げないといけない。逃げ、逃げ、逃げ、逃げ。

洞窟から出て竜車に走る、そして竜車に飛び乗ろうとした時、あんなに日差しが眩しかったのに急に影が差した。

「えっ……？グウ！」

頭上から衝撃が来たと思う間も無く、地面に叩きつけられる。竜が僕に追いついて脚で押さえつけているのだらう。叩きつけられた時の衝撃で竜車をひいていたアプトノスが驚き、逃げ出した。

最後の逃亡手段が無くなった。僕も動けない。完全に詰みだ、もうどうすることもできない。

それでも諦めるわけにはいかない。全身に力を込め、竜の脚を退けようとするがびくともしない。

竜の顔がこちらに近づく。僕を食べるつもりなのか？反射的に目を閉じてしまう。

しかし竜は僕では無く、僕の肩を刺し貫いている石の針に噛み付いた。何故それかと疑問が頭に浮かび、至近距離まで近づいた竜の顔を見て、後悔した。

目が合った。石で出来た外殻の奥に見える竜の眼と。そして目が合ったことにより感じる凄まじい怒りの感情。

「ヒイ!?な、何で……、グウアアアアア!!」

何故そんなに怒っていると疑問が出る前に肩から激痛がくる。竜が僕に刺さっている石の針をゆつくりと抉るように引き抜いているからだ。

暴れ回りたいが竜の脚でがっしりと押さえつけられているので動けない。嫌な音を出しながら針が抜けていく。

やがて針が抜けてそれは竜の口に収まる。バリバリと咀嚼音が響いた後、竜の顔が再びこちらに向いた。

「はあ、はあ、次は何？何をするつもり？」

この竜はわざと僕らを痛みつける行動を取っている。なら次に僕を殺す攻撃をしてくる可能性は低い。

また石の針か？腕を噛みちぎるか？と竜の行動を予測しようとする。竜は僕の全身を押さえつけるように脚を移動させ、力を入れてくる。

全身からミシミシと音がする。かかる力は徐々に強くなる。この竜は僕を踏み潰すつもりらしい。

「う、うう。誰か!!誰かいませんか!助けて下さい!お願いします!」

近くに誰か来ている可能性に賭けて大声をだす。しかしここはエリア外であり、他にハンターがいるわけがない。

竜の力が強くなる。鎧はひしゃげていき、変形に耐えきれなくなつた留め具が弾け飛ぶ。

「ひゃれか……ひゃれかお願いしひやす!ひゃれか!」

変形した鎧に顔を潰されていき、まともに声も出せない。それでも僕は声を出すしか無かつた。

（何で、何でこうなった？これがギルドの掟を破ってエリア外で活動した罰とでもいうのか？それなら確かに僕らが悪い。だけどこれは……これはいくら何でも酷すぎだ。）  
メキメキメキメキメキメキメキメキメキメキメキメキ

グチャ

ーいつか失明しそう。いや本当に。何でどいつもこいつも閃光玉を投げなの？  
パツと見たら自分って目があるように見えなはずなんだけど何でだろうな？

最後の一人を踏み潰し、洞窟の鉱石を置いてあるところまで戻る。道中に倒れている

女性ハンターを踏み潰し、地面のシミにしておく。

ーあーあ、残つてた鉱石はこれだけかあ、本当にやってくれたなアイツら。

少なくともった鉱石を食べていく。その美味しきで少し怒りがマシになる。

ーこの洞窟は放棄だな、ハンターも殺つちやつたし搜索来るかなあ？けどあんな貧乏なハンターの為に搜索出すかな？

今回やつたハンターは全員の装備がボロボロだった。試しに飛びかかった時も反応が鈍かつたし、逃げる時なんてこちらに目を向けようともしなかつたことから恐らくハンターに成り立ての可能性が高い。

ーだからゆつくりと殺せたのだけどな。ご馳走様。

鉱石を食べ終えてから洞窟を出る。その道中でヒビが入る程度の力を込めて壁を叩いていく。

外へと出てから尻尾の鉱石を變形。巨大なハンマーの様にしてから洞窟の入り口目掛けて思いつきり薙ぎ払う。

入り口に大きなヒビが入る。そこから中のヒビを入れていた部分が繋がっていき、振動と共に洞窟が崩れ落ちた。

ーこれでよし、流石にギルドも危険と隣り合わせのところで搜索する為にこんなところを掘り返したりしないだろ。

この崩落は自然現象として処理されるだろう。もしモンスターの行いと判断しても中を探ることはしないはず。

——さて、次は何処を寢床にしようかなあ、つて……ん？

ふと道に残っていた竜車の轍に視線が向く。きっきの竜車かと思つたがそれにしては数が多い。

少し考えた後にその轍を追つてみる。暫く追うと轍の横に鉱石が落ちているのを見つけた。

——これつてもしかして、自分の鉱石を持つていったやつか？自分が寝てから起きるまで数時間、その間に持つていったとしたら……よし、追うか。

追いつけるかとも思い轍を辿り始める。本当は走つて追いかけたいところだが、この竜車は人のいるところに向かっている可能性が高いため、出来る限り隠密をしながら追いかける。

所々で落ちている鉱石を食べながら見つからないように追いかける。やがてその竜車を見つけたのは丁度竜車が村に入った所だった。

——間に合わなかつたか。ここからじゃ中の様子が見にくいからちよつと移動するか。

その場から静かに後退し、移動を開始した。

「……ここからならよく見えるな。さて、自分の鉱石を持っていったやつは……あいつか。」

村を見渡せて尚、見つきりづらい好都合な場所を見つけたのでそこに陣取り、村を見つめる。村では丁度広場の方で人ばかりが出来ていた。

広場で自分の集めた鉱石の山を背にしてその男は何やら演説らしいものをしていった。声は聞こえないが手振りからするに強大なモンスターを激戦の末に倒してこの鉱石の山を手に入れたらしい。

そんな彼の動きに村の大人達は感心するような態度をとり、子ども達は興奮気味に動き回っている。

「……へえー、凄い大激戦だったんだなあ。へえー、ふーん、ほーん？なら……実演しよつか。」

本当なら侵入に気付かなかった自分が悪いと落ち着いた今ならそう思い、見逃しても良かった。だけどあんな演説を見せられてはこちらも黙っていられない。

「……二、三日は観察だな。それで不都合が無かったら、夜に襲撃する。相手は強大な

モンスターを倒したハンター様だ、苦戦は必須だからしっかりと観察しないとね。

そう思いハンターを見つめる。無意識にまた、四つ脚の口から白い粒子が噴出していた。

## 22話

村の襲撃を決めてから数日後、ある程度の情報が集まったので纏めていこう。

この村にはギルドは無い。これは朗報だ。村人達はみんな何かあると男性ハンターを頼りに行くことからハンターも彼しかいないのかもかもしれない。

次に昼は村人達はそれぞれの仕事に向かうのでバラバラになる。村から少し離れた所で作業する人もいるので襲うには不適切。夜もその日の作業量によっては夜遅くまで作業している人もいるが深夜には家に戻っているので大丈夫そうだ。

村の真ん中辺りには櫓があり、常にここに一人が常駐している。櫓の中には鐘があり、モンスターが近づいてきたら鐘を鳴らして村人達に危機を知らせている。

そして運良く一度だけ鐘を鳴らしている所を目撃出来た。村人達は鐘の音を聞いたら来る人は村にある大きな家に集まり、扉を閉める。その扉の前に防具を着た村人が陣取るって感じた。最初は防具を着た村人もハンターだと思っていたが、この事態になる以外は鍛冶屋で働いているので違うだろう。それと村の外や外周辺りにいる村人が鐘の音を聞いた時は人によつては間に合わないかと判断したのか大きな家には集まらずに自分の家に引きこもったり、村の外に逃げ出す人もいた。

村の外に逃げるのは逆に危険だと思うのだが村人には村人なりの考えがあるのだろう。暫くしたら帰って来ることから何処か村の状況を見れる所に隠れてるのだろう。

最後に村人が誰か居なくなれば搜索は村の中と外周までならするがそこから先は行わないし、村の警戒度も上がるみたいだ。何故そんなことを知ったのかというところ。

ー食べちゃったんだよな、子ども……

寝起きであくびをした時に背口の中に何か落ちたような感触がして確認したら中に子どもがいたのだ。何故こんな所にいるとか色々疑問が湧いてきたが子どもが泣きそうな顔になった時に黙らそうとしてつい口を閉じてしまった。

牙のある口を閉じたら中がどうなるかは明白な訳で、結局食うことになった。村人達を逃す気は無いので遅かれ早かれこうなることになっていたが襲撃前に余計なことをしてしまったと反省している。

そのせいで襲撃を数日遅らせることになったし、そもそも人が来る可能性のある場所で何を呑気にあくびなんてしてるとか自分を責めたりとか色々あったがそのお陰で村の対応を見ることが出来たので良しとしよう。

この騒ぎは男性ハンターが何処からか狩ってきたジャギイを子どもを襲った竜としたことで収まった。周りに群れがいなかったため、はぐれ個体だったのかな？

ーある程度、村の対応は見れたしあのハンターがジャギイを狩ってきてから状態も

少し落ち着いた。よし、行くか。

日が沈み、夜空に綺麗な満月が浮かぶ。この世界は前の世界に比べると夜でも明るいので慎重に村へと進む。自身が歩く際に鳴る鎧が砕ける音は周囲の虫が奏でる音で掻き消してくれている。

ーよし、ここまで来たら届くかな？

村の近くまで近づき頭を上げる。櫓の様子を見ると今回は不真面目な奴が担当しているのか櫓にもたれかかり、頭を上下させている。

これは都合がいいなと顔口に鉋石弾を生成、ゆつくりと見張りに狙いを定めて、発射、命中。

見張りは喉に突き刺さった鉋石弾を押さえながら櫓から落下、頭から落ちたので生きてはいない筈。

落ちた時の音で周りが気付かないかとヒヤヒヤしたが静かなままなので気付かれてはいないだろう。一番邪魔な者を排除したので村へと侵入する。

改めて村を見渡すが地味に広い、全て排除するには時間がかかりそうだ。

ーえーと、確かこの家だったよな？あのハンターの住んでた場所。

孤立している民家の前まで来て、慎重に扉を開けようとしたが力加減が分からず壊してしまふ。辺りに小さな破壊音になり、民家の奥から人が来る音がする。

「ーミスった……いや、これはチャンスか？」

少し距離をとり、家の中からだとこちらの姿が見えない所に移動する。暫く待つていると中の人が玄関まで近づいて来た。

「何で扉が壊れてるんだ？誰かの悪戯か？」

男性が玄関から外を覗き込む。その姿を確認すると同時に首目掛けて尻尾を突き刺す。

突き刺した男性を引き摺り出し、眼前まで持つてくる。声を出せなくしているのでマジと観察する。

「ーこんな顔だったか？もしかして別人？けどあのハンターがこの家に入ったのは見たんだけどなあ……」

絶命した男性を背口に放り込んでから考え込む。家のサイズ的に一人用だしハンターが居候しているとしたらこちらの撃退のために出て来てはるはずだ。

「ー様子見をするために家に隠れてる？だとしたら手出しできないなあ、家を壊すと周りにバレるし。」

家の中を覗きこめればいいのだがサイズの無理だ。頭を玄関に突っ込むと家が潰

れる。

——出て来ないなら先に周りを逃げにくくするか、その後家ごと攻撃する。

背口に両側を棘みたいなの鋭い刃をつけて真ん中より少し先端寄りに重りをつけた鉋石を生成し、重ね合わせ一つの鉋石塊にする。それを空へ角度をつけて発射。空中で鉋石塊は分離し、村の外周へと突き刺さる。これを数度行い村の外周全てに突き刺した。お手軽なマキビシみたいなものだ。用途は少し違うけど。

——これで村から外へ出るには時間がかかるし無理に出ようとすれば傷付いて出血する。仮に逃げられてもそれを目印に追えばいい。

この攻撃の主な役割は対象を傷付けること。それで出血させ、地面に血痕を残させて後からそれを追いかける。殺傷力も勿論あるがそれはオマケだ。一番大きな背口から発射するのでかなりの広範囲を攻撃出来る。一度空へと撃ち出すので攻撃力は落下速度に頼っているのが問題点だが先端寄りに重りを付けているので刃は確実に下に向いて落ちるし木の板程度なら貫通出来るはず。

——けどこれってハンターやアイルーが遠くまで逃亡しても追いかける様について考えたけど、普通に考えたらあいつら回復道具を絶対に持つてるし防具もつけてるから意味ないんだよなあ。気付いた時は完成してからだだったし、戦闘中に頭上から硬質な物体が落ちてくるっていうのはこちらには有利になるから使うけどさあ。

本来の目的が本来の標的には何の意味もないことに気付いた時は落ち込んだが別の用途があることに気付いたので立ち直った。

この攻撃はシンプルに鉋石雨とした。矢の方が分かりやすいかと思ったが雨の方がしつくり来たのでこちらを採用。

外周への準備は済んだので今度は村の中だ。再び鉋石雨を生成し、発射。降り注いだ鉋石雨は民家へと突き刺さっていく。一部は家の屋根を突き破り、家の中に落ちていたが当たってる可能性は低いだろう。

降り注いだ位置を確認して角度を少し調整すれば問題ないと判断したので再び生成、準備が出来たら順次撃ち上げていく。

村人達も屋根に刺さる音や屋根を突き破る音で何かが起きていると気付いたのか少し騒がしくなってきた感じが気にせず撃ち上げる。

ーー思ったより屋根を潰すまで時間がかかるな。面での攻撃だから効率が悪いのかなあ。

そんなことを考えていると鈍い鐘の音が聞こえた。音の方角を見てみると屋根を突き破った鉋石雨が鐘と接触して鳴った様子だ。

ーうわ、今ので完全に何か起きてるってバレたな。とつとつこの民家を潰すか。

後脚だけで立ち上がり、目の前の民家に向かって倒れ込む。木で出来た民家はそれに

耐え切れずに倒壊する。

「――あれ？いない？数日前に確認した時はこの家に入って朝まで出て来なかったんだけどなあ。」

朝まで出て来なかったし、出てきてからすぐに仕事に入ってたので、この家をハンターのものだと確定させてその後は見てなかったのが今回は裏目に出たらしい。

「――まあ、そのうち出てくるでしょ。それまでは村から人が出ないようにしないとね。」

周りから叫び声や泣き声が聞こえ始めた。恐らく誰かに鉱石雨が当たったのだろう。さて、ハンターはいつ来るのかな？

「かあく、うめえ！この酒は最高だなあ！」

机に置いてあるつまみを口にしてまた酒を流し込む。シユワシユワとした喉を焼くような感覚が堪らなく好きだ。

「有り金叩いて買い込んだ甲斐があったぜ。このつまみも最高だ。」

少し前に一気に金を稼ぐことが出来たのでその金で買った酒だ。つまみは数日前に村の者に頼み込んで買ったものだがこの美味しさなら朝まで家に居座った甲斐がある。「この村の俺の立ち位置は決まったようなもんだ。前にいた奴らの評判は地に落とせた。鉱石も数日前に商人が買い取ってくれたし最近は運が良い。」

この村に帰ってきた時に少し演技をして一台だけあいつらに竜車を盗られたと言っただけで村人達は前からずっと一緒にいたハンター達を見限った。少し考えれば分かるはずなのに大半の村人達は俺の機嫌を損ねないように必死なようだ。ギルドから目をつけられて町から逃げてきたがこうなるのならもっと早く町を出ればよかつたな。適当に見栄えのいい装備を着てランクを上位と偽装してギルドから信頼されると嘘をつくだけでこんなにも待遇が良くなるのだから。

「後は帰って来たあいつらを盗人扱いすれば終わりだな。いや、あの女は手元に置くか？」

村に帰ってきたあいつらに居場所なんて無い。今回のことで完全に見捨てられたからだ。俺が仕組んだことと騒いでも村人達の信用は完全に俺に向いているので無駄だ。今まで使っていた店もあいつらにはもう何も売らないだろう。村を出ていこうとも金が無いので必ず何処かで野垂れ死ぬ。そうやって困ってる時に俺が女に優しく声をかけてやればいい。

あの女はこちらの要求を嫌がるだろうが他の二人も援助してやると言えば領くしかない筈だ。後は適当に楽しんでから捨てればいい。

「あー、早くあいつら帰ってこねえかな。数日じゃなくてきちんと日時を指定すればよかつたか？」

女の体つきを思い出して舌舐めずりをする。そんな時だ。

「？何か外が騒がしいな。何かあつたか？」

酒でふわふわした思考が外の異変を察知する。そのまま意識を外へと向け状況把握を行う。

（叫び声か？こんな夜中に？それに屋根に何か当たってるな。てっきり雨だと思っていたがこの間隔は雨じゃねえ。攻撃か!？」

思考の途中からの予測に思わず声が出る。それを裏付けるように鈍い鐘の音が鳴り響き、村人のものであるろう叫び声や泣き声はつきりと聞こえてくる。

「冗談じゃねえぞ！見張りは何をやってやがんだ!!」

瞬時に酔いを飛ばし壁に立てかけてあつたランスを手に持つ。ヘルムを被り、蹴り飛ばすように扉を開ければ村の惨状が目に見え込んでくる。

「何だこれは……どうなってやがる。」

しゃがみ込み、地面に突き刺さっているものを引き抜く。手のひらより大きい石のよ

うなものは先端に棘のようなものがビッシリと生えている。辺りに目を配るとそれが道いっばいに突き刺さっていた。

「屋根に当たっていたのはこれだったか。どうしたもんか。」

「ボルペオさん！助けて下さい！」

対処法を考えていると横から声が聞こえてくる。そちらに目をやると脚が切り傷だらけの女性が子どもを抱えながらこちらへ脚を引き摺りながら駆け寄ってくる。

「無事だったか。早く集会所へ行け。」

「その前にボルペオさん、この子に回復薬を譲って欲しいのです。お願いします！」

よく子どもを見ると肩あたりに石が突き刺さっており、必死に声を押し殺していた。

「道具屋には行かないのか？そこにも回復薬はあるはずだ。」

「もう潰れていました。だからどうか、どうかお譲り下さい！」

言外に譲る気はないと言ったが女性は食い下がってくる。めんどくさくなってきたので突き飛ばそうと考え始めた時に上から石が降ってくる。

「チー！危ねえな！」

盾を頭上に掲げて石を防ぐが目の前にいた女性は地面に倒れ込んだ。頭頂部に飛んできた石が突き刺さっている。即死だ。

「あー、死んだか。仕方ねえ、おい坊主。早く集会所に逃げろ。……聞こえてんのか？早く集会所に逃げろって言っただよ。」

女性が倒れたことで一緒に倒れ込んだ子どもに声をかけるが返事がない。起こすぐらいならしてやるかと思ひ手を伸ばしたところで頭から血を流していることに気付く。

「こいつも死んでんじゃねえか。倒れ込んだ時に地面に刺さってたやつにやられたか。」

この間にも石は降り続けているが徐々に落ちてくる数が減ってきている。横を見ると石がまだ降り続けているので着弾点がずれてきているだけのようだ。

「この石を撃ち出している奴がいるはずだ。そいつを叩けば解決するはず……何処にいますか？」

こんな攻撃しか出来ないやつだ。遠距離主体だろうし、きつと近づけば何とかなる筈だ。恐らく村の外からだろうと視線を外に向けようとすがその途中で村の中から空へと石の塊が撃ち上がるのを目にして固まる。石の塊は空中で分裂し、落下。地面に突き刺さる。

視線を撃ち上げられた所に向ける。民家の裏に何かがある。身を低くし、隠れて行動しているようだが巨体を隠し切れていない。

「大型モンスターじゃねえか。しかも村に入り込まれてる。これは俺には無理だな、逃げるか。」

思い入れも何も無いので素早く村を切り捨て行動を開始する。家に戻り金品が入った袋を手にして大型とは別の方向へ移動する。道中は石や、村人の遺体がゴロゴロ転がっていて歩きにくい。時々瀕死の村人がこちらに手を伸ばしてくるが無視して進む。「チツ、これだつたら酒を大量に買い込むんじゃないかな。まだ少ししか飲んでいねえってんのに。お陰で金が少ねえ。」

これだと逃げてもひもじい思いをする。ここ数日で贅沢な暮らしに慣れてしまったのでもう少し金が欲しい。

「仕方ねえ、適当な家から盗むか。どうせ住んでる奴も死んでるだろうし俺が有効活用してやるよ。」

横にある家の扉を壊して中に入る。家の中はガランとしていて静かだ。念の為辺りを見渡し、人がいないことを確認してから物漁りを始める。

「これだけか。もう少し欲しいな。」

また隣の家に入り漁る。金を手に入れたらまた隣へ。漁っているうちに欲が出てまた隣へ。それを繰り返す。

「よし、これだけ貯まれば十分だろう。結構真ん中の方に来てしまったし、早くこんな村からおさらばするか。」

金品を纏め、家から出る。駆け足気味で道を進み曲がり角を曲がったところで硬直す

る。

「この！どけ！どけよ!!」

「グルルルル」

防具を着込んだ鍛冶師が石の竜に押さえつけられていた。大型のナイフのようなもので石の竜の脚を斬りつけているが効果があるようには見えない。

「くそ……！おお！ボルペオ殿！ちようど良い所に！早くこの化け物を討伐してください！」

（こつちを向くんじゃねえ！気付かれたじゃねえか！）

鍛冶師の顔がこちらに向く。声が喜色に染まっていることからヘルムで顔が見えないが、きつと笑顔だろう。その声を聞いて石の竜の顔がこちらへ向く。

「ははは！この人の力があれば貴様なんざすぐに討伐してくれペエ」

高笑いしていた鍛冶師の声がグチャツという音がなると同時に途絶える。石の竜が彼を踏み潰したからだ。彼が頑丈さを売りにしていた鎧は紙層のように踏み潰され、顔の見えないヘルムの隙間から血が流れ出ている。

石の竜が彼を退けてこちらへ向く。じつとこちらを見つめているだけなのに口角が上がっているように見えた。

見つけた。そんな幻聴が聞こえた気がした。

ー やつと見つけた。全く見つからないから逃げたかもって焦りかけてたよ。

あまりにも見つからないので片っ端から家を潰していこうかと考え始めた時にやつとハンターが現れた。その手には大きな袋を握っており、大量のアイテムをかき集めてきたのかも知れない。

これは長期戦になるか？と身構えたがハンターが反転して逃亡を始めた。

ー いやいや、やつと見つけたのに逃がさないよ。

ハンターはまだアイテムを集め足りないのだろうか？だったらアイテムを集め終わる前に捕まえたほうがいいかもしれない。

必死に逃げるハンターだが歩幅が違いすぎるためこちらがぐんぐんと距離を詰める。それを横目で確認したハンターが隣の民家に飛び込んだ。

こちらも民家を破壊してハンターを追いかけるが一度民家で身を隠されたことで姿を見失い、再補足する間に距離を取られる。

「ーならこれはどうだ？」

背口を開き鉋石雨をハンターを中心点として放つ。分裂した石の雨は彼が左手につけている大きな盾を頭上に掲げることですべて弾かれる。

「ー盾も傷付いてはいるんだけど表面だけかあ。流石に突き抜けるのは無理だなあ。」

そんな事を考えている間にまたハンターは民家に飛び込んだ。同じように破壊して進むがこのままだと同じことの繰り返しになる。

走りながらハンターに向かって鉋石槍で狙い撃ちをする。彼も盾でそれを防ぐがさつきの攻撃より威力が全然違うため辛そうな声を出す。

少しずつハンターとの距離が近づいていく。彼も先程と同じように民家に飛び込もうとするがそのタイミングで鉋石槍を撃つことよって失敗することも増えてきた。

「畜生！どうとでもなりやがれ！」

ハンターが走りながら手に持っていた袋を投げ捨ててランスを展開、ゲームなどでよく見る突進の構えをとる。

こちらへ猛進して来るのでタイミングを合わせて尻尾を頭に目掛けて薙ぎ払う。尻

尾が頭に当たる直前でハンターがしゃがみ込み、回避する。からぶった尻尾はそのまま民家を破壊して止まる。

強引に家を破壊したので辺りに砂埃が舞い、ハンターの姿を覆い隠す。

「見失った。また追いかけないと。ていうか袋を投げ捨ててたけどアイテムじゃなかったのか？」

砂埃が晴れてから辺りを見渡しハンターを探すが見当たらない。この辺りは見晴らしが良くハンターが逃げようとするなら必ず見つけられる筈だ。

「何でいない？隠れた？」

なら手当たり次第この辺りを踏み潰していくかと考えていた時、目の前の藁が揺れた。

「へっ！油断したな！くらいやがれ!!」

藁を吹き飛ばしながらハンターが飛び出しこちらへ猛進する。瓦礫を足場に飛び上がりランスを突き出した。こちらの胸に。

「いやあ、探す前に自分から出てきてくれて嬉しいよ。」

「は？何だよそれ！離しやがれ！」

突き刺さる直前に胸口を開けてランスを受け入れる。胸口の中にランスを持つ手まで入ったところで胸口を閉じ、彼を捕まえる。

彼もこちらから逃げ出そうと盾を胸に叩きつけ抵抗しているが全く痛くない。しかし鬱陶しくなったので顔口で盾を啜えて持ち上げる。

「ーしまった。このまま顔口で頭を噛み千切れればよかったな。けどこれで抵抗も出来ないしアイテムも使えないな。さて、どうしようか。」

つま先だけで立っているハンターが叫びながらこちらを蹴ってくるので前脚で彼のガラ空きの胴体を叩く。変な体勢で威力が出ないため、念の為に数度叩くとハンターが大人しくなるが変わりにオゴオという音の後にヘルムの隙間からゲロが出てくる。

「ーうわあ、虹色加工しないとイケないもの出すなよなあ。ヘルムの中が凄いことになってそう。」

ハンターの様子を見ると何やら震えている。痙攣なのかな？注意深く見てみると何やらぶつぶつと呟いている。

「ふざけやがって、ふざけやがって、ふざけやがってええええええ!!」

ハンターが叫び、再び暴れ始める。盾の方の籠手を器用に外し、腰につけている剥ぎ取りナイフを取り出し啜えられている右腕に突き刺し斬り離れた。

「ー凄い事するなあ。自分の腕を斬るって勇気があるぞ。」

こちらから脱出し、数歩後ろに下がったハンターがポーチを漁っている。その間に胸口に入っていたランスと彼の手、顔口で啜っていた盾と盾に括り付けていた籠手を食べ

る。

「へへっ、化け物がよお……。これさえあればどれだけ傷付けられても怖きやねえ……。」

片手でヘルムを脱ぎ捨てたハンターがポーチから赤い袋を取り出す。秘薬の袋と似たような模様などがついてることから、いにしへの秘薬だろうか？

「ーまたそれか、秘薬より効果が強いだろうし腕でも生えてくるのかな？」

ハンターがいにしへの秘薬を飲み込むが、効果を見たいのでそれを見守る。飲み込んで暫く経つが効果が出てるようには見えない。

ハンターが怪訝そうな顔をしながら袋の中身を全て飲み込むが何も起きない。

「何故だ？何故効果が出ない!?……もしかしてあの商人、俺に偽物を掴ませたな!!」ならあの鉱石の山も買ひ叩きしたってことか!!」

ハンターが叫び、腕の血を辺りに振り撒きながら暴れる。何処かで見たことあるのでまた偽物のパターンだろう。

「ー結構この世界って偽物もあるのかな？ギルドとかが取り締まってそうだけど。」

偽物なら見たものは何も無い。トドメを刺すべくハンターに近づいていく。

「はあ、はあ、んぐっ、はあ、ふふっ、舐めんじやねえぞ！化け物があー！ヒヤハハハ！」  
ポーチから回復薬らしきものを飲んで狂ったような笑い声をあげながら剥ぎ取りナ

イフをこちらに向け、凶悪な笑顔を見せながら突っ込んでくる。目は血走っており、正気を保つてるようには見えない。

——何か急におかしくなったなあ。まあ突っ込んでくるならありがたいけどね。サヨナラ。

タイミングを合わせて前脚を振り下ろす。彼は回避する素振りを一切見せずに踏み潰された。

辺りがまた虫の奏でる音だけになる。真っ赤になった脚の鉱石を砕き、再び纏い直す。

——そういうや閃光玉とか何も来なかったな……。あとは村人だけか。

鉱石雨を再び撃ち始めて村の中心に向かう。もう撃つ必要もないと思うが念の為だ。暫くすると村の中心部にある大きな家に辿り着く。扉の前から道まで血痕がついていることから鉱石雨はしっかり効果を發揮しているようだ。そしてここに血痕がついているということはこの家に人が数人は集まっているはず。

尻尾の鉱石からお馴染みになっているハンマーを生成。家の真ん中辺りに狙いを定める。

——バラバラに逃がしたら追いかけるのが面倒だから纏めて潰す。

尻尾を振り下ろす。家の真ん中が潰れるが結果を見ずに尻尾を振り上げ、無事な部分

にまた振り下ろす。これを繰り返して家を完全に潰す。

——これでよし、これで生きてたら逆に凄いわ。

潰れた家の隙間から赤い液体が流れているから大丈夫だろう。今度は村の外周に向かい村から出たものがないか確認する。

——ここは大丈夫、ここも、ここは……多分一人逃げたな。

確認中に一箇所だけ血痕が続いている場所があったので追いかける。暫く追いかけていると脚を引き摺っている男性がいたので後ろから鉱石弾を後頭部に撃ち込み絶命させる。

——これでよし。後は村の処理かあ。

村に戻り辺りを見渡す。壊れた民家。倒れ伏す村人。地面に刺さりまくっている鉱石雨。

——……これ全部処理するの？民家に隠れてるかもしれない村人の搜索を含めて？本気で言ってる？

その後、黙々と処理し続けて全部終わった時には朝が来てました。はい。

——しかも自分の鉱石が何処にも無いじゃねえか！畜生め!!